725
11

0038302000

0038302-000

７２５－１１

日本名婦伝

竜居松之助・著

北斗書房

昭１２

AGG

435

725
11

龍居松之助著

本名婦傳

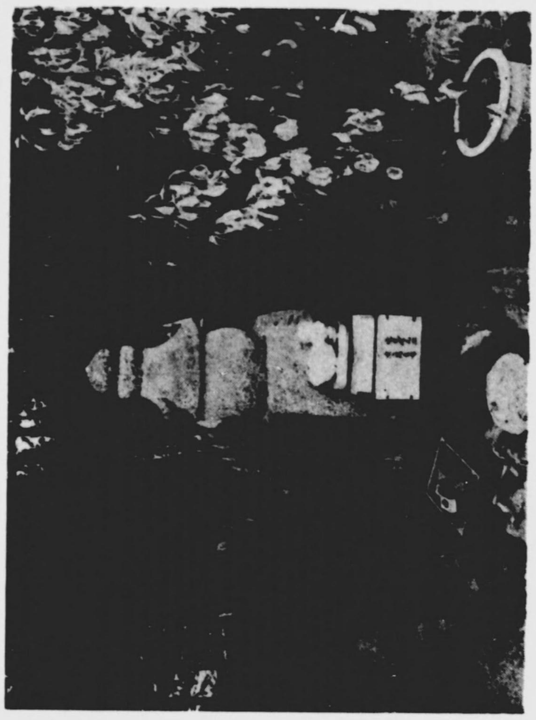
北斗書房版

光明皇后の御容姿を寫し奉つたと傳へる十一面觀世音像
（奈良法華寺）

小町文塚（京都山科隨心院、此處が小町の住居跡と傳へられる）

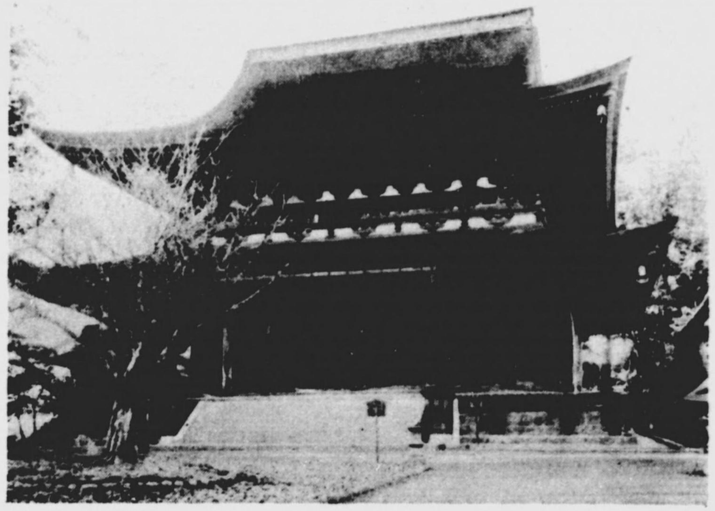
淀城阯（淀君の名の起つたといふところ）

祇王寺縁起（京都嵯峨祇王寺蔵）

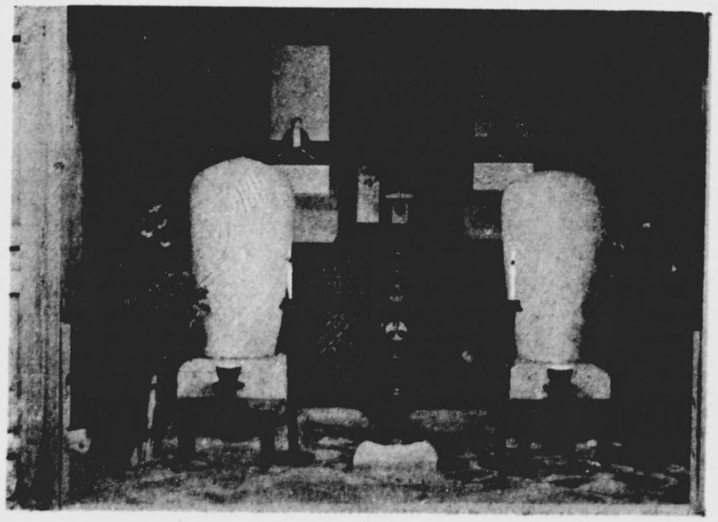


小督局塔（京都嵯峨法輪寺境内）

建禮門院像（京都大原寂光院）



金峯山寺　藏王權現堂として知られ吉野山の本坊である。



山内一豐夫妻墓及畫像
（京都妙心寺塔頭大通院）

725
11

はしがき

曩に女性日本史を上梓したる時、聽て各時代の名婦について評傳を試みやうといふ事を書肆北斗書房に約束したのであつたが、公私用務のため執筆するの機なく終に今日に及んだことは誠に申譯ないと思つてゐた。けれど餘り長い間延ばすことも出來ぬといふ樣々の事情のため、こゝに各時代の名ある女性の中二十數名に關し、記述することとなつたのである。

最初本書を執筆するに際し、自分は數十名の名流婦人を選び出し、それぞれの材料を蒐集せしめたが、何分繼續してこの仕事に從ふことが出來ぬので伊東卓治學士を煩はす所が甚だ多く、まづ自分の述べんとする所を同學士に依賴して草稿を作つて頂き、それを又自分の調べた所と照し合はせて纒めて

ゆくといふ、一方で急がれながら、他方に於ては甚だ迂遠な方法で執筆せねばならぬといふ、第三者が見たら、實に不可解な事情の下に著述せるものといはねばならなかつた。それ故本書は本來伊東學士と自分との合著とする方が穩當であつたかとも思ふが、兎も角も自分の思ふ所をかなり思ひ切つて斷案的に述べた點も尠くないので、自分單獨の名によつて公にすることとした次第である。

さて本書に記す所の婦人は數から云へば決して多くはないが、各階級に亘つてゐるので、まづ讀者が餘り落膽されることはないであらうといふ、甚だ身勝手なことを考へてゐる。たゞ或る婦人に關しては、古來餘りにも有名でありながら、その事績の判然としないものもあるので、それ等の人物については古今の各說を紹介し、少しく私見を附け加へておくに止め、賢明なる讀

者諸君の判斷にお任せすることとした。

終に本書口繪に掲げたる寫眞は、何れも京都の中野楚溪氏が撮影する所のものを寄せられたのである。こゝに伊東卓治、中野楚溪の兩氏に對し、深く謝意を表する次第である。

昭和十一年十二月

枯山草廬に於て

著者識

日本名婦傳　目次

光明皇后……三
絶世の美人——崇佛事業——慈善事業——千人の垢を落す——日本女性中第一の能筆——大佛鑄造の發願

法均尼……一六
清麻呂の姉——八十三人の養子——道鏡の苦手——正四位上に上る

檀林皇后……二六
平安朝の代表的美人——佛敎の擁護者——冷泉院——學館院の設立

小野小町……三一
男では業平女では小町——小野小町は罪つくり——才氣勝れ和歌に堪——後向きの小町——男にはつれない女——分裂的な性格——戀愛詩人

藤原道綱の母……四八
蜻蛉日記の作者——女性文學の黃金時代——現實生活の破綻に懊惱する——眞情あふるゝ人生記錄——人生と自然との愛——三美人內也——才色兼備——貞淑溫良

清少納言……五八
代表的な双璧——幼少より頴敏——枕草子、清少納言集の作家——隨筆文學の明星——一生妻とならず?——機智縱橫博學多識——香爐峰の雪——駿馬の骨——うれしき女の意氣

紫式部……七〇
日本文學の代表作品——文藝的な血——藤原宣孝との戀愛——內氣で敏感な女性——貞節なるもの——浪漫的精神の發展

和泉式部……八三
平安朝の情熱歌人——容色艶麗、資性多感——奔放な戀愛——誰の子かしら——家庭に風波

赤染衞門……八八
二大女流歌仙——貞淑溫良——榮盛參る——內助の功——榮花物語——代作の名人——妻としての龜鑑——相當の戀愛生活

菅原孝標女……一〇三
更級日記の作者——生活の夢幻化——憧憬的精神の萠芽——早熟なる少女——理想の女は淋しき愛人——夢とも現實ともつかぬセンチメンタリスト——惠まれた文學的環境——日本女性史中の異色

小督……一一四
高倉院の寵妃——琴の名手——清盛の嫉妬——峯の嵐か松風か——無自我的性生活は當然

祇王・祇女・佛……一二六
白拍子の哀れな物語——揉み苦茶にされた神經——女は相見たがひ——四人の尼

建禮門院……一三五
有爲轉變の人生——嘗ては中宮、今は尼——大原の寂光院——大原御幸は一篇の詩

靜御前……一四六
美しく舞の上手な白拍子——一世一代の名優——義經の寵愛を獨占——靜の男裝——女人禁制の吉野山——八幡神前の舞

尼將軍政子……一六三
將軍の御臺所——尼將軍——幼時より女丈夫——妹の戀人を失禮する——政子の家出——頼朝にあつくなる——手におへぬやきもち燒き——典型的な武家の妻——母性愛の缺乏

阿佛尼……一八〇
十六夜日記の著者——一種の烈婦——高貴な方と熱烈な戀愛——愛の花——うたゝねの記——才色兼備、多情多恨——角のある女性

今參局……一九八
義政の寵愛——女だてらに三魔の一——婦人の切腹——政治を料理する女傑——局の幽靈

榮山殿……二一〇
家康の第一夫人——政略結婚——精力あまつてヒステリー——惡婦の標本?——淺はかな女性——悲運は戰國時代の女性に共通——肌靑き自然石

淀君……二三七
大阪城滅亡の立役者——美婦にして淫亂?——はでな人柄——淀君はヒステリイな

らず——温良柔順な婦人

×出雲阿國……二四九

容貌美麗——神樂舞に妙——阿國神樂舞——英雄に寵愛せられる——かぶき女——果して名古屋山三は戀人か？

○山内一豐の妻……二七四

内助の功の標本——文筆にも秀れる——不幸にして子運に乏し——嫉妬の方は相當に——新しき眼で見た「一豐の妻」

○×細川ガラシヤ……二九三

クリスチヤン・ガラシヤ——明智光秀の娘——怜悧にして氣性勝れた婦人——鬼の女房に蛇——精神の打擊を救ふキリスト教——當時の新しい女——腰元十六人の洗禮——苦痛より喜びの日へ

×千姫……三〇八

大阪城脫出——坂崎出羽守事件——吉田御殿の色地獄——生死の境に男のきりよう選び——坂崎肱鐵を喰つて男を下げる——色情狂のやうに流傳される——吉田通ればの歌はまゆつばもの——池から女人の白骨——實録と講談の違ひ

○加賀の千代尼……三三三

ひとり名聲嘖嘖——朝顏につるべとられて——才を練るには不運——名聲を博するには好都合——只の鼠ではない——千代女は不美人か——却つて美人か——蜻蛉つり今日はどこまで——果して千代は實在人物か

×鏡山お初と山口阿藤……三四一

鏡山お初……三四一

女ながらの仇討——當時の民衆の鬱憤をはらす——やきもちに似た氣持で——草履で打つ——兩親へ別れの手紙——短刀で仇討

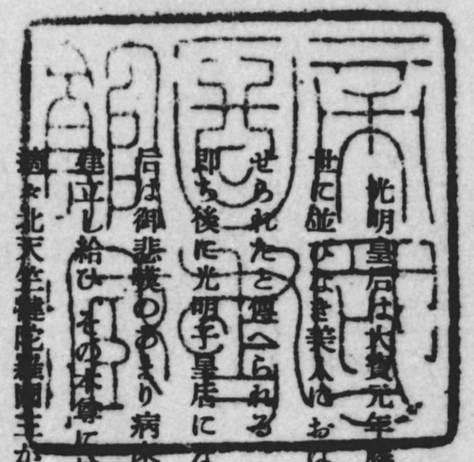
○山口阿藤……三四五

烈婦の龜鑑——孝行者——豐浦の增長——夫人に同情——先づ師弟の關係を絶つ——下に白裝束上に着物——短刀で肩先に——侯の怒り——家中の喜び——世間賞讃の的——宿命間に合はず

日本名婦傳

龍居松之助著

光明皇后



光明皇后は大寶元年藤原不比等と縣犬養橘三千代との間に生まれ給うたる安宿媛（あしかのいらつめ）である。世に並びなき美人はおはし、體貌殊麗で光耀あるに似たりといはれ、それによつて光明子と稱せられたと傳へられる。その如何に美くしかつたかは外國に迄知られたといふ傳說迄もある。即ち後に光明子皇后になつてからのことであるが、天平五年十一月御母なる橘三千代薨ず。皇后は御悲嘆のあまり病床に伏された程であつた。そこで御追福を祈られて、興福寺に西金堂を建立し給ひ、その本尊には阿彌陀佛を安置せんとなされたが、心に適ふ佛師が見當らない。所が遙か北天竺健陀羅國王が日本に觀世音が生まれましますと聞いて、問答師なる彫刻に巧みなる者を遣はしてその御姿を求めしめたのが、和泉の三津の濱に來着した。そこでよろこび迎へて問答師にはかられた所、御本尊には阿彌陀佛よりは釋迦がよろしからんと答ふるまゝに、問答師に釋迦像を作らしめた。彼はその製作を御覽にいでます皇后の御麗姿を拜して、十一面

觀世音二體を謹作し、一は法華寺に殘し、一は自ら携へて祖國の王に獻じて奉答したと傳へられる。今法華寺にある十一面觀音像がそれであるといはれる。（元亨釋書）又藥師寺に、筆者は傳へないが吉祥天女の像の色繪が殘つてゐる。これも亦光明皇后を寫しまゐらせて成ると傳へられてゐるもので、これらの云ひ傳へは總て光明皇后の美しくあらせられたそのゆかりを語るものである。十一面觀世音も吉祥天女も、二者共に豐麗端正にして頗る氣高き傑作品であつて、正しく天平時代的特色を明らかに示してゐる。この點では時代的には光明皇后と矛盾するものではないが、皇后を寫しまゐらせたといふ話は傳說なるが故に、直ちにその傳說を以つて光明皇后を想像し奉ることは全く危險千萬なことである。

さりながら、後世の人たちが光明皇后の美しかりしといふ傳へを、これら天平時代の傑作品の中に見ようとした心持だけは十分同情して首肯出來る。

このやうに光明子は美人におはした。そこで靈龜二年首皇子十四歲を以て皇太子として立たせ給ふや、媛は宮中に入つて妃となり、軈て神龜元年首太子皇位を元正天皇より嗣がせ給うて聖武天皇とならせ給ふや、光明子は夫人となり、且つ從三位に叙せられ、正三位にのぼる。神龜四年閏九月皇子御生誕あり、世を擧げて祝する中にあつて、十一月立太子の詔を下し賜はり、

天平元年八月十日遂に皇后刪立の事となつたのである。

斯樣にして光明子は藤原氏の出を以て皇后に立てられるに至つたのであるが、これ迄は皇后は皇族より刪立せらるゝことに決まつてゐたのであるから頗る破格のことである。この異例は藤原氏にとつてその光榮はいふ迄もないが、然し古來の慣例が廢ることについては世の紛議は免かれ難かつたらしい。それ故天皇も御軫念あらせ給ひけるにや、立后に關する詔勅を下されたのである。

天皇皇位に即かれてより六歲を閱し、この間已に皇太子も侍らる、「是によりて其の婆波に在す藤原夫人を皇后と定め賜ふ」とのらせ給ひ、そして嘗て仁德天皇の御代に、磐之媛を皇后にせられた先例もあるから「今めづらかに新しき政には有らず、本より行ひ來し迹事ぞ」と詔り給はれた。つまり先例もあることだからと世の紛議する者にさとされたのである。天皇が光明子に對する御寵遇の程も察せられる。

然しながら例にひかれた磐之媛は葛城襲津彥の女で、葛城氏は皇別の家であるから、光明氏が臣下より出たのとは事情が些か異つてゐる。だからあまり適した例とは申されない。又それだけに天皇が皇后に對する御心持の程も察せられるといふべきであらう。

然し、又一面には政治的な陰翳が見られないではない。それは藤原氏の權勢のあらはれである。それが事實如何に優勢に働きかけてゐたかは、その立后の詔勅の中にも拜察せられる。即ち光明子を皇后に立てられるについては、御母君にあらせられる元明天皇がその始め光明子を天皇に賜はるときに仰せられるには、その親の大臣は皇朝に仕へて忠勤であつて忘られない、それ故「過なくあらば捨てますな忘れますな」とあつた故、こゝに六年の間試みて、此の皇后の位を授け給ふとのらせてゐる。この親なる大臣とはいふ迄もなく藤原不比等である。彼は既にこれより九年前養老四年に薨じてゐるが、實にその勳功を思し召されてのことであることがわかる。

その如くこの立后に就いては藤原氏の勢力の伸長が物語られてゐる。藤原氏は已に不比等の女宮子媛は文武天皇の夫人であり、且つ聖武天皇の御國母に當り、今や又その異母妹なる光明子皇后の位に上らんとする際であつて、藤原氏の他を壓する權勢がほの見えてゐる。それ故互に權勢を爭ふ人々より反對者を出すのも必要の勢であつたであらうし、まして古來の慣例を破らうとしてゐるのだから尙更のことである。さればこそ、詔勅にも不十分ながら弩之媛の例を擧げなければならぬ情勢であつたのであらう。それ故、この立后をば、もともと大寶令に後宮

職員令は載つてゐるが、皇后には定文がなかつたことを幸に藤原氏が乘じたのであると見られ、更には、立后半歲前に起つた長屋王の事件も、その實は立后反對派を强壓したことの、表面的な口實で、後世藤原氏の曲筆なりといふ史家もある位である。だからこの立后も一面には反對を推し切つたと思はれる向が察せられ、こゝには後宮に於ける三千代の勢力が與つて力あつたものと察せられる。

即ち光明皇后刪立の事情は、一波瀾の後めでたく皇后となり給ふといふことになるのであらうが、然し光明子自身非常な美人であり、且つ御賢明にして深く佛教を信仰されてゐた事等より考へるならば、かく臣下より皇后に刪立さるゝ例を開くに至つたのも、御人德の然らしむる所であつたらうと拜察される。聖武天皇亦熱烈なる佛教信者であらせられた。こゝに何か畢竟ゆかりの深きものがあつたと思はないわけにはゆかないであらう。

皇后の御一生は何かと云ふならば、まことに崇佛事業の四字に盡きる。佛教は聖德太子以來盛になつたが、特に隆盛に赴いたのはこの聖武天皇の御代からである。佛教が政治と結合して國家的宗教として宣明され、寧ろ佛教によつて國の觀念をはじめ、あらゆる政治的概念規定までも行はれようとしてゐた時である。そして絢爛たる隋唐文化が澎湃として我國文化を作り上

げようとしてゐた時である。それ故に文化的基礎も佛教によつて規準して考へられ、萬事が佛教に依存した。然し當時の佛教としての信仰は現世的のもので、後世のやうに彼岸の世界を欣求するやうなものでなかつた。この世に於いて災厄を免れ福利を享けるといふ念願であつた。之が政治的事業を興し得る契機でもあり、奈良佛教の横暴を來たす素因でもあつた。三寶の威靈によつて「乾坤豐かに萬代の福業を修し、動植咸く榮えんと欲する」底の國家鎭護、福利增進がその主目であつた。かくして聖武天皇の朝には國々に國分寺國分尼寺の建てられる次第を作るのであつた。されば光明皇后の深き信仰も、世の一般に見る表面的なものと異つて、その教義の眞髓に徹入するものと思はれるのではあるが、畢竟はこの意味の社會事業的なものであることは已むを得ない。

光明皇后は非常に慈悲に富まれ、天平二年四月には皇宮職に施藥院を置かれ、諸國に令し職封並大臣家封戸庸物を以てその費用に充て、藥草を買取りて、毎年之を進めた。正倉院には今尙當時の藥草が保存されてゐる。尙その翌五月には悲田院を置き孤兒病者を收容した。これらの慈善事業は嘗て聖德太子が敬田施藥療病の三院を難波に立て給うた御遺志をつがれたものと思はれる。なほ光明皇后は佛のお告によつて浴室を建て、千人の垢を落さんことを誓願せられ

た。或は現在いふ所の溫泉療法の如きものであつたであらうか。その慈悲の御心の如何に深かつたか、阿閦寺緣起が元亨釋書に傳へられてゐる。如何にも傳說らしい事柄ではあるが、その中に皇后が信仰によつて大慈大悲の念願を貫かれた尊い御姿が拜せられるから、その傳說をこに述べておかう。

「皇后は千人の垢を落さんとの誓を立てられ、病人の垢を流させ給ふた所、その大願の千人目に臭氣鼻をつくばかりに體のくづれた病人が來た。癩患者だつたかも知れない。流石の皇后も思はず面をそむけ給ふ程の病人ではあつたが、佛の誓なればとて推して背を流させ給ふ。するとその病人が申すには、この腫物の膿を吸ひ出す者あらば、わが永年の業病も立ち所に癒ゆとは聞けども、未だその大悲の人に會はない。願くばわが苦惱を拂ひ給へと乞ふのである。皇后は背を流すさへ苦しきに又難題に會ひ給うた。然しながら佛への誓願であれば、大慈悲心を振起され、その願ひのやうに頭の先より足の先に至るまで御口づから膿汁を吸ひ取られては吐かれた。そこで皇后は今は願によつて膿を吸ひ了れり、愼みて人に語る勿れといましむれば、その病人も亦愼みて人に語る勿れ、我こそは阿閦佛なりと答へ、何たる奇瑞ぞや、病者忽ち五體より御光を放ちて佛の相を現じて上天した。皇后これを見て涙を流して歡喜禮拜し、その浴室

の跡に寺を建てた。それが阿閦寺であるといふのである。右は彼の中世期の功德緣起物の傳說で到底傳說たるに止まるのではあるが、尙ほ皇后の崇佛精神とその慈悲心に富まれたことが充分に語られてゐると思ふ。

天平二年皇后發願なされて、山階寺(興福寺)に五重塔を造營し、その地に行啓あつて、房前と共に石材を運び且つその地均らしをなされた。その五年には御生母橘三千代が薨ぜられた時、御孝心深き皇后が病の床につかれる程の御悲歎のこと、そして御冥福を祈念して、この山階寺に西金堂を寄進し給うたことは前に記した通りで、釋迦牟尼佛、夾侍二菩薩、十大弟子、四羅漢等の像を造立安置し、更に僧四百人を請じて供養され、これに袈裟を布施せられ、更に尙十二年五月一日には一切經律論を書寫せしめられ、御先考妣の冥福を祈られてゐる。この事實によつても如何に御孝心深かりしかは察せられる。この書經は光明皇后御願經といはれ、或は五月一日經とも呼ばれ、その書寫優秀にして諸寫經中でも名高きもの、一である。

一切經書寫は天武天皇の御代より漸く盛になつたが、この期に於いて非常に隆盛となり、我國書道に益すること多大であり、紙、墨、卷、帙の裝幀等に顯著な進步が見られた。光明皇后御自身非常なる能筆にて、正倉院御物には杜家立成雜書要略樂毅論があり、猷健な筆致は實に

男子を凌ぐ慨が見える。皇后は實に日本女性中第一位の能筆にあらせられ、特に樂毅論は晉の王羲之の書を臨したもので天平十六年十月三日藤三娘と御署名あり、書道の眞髓を摑みしものとして名高い。皇后御年四十六歲に當らせられる。

扨て聖武天皇の朝に於ける崇佛的大事業は國々に國分寺國分尼寺を建て、東大寺には總國分寺として盧舍那大佛を鑄造されたのである。天平十三年三月廿四日に詔勅あり。即ち僧寺の名をば金光明四天王護國之寺と呼び、尼寺を法華滅罪之寺といふ。僧寺には金光明最勝王經を、尼寺には妙法蓮華經を各十部收めしめ、更に僧寺には七重の大塔婆を立てしめて、帝御自らの筆金字金光明最勝王經を納め給ふといふのである。思ふに國分寺國分尼寺は聖德太子の四天王寺建立の御思想を更に全國的に擴げたもので、この金光明經は佛法流布の國土を、四天王が護るといふことを說いてあるもので、國家的祈禱に用ひられてゐたものである。この信仰は旣に天武、持統の兩朝には頗る旺んであつた。それ故この理想に從つて諸國にその經典の加護を以て、國家の隆昌平安を祈つたのである。國分寺創設の詔勅の一節に「頃者年穀豐かならず、疫癘頻りに至る、慙懼交々集まりて、唯勞して己を罪す、是を以て廣く蒼生の爲に、遍く景福を求む」とある。つまりかくして國分寺造立の意義は國司と並び立つて國々の祈願所たらしめ、

中央集權的政治を擧げようとしたのである。尤も唐には已にこの先例があつた。天授元年（持統四年）には則天武后が兩京及諸州に命じて大雲寺一所を置き、開元二十六年（天平十年）之を開元寺とした。これを模倣したのでもあらう。これだけの觀點を持つと、天平十五年に詔勅を下して東大寺に大佛を鑄造の發願をなされ、以後數年の間多大の國家的疲弊をも顧みされずして、この大事業を遂行なされし所以が理解されよう。かくして大佛を皇室の守り本尊としてこゝに我が國に國家佛教が完成されたと見ることが出來やうが、また一面には當時外國との交通頻繁を加へたので、唐に對する我が威力を示さんとするの意圖も勿論あつたであらう。

諸國の國分寺及び尼寺は大佛造營のために資金難があり、それが出來上つたのは多分奈良朝末期であつたらうと推測される。かゝる大事業は、しかも政治的に意義ある事業であつて見れば尙更、聖武天皇の御發願であることはいふ迄もないが、これを勸告されたのは光明皇后であると傳へられてゐる。續日本紀に「東大寺及び天下國分寺を創建する者は太后の勸むる所也」とあるのでわかる。

皇后は神龜四年皇太子を御出產なされたが、不幸にして翌年九月半に薨去せられ、これより佛道に歸依すること深く、後年國分寺設置の志を萌すと傳へられてゐる。そして國分寺設置の

直接の動機は天平九年に痘瘡の大流行があり、その猖獗を極めしこと實に猛烈で、九州の松浦港及び畿內の三津の濱あたりから病魔入ると見る間に、奈良の都を襲ひ病に斃るゝ者多く、四月十七日には藤原房前も爲めに薨去した。この時は役人病む者多くして役所の仕事をする事が出來ないといふ有樣で、六月朔日には「百官の官人疫を患めるを以て廢朝す」といふ程であつた。或は大赦を行ひ、經典を誦せしめ、百方力を盡すと雖も何の効なく、七月十三日には藤原麻呂、同二十五日には藤原武智麻呂、八月五日は藤原宇合と相ついで斃れ、遂に皇后はその男の兄弟を一朝にして失ふに至つたのである。皇后の御悲歎は如何ばかりか想像に難くない。そこで金光明最勝王經を講宣する功德によつて四天王の來つて加護を垂れるを俟つ他なかつたのである。かくして國分寺が國々に造營さるゝ動機となつたのである。御悲歎の中にあつて努力なさるゝ光明皇后の御姿が拜せられるやうな氣がする。

天平勝寶元年聖武天皇は位を皇女孝謙天皇に讓られた。皇后時に御歲四十九、ついで落飾し給ひ、翌年二月東大寺に詣で封五千戶を施入されてゐる。同八年四月聖武太上天皇御不例の事があり、遂に五月二日崩御せられた。そこで皇后（仁正皇太后）大喪に服し、六月廿一日その七七日の忌日に當つて、太上天皇の御遺物を東大寺に施入せられ、自ら願文を製せられた。こ

れ即ち正倉院の起るべき端緒であり今尚ほ御勅封の寶庫として嚴存し、奈良朝の文化が保存せられ、實に世界的至寶である。その献物帖には御製の序文があり、之によつてその次第を知り得べく、斯の如き又と得難き寶物を御殘しになる端緒をお開きなされた光明皇后に對して我等後世の者が何と御禮を申上ぐべきかを知らないのである。

皇后は淳仁天皇の天平寶字二年八月、中臺天平應眞正太皇后と尊號を上られ、四年六月遂に崩御し給うたので、御寶壽六十歳、佐保山東陵に葬り奉つたのである。

孝謙上皇は御母光明皇后の崩御を傷まれ、同年七月東大寺及奈良の諸寺で七七日の齋を設け諸國をして阿彌陀佛淨土の画像を造立し、又稱讃淨土經を書寫して共に國分寺で禮拜供養せしめられた。又翌五年六月には法華寺内に阿彌陀佛丈六の像軀及脇侍菩薩の像二軀を造立して、國分尼寺で供養せしめられた。

扨てこゝで光明皇后の御事を回顧し奉るに、その天成の麗質にして、御信仰深く、且つ肉親への御心ばへもやさしく、誠に愛慕に堪へたる立派な方であらせられる。萬葉集に收められてある、

吾せこと二人見ませば幾ばくかこのふる雪の懼しからまし

の御製を拜誦しては、天皇との御仲らひも如何ばかり御睦じかりしかを察するに餘りがあり、誠に畏き限りである。それ故に大日本史に傳ふるかの天平初、僧玄昉還自唐、帝賜紫袈裟、以爲僧正、安置内道場、后其寵異、頗有醜聲、云々の妄說はかれこれ取上ぐる迄もなき事柄である。

法　均　尼

法均尼名は和氣廣蟲といひ、清麻呂の姉である。

和氣は備前國藤野郡の人で、垂仁天皇の皇子鐸石別命の後である。命の曾孫弟彦王が應神天皇の朝に戰功あつて吉備磐梨縣を賜つたので子孫こゝに家居す。故に本姓は磐梨別公といひ、後に姓を吉備藤野和氣眞人と賜ひ、又輔治能眞人と賜つた。清麻呂に至つて近衛將監となつて召されてゐた。姉の廣蟲は初め從五位下葛井戸主に嫁した。廣蟲は爲人貞順にして節操欽くるなしといはれ、早くより孝謙天皇に仕へ愛信せられ正六位下を授けられた。天皇御落飾するに及び廣蟲も亦跡を慕つて剃髪し、法弟子となり法均と稱し、尼位進守大夫を授けられた。天平寶字八年惠美押勝の亂があつた時、連坐して死罪に會ふもの數百人に及ぶを憐んで、天皇に懇願して死一等を減じて流罪とならしめた。その慈悲に富むことこのやうであつたが、又次のやうな善行もあつた。この亂後天下飢饉疫病流行して民間に子を生むも育てることの出來ないもの

のが續出して、往々その子を棄てる者があつた。法均尼之を憐みて人を遣はして之を收容し、凡そ八十三兒を得、悉く養子と稱したといふ。實に孤兒院としての善行といふべきか。因つて葛木首の姓を賜つてゐる。爲に天皇には益々御信任を厚うせられ、神護景雲二年には從四位の封戸並に位祿位田を賜はつてゐる。

右の如く法均尼は慈悲に富み愛敬するに足る人物で、奈良朝期に於ける忘れ難い女性であつたが、就中彼女をして我國史に永遠に赫く感謝を以て名を連ねしむるは、かの道鏡が皇位を覬覦した時に、弟清麻呂と心を一にして我國體の精華を身を以て守つたことである。宇佐八幡宮の神官習宜阿曾麻呂が神托と號して、道鏡をして皇位に即かしめなば天下泰平ならんと奏上した時、流石に稱德天皇も御惱みあつて、尼法均をして下向せしめ神托を受けしめんとされた。法均は身羸弱の故を以て弟清麻呂を推薦した。清麻呂一死以て道鏡の野望を挫いたこと誠に痛快の至りであるが、その功績の一半は又尼法均にも在りとしなければならない。蓋し彼女は稱德天皇の御信任を受けてゐて種々御相談に與かつてゐたのであらう。さうして彼女も亦清麻呂と同じ心にて道鏡を睨んでゐたものと思ふ。法均及び清麻呂を御起てになられた稱德天皇の眞の御意中の程も推察せられ、彌々以て宮中に於ける法均尼の功績の與つて大なることが考へら

れる。我國人が清麻呂を忘れることの出來ない如く、又法均尼を忘れてはならないのである。

弓削道鏡の非望は言語道斷の至りで論ずる迄もないが、こゝにその顚末を述べて置かう。道鏡は惠美押勝即ち藤原仲麻呂を却けることによつて孝謙上皇即ち稱德天皇に嬖幸された僧侶である。仲麻呂は藤原武智麿の第二子で、孝謙天皇に嬖幸され、天皇屢々仲麻呂の田村の邸に御幸あつて、遂に田村宮と稱せらるゝ程であつた。仲麻呂は大炊王を田村の第に迎へ奉り自分の子眞從の寡婦栗田諸姉をその妃に奉り、天平寶字元年適々皇太子道祖王廢せられし後、仲麻呂の願望成つて大炊王皇太子となり、やがて二年御讓位あつて淳仁天皇とならせ給ふや、仲麻呂の權勢旭日の勢となり、一世の權を專らにした。天皇より惠美押勝の名を賜はり、位は累進して正一位となり、近江の二郡の鐵穴を賜はり、その富勢彌々驕奢、遂には梅宮の南に私邸を起し樓を構へるなど、僭上の沙汰を行つた。而して仲麻呂は官制等も全然唐制の名稱に置き換へる等、唐制の盲目的模倣による全然支那化した政治を行はんとした。この唐制模倣は奈良中期以來の風潮ではあつたが、彼の如き畢竟位を笠に着る小人物に過ぎなかつた者には奈良初期迄の先人苦心經營のあとゝいふものがわからなかつたのである。心ある者は或は致仕し、或は彼を却けんとして却つて除かれ又は殺された。然し誰とて彼の秕政を默認される筈はない。之を

破るべく隱然たる勢力を涵養してきたのが僧道鏡であつた。道鏡は後に天位を窺つた惡逆無道の者であるが、この仲麻呂を却けた功績は認めよと說く者がある。この位仲麻呂は不評判だつた。然し道鏡の功績云々は次のやうに考へなければいけない。この政治的改革は唐制政治に對して佛敎政治が勝つたといふに止まるのであつて、道鏡の如きは惡辣な學僧だから、巧妙に表面に乘り出してきたのである。功績いふよりは、彼の野心の結果が偶然とさう見えたといふべきである。

押勝威望日に衰ふるを見るに及んで遂に道鏡を嫉視して亂を起し、敗れて誅に伏した。是に於て淳仁天皇廢せられ、孝謙天皇重祚して稱德天皇と申上げたのである。かくて威權は一つに道鏡に歸し太政大臣禪師となつた。彼は佛法によつて國政を料理せんとし、先づ大嘗會の豐明には佛を以て神の先にした。つまり古來の神事をおさへるに佛を以てし、伊勢並に各地の神社に神宮寺を建て、祭事は神官に委せたが、財務は僧侶が把握した。丈六の盧舍那佛を伊勢の神宮寺に建て、大神と並立せしめて、只管に佛敎國家を建設せんと謀つた。續日本紀によれば、「道鏡權を擅にして、輕々しく力役を興し、務めて伽藍を繕へり、公私凋弊して國用足らず」と記されてゐるが、天皇の寵幸は益々加はり、時に山階寺の僧基眞が數粒の佛舍利を得たと奏

上すれば天皇喜びて奇瑞となして、道鏡に法王の位を授けるといふやうな具合で、道鏡の一門は忽ちにして廟堂に上るもの十指に餘り、遂に天平神護三年正月には、道鏡西宮の前殿にゐて左大臣藤原永手、右大臣吉備眞備以下の拜賀をうけ、自ら壽詞を告げるといふ迄に及んだ。河といふ僻上の沙汰であらうか。正に天皇南面の御儀である。されば後年宇佐八幡宮の神托を口實として帝位を覬覦せんとしたのも、その萠芽實にこゝに既に現はれてゐたのである。百官有司唯々諾々として拜賀の列に參ずるの有樣は、太宰府の神主習宜阿蘇麿が不法なる神托を持ち出すと亦同日の談であると見る可きであらう。今や日本國の國是に一大危機は到來したのである。

然らば如何にしてかゝる危機を招來するやうになつたかを顧みれば、その禍は深い。それは佛敎を以て國敎となし、佛敎敎理によつて國家の觀念を規定せんとしたことによる。政治の要諦は國家の安康、國利民福の增進である。しかも當時の佛敎は現世的福利を與ふる宗敎であつたので、こゝに政敎一致の思想は深まり、政治的意味深き國分寺の創建ともなつた。換言すれば佛敎的觀念によつて國家意識を持つやうになつたのが、これが我上代人の國家意識たらしめんとするに至つたのである。されば東大寺大佛開眼供養あるや、聖武天皇は印度の風習に倣はせ給ひ、牛の糞の壇を設けてその上に跪坐北面し、三寶の奴とならんと誓はせ給うてゐる。北面とは臣下の禮を取ることであり、奴とはしいもべの意味である。畏くも一天萬乘の尊を以てこの儀あり、以て他は推すべしである。それ故その民は、國法に違ふとも佛法には悖らざれと、今や國法君命よりも佛法が重くなつた。この事情はあらゆる方面に佛敎を横暴ならしめ、その佛敎に通ずる者をして世にはびこらしめた。その結果は玄昉の如き宮闕をみだすと傳へられる者を出し、今や更に道鏡の如き不所存者をも出すに至つたのである。外來文化の盲目的模倣による所の滔々たる世の流れは、この極端な危機に迄到つたわけである。

又宇佐八幡宮とはどういふものかと見ると、これ又政治的傀儡であつた。嘗て東大寺に大佛建立を祈願さるゝや聖武天皇は伊勢大神宮に神勅を受けてゐられるが、この時宇佐八幡大神からも、わざ〳〵托宣あつて、大佛造營の勅願を爲し遂げ奉らむと告げて、奈良迄上つてきてゐる。抑も宇佐八幡は地方的神社に過ぎなかつたのが、大佛建立に因む人心收攬の手段に乘じて奈良に來るや忽ちにしてその勢力は認められ、東大寺の境內には手向山八幡宮と祭られ、更に後には皇室の氏神として男山にも鎭座するといふ次第である。この奈良上向は、藥師寺行信の繰つる策謀なりしこと後に暴露されたが、その祭事の盛儀は人目を眩するばかりであつた。こ

のやうな過去を持つた宇佐八幡宮が、今や又しても、道鏡の非望事件に乗り出してきたのである。勿論神主の中臣習宜阿曾麻呂といふ者は相當腕き、であつたであらうが、世の風潮事態が正にこの非望事件が起りそうな情況であつたことは認めねばならない。

然し臣下の身を以て皇位を犯すが如きか、る非望を誰が認めるであらうか。抑も佛教は奈良朝になつてより非常に隆盛となり、その僧尼の數も夥しき數に上る狀態ではあつたが、然しその信仰は當時外來文化圏に生活の出來た上層階級に主として流行して得たのであつて、外來文化の追從であつたやうであり、多數の下々の人民は只仰ぎ見るに過ぎなく、彼等の素朴な心には昔ながらの信仰、即ち多神教的色彩を持つ神統が奉ぜられてゐた。然るに佛寺造立により人民は非常な苦役に投ぜられ、貧困に追はれ、山上憶良の貧富の歌に見られるやうに貧民は慘憺たる暗い生活に追ひ込まれてゐた。この社會の反面は充分注目しなければならない。彼等には權勢こそはなけれ、實質的には國の寶である。この力を如何なる政治家と雖も度外視することは出來ない。こゝにおいてか上流社會に於ける佛教國家としての擅權に對して、日本古俗にしたがふ民意の反撥がある。臣民として天皇たるが如き、到底この順朴な日本古俗の意志が承知しない。この意識の中から和氣清麻呂は敢然として威武に屈することなく起ち得たのである。

勿論道鏡の專横を惡む人々の政治的支持によつたでもあらうが——。かくして我國史に將に捺されんとした汚點を清め得たのである。それ故清麻呂の功績も實に大きいことは大きいが、日本意識を以て貫いてゐるこの國是は更に强靱なるものであることを知らねばならない。この間の消息は、日本神教と佛教との調停のために、學者僧侶の苦心のもとに、本地垂跡說が出現を必要ならしめたものと思ふ。かくして辛うじて理論的に融和をはかり得るかの如き事情を考へて見ると、この道鏡の非望事件と和氣清麻呂の活動も、單なる道德的視野からもつと廣い日本文化史的視野の中に正しい位置付けが得られると思ふ。

清麻呂は詔勅を受けて宇佐に下らんとするや、道鏡は清麻呂を威壓しつ、、若し我をして欲する所を得しめば太政大臣にしてやらうと誘つてゐる。しかも一方には姉法均は期する所あつて弟を激勵し、又道鏡の師なる路眞人豐永は更に、道鏡若し天位に登らばわれ何の面目を以て其臣たるべけんや、二三子と共に今日の伯夷たらんのみと眞情を披瀝してゐる。いよいよ宇佐に着いて神托を伺ふ時に及んで如上の形勢は如實に記述されてゐる。先づ初めには道鏡をして帝位に即かしむれば天下泰平ならんと托宣があつた。そこで清麻呂は大いに驚き、これ國家の大事である。願くば神異を示し給へと伏して祈つた所、忽然として神はその姿を現じた。その

長さ三丈ばかり、色は滿月の如く、清麻呂は魂も消えて仰ぎ見ることも出來なかつた。神は聲を勵ましていはれるには、わが國家はその開闢以來君臣の分は定まつてゐる。然るに道鏡悖逆無道にして輙く神器を望む、それ故神靈は震怒し、その祈は聽かれない。汝は歸つてわが言のまゝを奏上して天日嗣は必らず皇緒をつがしめよと神托を下された。

右の如く全く矛盾する二つの神托があつたことは、兩派の勢力の鬪爭關係があつたことを示すもので、當時の論難の狀態がほの見えてゐるのではないか。清麻呂は偉丈夫であつた。彼は歸へるや、道鏡悖逆無道と伏奏した。かくして裁斷は下つたわけである。

道鏡は怒つた。彼は清麻呂及びその姉尼法均を「いと大に惡く姦る妄語を作る」としてその官位を退け、清麻呂を穢麻呂、法均を廣蟲賣と改しめて、清麻呂を大隅に法均を備後に流した。道鏡はそれでも足らず追つて清麻呂を道に殺さんとしたが雷雨晦暝して未だ行に即かず、俄にして勅使來りて僅かに免るゝを得たと續紀にしるされてゐる。

これが道鏡非望事件のいきさつであつた。かくこの姉弟が身を以て國體の精華を全うせしむることが出來たのは、誠に我國にとつて幸福の至りであつた。嘗て、この事件には清麻呂のみがその榮譽を千載にうたはれてゐたが、それにはこのかげにかくれた姉法均尼を忘れてはならない。宮中にあつて天皇に御親慮をはかつたのは尼法均だつたと見られるからである。かゝる意味に於いて歴史上又とない功績ある女子であると申さねばならぬ。

その翌年寶龜元年八月稱德天皇崩御せらるゝや、參議藤原百川は疾風迅雷の勢で天智天皇の御孫施基皇子の御子白壁王を立てゝ皇太子となし、坂上苅田麻呂は道鏡の奸計を訴ふるに及んで、即ち令して道鏡を下野國藥師寺別當に貶し、宇佐八幡の神官を多褒島守として配し、又同時に和氣清麻呂及法均尼を召還されて舊位に復された。かくしてこの大事件もめでたく終ることが出來た。

「そのやうな次第で、法均尼は、やがて御位に即かれた光仁天皇の御信任はいやが上にも厚く、典藏典侍となり、正四位上に上り、桓武天皇延曆十八年七十歳を以て卒した。嘗つて光仁天皇嘆じて、諸侍從執御は毀譽紛々獨り法均は人の短を言はずと仰せられた程で、法均友愛なる天資で姉弟財物を分たず、時人之を稱すと大日本史に書かれてゐる。以てその平常の人となりがしたはれるではないか。

檀林皇后

檀林皇后は嵯峨天皇の皇后におはしまし、奈良朝に於ける光明皇后に比すべき平安朝期の佛教擁護者である。御名は嘉智子、父は橘清友である。清友は光仁天皇の御宇澎海の國使が來た時、その接待役となつてゐる。その時澎海の使者は、彼の人相を卜して子孫に高貴なる者生れんといつたと傳へるが、果して成長の後嘉智子を產んだ。

皇后は平安期に於ける代表的美人であつた。資性寛和、風容絶異、手を垂るれば膝を過ぎ、髮地に委すといはれる。

手が長いといふのは奈良の法華寺の十一面觀世音像を見てもわかるやうに、垂れた手は膝を過ぎてゐて、奈良平安朝を通じて貴人の資格であつたらしい。髮の長いのは平安朝に於ける特徵で、もと婦人が顏をかくす風俗から馴致されたものである。この婦人蟄居の風は支那の風俗の傳來で、平安朝の初期より支那文學の隆盛に隨伴して我國に影響した一風俗である。その結

果、美人の資格が見られない顏より「見える髮」に移つて行つた。こゝに丈なす黑髮を裾の先になびかせ、或は几帳の蔭から髮をのぞかせる平安朝的女性風景が自然と展開して來た。だからこの時代は髮が長いといふのが美人の資格であつた。現今のやうに髮を切つておかつぱにするなどとは大變な相異である。大體美人の標準は時代的特徵があつて頗る興味深きものであるが、この檀林皇后の場合にもその時代的な好みを以て云ひ傳へられてゐるのである。光明皇后はひかりかゞやく如しと云はれたやうに、檀林皇后に肌の色つやを云々しない所に、奈良時代とは異なる時代の好みの差が見られるとすることが出來よう。

然し皇后は餘程氣品高き美人でいましたらしい。皇后未だ笄せざるの時法華寺の尼禪雲といふ者、その臂を把つて云ふには「娘子後當に天子皇后の母となるべし」と瑞徵の相を賀したといふ傳へがある。後果してその通りであつた。

嵯峨天皇親王たりし時納れて妃となし、即位の後夫人となり、封一百戸を賜ひ、弘仁のはじめには從三位に進み、同五年には尾張丹羽郡の田二十四町を賜はるといふ御寵愛も深かつた。弘仁六年七月七日の夜、天皇は嘉智子夫人が瓔珞をつけて佛の如く壯嚴なるを夢に見られたので、乃ち改めて皇后とせられた。かくして仁明天皇、淳和天皇皇后正子、秀良親王、秀子內親

王、俊子內親王、繁子內親王、芳子內親王を產み給ひ、實に禪雲の言の如くであつた。ともかく皇后は御佛にも見まほしき天性成せる端嚴なる麗質であらせられたものと思はれる。

皇后は篤き佛敎信者で、嵯峨に檀林寺を建てゝ、比丘尼のよく律を持する者を養はれ、仁明天皇また五百戶を施捨して供養に充てられた。そこで皇后を檀林皇后と稱し奉るのである。皇后は沙門彗夢を唐の杭州靈池寺の齊安禪師の許に遣はされたが、彼は齊安國師の上足義空長老と偕に歸朝したので、皇后之を檀林寺に迎へ、御自ら懈怠なく參究した。卒に和歌を詠じて所悟を述べて曰く、

もろこしの山の彼處にたつ雲はこゝにたく火の煙なりけり

と、かの齊安國師和歌の意を聞きて曰く、「東域深悟の人、丈夫の氣息あり」と感歎したといふ。

又嘗つて皇后多くの寶幡及び繡文袈裟を造り頗る巧妙を極めた。左右の者その意を知らなかつたが、後僧彗夢を唐に遣はすの時、繡文の袈裟を以て僧伽及び康僧等に施し、寶幡鏡奩の具を以て五臺山寺に藏すと誌されてゐる。このやうに佛敎の擁護者であらせられた。

淳和天皇立つや尊みて皇太子といひ、封一千戶を奉り、仁明天皇立つや尊みて太皇太后と申

し上げた。承和三年平城京の空間地二百三十町を奉じて朱雀院にあて、翌年更に近江の荒田六十四町を奉りて後院に充て、承和九年には遷つて冷泉院に居られ、遂にこの世を去られる迄ここに十年近くの歲月を過ごされたのである。嘉祥三年正月仁明天皇御惱篤かりし時、太皇太后大に御憂念遊ばされ、落髮し給ひて尼となられ、御恢癒を祈られたが、その効もなく、遂に三月天皇崩御、太皇太后も後二月にして續いて崩御遊ばされた。時に御歲六十五、崩ずるにあたつて御遺告があり、葬を薄くして山陵を營むを止められたので、深谷山に葬り奉つたのである。

皇后は佛敎の外橘氏の子弟の爲め、その弟に當る右大臣橘氏公と共に學館院といふ學問所を立てられた。文德實錄卷一に、嘉祥三年五月辛巳嵯峨太皇太后崩ず、壬午后亦弟右大臣氏公朝臣と議して學舍を開き學館院と名づく。諸子弟を勸めて經書を誦習せしめ朝夕濟々たり。時人以て漢の鄧皇后に比すと誌されてゐる。鄧皇后といふのは後漢の和帝の后で名は綏、もと掖庭に入つて貴人となり、恭肅小心で勤くに法度あり、貌は殊麗であつた。遂に立ちて皇后となり帝崩御の後は皇后朝に臨むこと十餘年、立派な政治をとつたといふ賢明にして美麗な婦人である。檀林皇后亦その御人德が比せられたのである。

學館院はその創立の年序は不明であるが、平安朝初期支那文學の隆盛を來たし、官吏の登用

には又支那風に秀才の考試が重んぜられた。當時大學寮があつて時の貴族等の子弟で官吏たらんとする者は、是非これを通らなければならなかつた。それ故勢力ある一族は各その子弟のために大學の外に私學を立て、その子弟を教育した。學館院もかゝる私學の一で、弘仁十二年には藤原冬嗣は藤原氏の子弟の爲に勸學院を、和氣廣世は弘文院を、又在原行平は天龜五年に源氏のために奬學院を立て、、大學に入るのを奬勵した。かゝる私學の勃興は後に漸く學閥を起すもと、なつたが、檀林皇后は又このやうな方面にもその跡を殘されたのである。西宮記によると嘉祥三年より百十五年を經たる康保元年十一月、參議好古等の奏請によつて學館院が大學寮の別曹となつたことが勅許されてゐることが見えてゐる。

小野小町

小町程人氣があつて、しかも傳記の不明な者は尠い。男では業平、女では小町と、美人の名前も彼女に極まり、クレオパトラ、楊貴妃と共に三大美稱である。しかもその種々なる傳說は或はお伽草にや謠曲に仕組まれ、或は玉造小町壯衰書として傳へられる。その一方には文屋康秀、大伴黑主、僧正遍昭、喜撰法師、在原業平と共に歌道に於いて名譽ある六歌仙の一人とされる。然らば小町は何時頃の如何なる人かとなると、諸說紛々として捉へ所もない有樣だから驚く。貞觀の頃の人とも承和の頃とも云ひ、又享年は六十九とも云ふ。その上に、小野小町といふが小野が姓なるや小町が名前なるやすらも分明しないのだから徹底してゐる。小野とも一說には玉造とも云はれ、小野といふのが本當の姓なのか住居の土地による假托なのか、小町も宮中に於ける公名だとも、では實名は何かとも全部憶說から出てゐるやうな曖昧さだ。そんな狀態だから種々なる說話がわけもなく附加されて彌々以つて朦朧たる輪廓にされるし、又却つ

て說話が作られたりしてゐる。はつきりさせようとすれば投げ出すより他に仕樣のない者である。どの道小野小町といふのは罪造りな人間である。

それ故私は諸書に散見する小町傳から拾ひ集めて見ると、先づ小野といふのが姓であらうといふ立て前の者は小野氏系圖に賴らうとする。それによると、小町は出羽郡司の娘とされる。出羽國郡司良眞の女、篁の孫、妹子の裔となる。良眞も鎌倉から室町にかけては常澄或は當澄とあるし、或は良實とする。近世には良實といふのが中々多い。

文德實錄卷四、仁壽二年十二月の條に、

參議正四位下岑守長子也、岑守弘仁之初陸奥守、篁隨父客遊云々

と書いてあるから、篁は當時未だ二十にならないだらうから、それを小町の祖父とするのは愚かしいと櫻井秀氏が云つてゐるから、從てこの說の怪しさも首肯される。

小町の出生地も近江出羽上總など傳へられるが、これも畢竟は小町といふ地名にかこつけたものであるらしい。ともかく小野姓を固執する者は、小町を良實の娘とすると時代が喰ひ違つて來るからいけないが、ともかくこの家系から出たものと考へる。小野家には出羽守に任ぜられた者があつて緣故が深いし、小野の一族は出羽國に擴がつてゐるからその小野族から出たの

であると云ふ。

又玉造だといふ者は、良實が大和守に任じて上洛の途中玉造の庄で美少女に遭ひ、これを得て養女にしたといふ傳說もあれば、又玉造義景の子であるといふ說もある。

名前になると手のつけやうがないので、皆々閉口の態である。小町とは三條町、三國町と同じく宮中の局町に住んだ采女の稱で固有名詞ではない。多くの小町が居たのであると云ふ者がある。中には小野氏系圖に小町の姉が書かれてゐるので姉も采女で小野町と云ひ、妹だから小町と云つたといふ者さへ出てくる始末である。ともかく小町とは宮人にある稱號と一致してゐる。然らば實名は何と云ふか、すると適々續日本後紀卷十一に、

授無位藤原朝臣賀登子小野朝臣吉子並正六位上

とあるから小野吉子だらうなど、推定しようとする。

畢竟餘りにも有名であつて、餘りにも不明なる小野小町なればこそ、その傳紀を綴ることの興味も湧くが、憶說の限りを盡して何とか辻褄を合はせて云つて見るのであらう。小野の姓からは小野家の系圖に求め、小町の名からしては采女として數人の小町を考へ、種々なる傳說も皆主人公が異なるのだと云つてくる。例へば新井裕登著の牛馬問には「……然るをなべての小

町を一人と思ふより紛れたる說多し、たとへば實方朝臣陸奥へ下向の時髑髏の目穴より薄の生出て秋風の吹くにつけてもあなめあなめの歌の小町は小野正澄が娘の小野小町なり。文屋康秀が三河椽となりて下りし時身をうき草の根をたへて誘ふ水あらばと詠みしは高雄國分が娘の小町なり。思ひつゝぬればや人の見えつらむの歌又業平の舞の袖などいひしは出羽の郡司小野良實が娘の小町なり、高野大師の逢給ふ壯なる時驕慢最甚し衰る時愁歎猶深しと答へしは常陸國玉造義景がむすめの小町なり。かく一人ならず故に時代其外異なることあるのみ。中にも良實が娘の小町は美人にて和歌にもすぐれたれば獨り名高くすべて一人のやうに傳へ來るのみ」と小町數人說を述べてゐるなどよき例である。思ふに說話として附托された者を實在の人間に何とか結びつけて史實的に明らめやうとするのは元來說話を理解する道ではない。畢竟傳說はそれを產みし時代を考察してその內容の附托されたものを處理しなければならないのである。兎にも角にも見うぐる所、樣々の說は如何にして辻褄を合はせるかに苦心してゐるやうである。けれど從來如何なる說が作り上げられてゐるか、先づ小野小町傳をこゝに聞くとしようか。

小町は篁の裔出羽國郡司良實の娘で、出羽國雄勝郡駒形の庄小町に生れたがために、小町と名けられた。もと朝廷に仕へたことのある乳母に伴はれて小町は十三歲の時京に入り采女として宮中に入つた。頃は何時か、承和とも貞觀とも云ふ。ともかく小町の歌には遍昭、文屋康秀、安倍清行、小野貞樹とのとり交はしたものがあるから、大略そのあたりの頃であらう。

小町は才氣勝れ、特に和歌に堪能であつたので、その盛名は後宮幾多の粉黛をして顏色なからしめた。

當時皇太子正良親王は冬嗣の女順子を妃とし、更に藤原澤子、藤原貞子、滋野繩子を侍せしめたが、皇太子は小町に戀をなされた。相當纏綿たるものがあつたらしく、藤原氏の忌む所となつて宮中を引退せねばならなくなつた。彼女が宮中に仕へてゐたのは十四から十九までの六ケ年らしく、皇太子正良親王の御年では十九歲より二十四歲に渡らせられる。

扨て引退した後の小町は、比叡山の麓の小町の莊に佗住ひ、時の歌人と贈答唱和してゐた。彼女は花の盛りの年齡故云ひ寄る者も多かつたが、悉く之を退けて靡かなかつたので、小野小町の保登なしと云ふ噂が立つた。これは正良親王との間に彼女は貞操を立てるものがあつたのでもあらう。

小町は出羽へ歸省したが、承和三年出羽の小野川といふ溫泉場で折よく父と邂逅して、又都に上つた。

正良親王二十四歳にして即位せられ、仁明天皇と申上げる、その承和七年小町二十六歳の夏大旱魃があつたが、小町は勅をうけて神泉苑に雨乞ひの歌を奉つたといふ。

あめにます神も見まさば立騒ぎ天の戸川の樋口あけ給へ

その後九年、天皇は崩御あらせられ、深草の陵に葬つた。小町が山科に移り住んだのは、この後であり、尼になつたのは三十六歳の時である。百人一首の、

花の色は移りにけりないたづらに我身世にふるながめせしまに

はこの頃の歌であらうか。

或時小町は大和に行き、石上寺に遍照に會つた。彼は深草帝の崩御を悼んで佛門にはいつた貞峰宗貞である。その時唱和した歌に、

岩の上に旅寢をすればいと寒し苔の衣をわれにかさなむ　小町

世をそむく苔の衣はたゞひとりかさねばうとしいざ二人ねむ　遍昭

といふのがある。

清和天皇の貞觀の末に、文屋康秀が三河椽となつて赴任する際、彼女を誘つたところ、小町は、

わびぬれば身を浮草の根をたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ

と歌つて康秀に伴はれて三河に行つた。その頃小町は六十歳前後であつた。後常陸に行き、筑波郡山之在小野郷で世を去つたといふ。時に元慶七年七月行年七十餘歳だつたといふ。

以上は異說日本史に綴る所である。尤もその信據し難き所は、先述の櫻井氏の研究によつても知られると逃げてゐる。以上の外に尙ほ玉造小町壯衰書といふのが傳へられてゐて、その中の小町は、天成の美人で父母の寵愛を受け榮華を盡し、王妃となることを理想として多くの求婚を斥けた。然るに父母や兄弟に死別して俄かに零落し、或る獵師に嫁して一子を生んだが、夫や子に先立たれて見る影もない乞食となつて路頭に匍匐し、心中只諸佛の救濟を願つたといふ。勿論架空な人物ではあるが、これに歌人としての小町が、つまり二通りの小町が混同されて數奇な運命を極めた美人といふ概念として、多くの傳說が附會されたのであらうと說く者もあるが、玉造小町壯衰書といふのが空海撰と書するが如く、後世の附托であつて、小町などとは關係はないのである。藤原淸輔、鴨長明も小町のことにあらずと云つてゐるにかゝはらず、十訓抄、著聞集がこの壯衰書を小町のことゝしたから後世種々の說をなすに至つたのである。佛敎的敎說の中の人物に小町といふ名を使用しただけのことであつて、それ故小町といふ名が

使はれるといふ所に、已にこの書以前に小町の傳說化されたる姿があるべきである。だから以上の說明者では尙誤解に導く虞なしとはしない。しかしながら傳說の中にはこの二通りの小町が何處かに秘めることは確かである。

その傳說を拾ふならば、結婚の相手としては大江惟章、たんぢなりさと、井出寺の別當等があり、又深草少將との間には百夜通へばその戀に身を委かせるといふ言葉をたよりに九十九夜迄は通つたが、百日目の滿願の日に大雪にあつて少將は敢なく凍死したといふ百夜通ひの傳說がある。晩年は乞食になつたといふ外に發狂したとも傳へられ、死場所についても、井出、相坂等諸說があり、その髑髏は陸奥國八十島に横はつて風雨にさらされ、その目穴からは薄が生えてゐたのを業平（又は道信中將、實方朝臣等）が弔問すると「秋風のふくにつけてもあなめあなめ」と歌をよんだといふ話があつたりする。そうして此等の話はお伽草子の中に小町草子となつたり、謠曲に於いては七色小町とて組み入れられてゐる。草紙洗小町、雨乞小町、通小町、關寺小町、鸚鵡小町、卒塔婆小町、清水小町がそれである。

以上のやうに小野小町のこの言葉の上からのみの追究は畢竟何の得る所もない。今は只々古今集以下の歌集にある小野小町の歌を通しての彼女を捉へるより他に道はないのである。小野

小町はこゝにだけあるのである。然しこゝに注目されることは、古今集目錄に出羽郡司の女にして比右姫といふと書かれてゐることである。然しそれに並らべて「或は云く母は衣通姫」とあるの杜撰さより見ればこれも信をおき難いと藤岡氏は云つてゐる。然しこゝに尙一本の小野小町考に參考とすべきものがある。所謂佐竹本の三十六歌仙の繪卷である。繪は信實、詞は後京樞良經と傳へられてゐる。恐らくはそれでいゝのであらう。たゞ問題は小野小町の詞と繪である。

小野小町

小野宰相常詞女古今集目錄曰

出羽國郡司女號比古姫云云　仁明淸和兩代間人於石上有贈遍昭之哥

いろ見えでうつろうものはよの中の人のこゝろのはなにぞありける

と詞が書かれて、十二一重の衣裳を着た女の後姿が描かれてゐる。この三十六歌仙の詞も相當如何はしいものだから全部信用するわけにはいかないが、小野小町考の一助であることは確かである。作品は鎌倉初期に當る、即ちすつかり神秘的に說話化される過渡期に當るからである。後に說話化された小野小町に對して、その考證の一の方法であるからである。關谷眞可彌

氏はその著小野小町考に於いてこの繪卷を種にして次のやうな考へを述べてゐる。

宰相は參議の別名なれば承和前後にその人を求むるに參議以上にて常詞といふ人なし、依つて似よりの名前を求むるに參議藤原常嗣あり、常嗣は承和七年四月廿三日薨去、年四十五、逆算すれば弘仁六年即ち二十歳の時小町が生れたことになる。小野（京都在）に住んでゐたので小野宰相と云はれたものか。小町の本名は藤原比古姫なり。小野とは父の小野宰相と呼ばれし家號にして、小町は宮中の呼名と見るを穩當とす。と說いて常詞は常嗣の誤りだらうとし、小町は常嗣の長子興邦の姉に當るとしてゐる。興邦の母は尊卑分脈に左大臣緒嗣の女、一本には冬嗣の女とあり、小町が興邦と同母の姉とすれば緒嗣の孫にして、桓武平城の皇后も共に叔母に當り、淳和帝の母は從姉に當り、その背景は立派である。又一本冬嗣の女がその母とすれば五條后及忠仁公は叔父母に當り、文德天皇染殿后二條后及昭宣公は兄弟に當る間柄となり、かかる背景ありたればこそ皇孫たる遍昭、業平等と對等の應酬も爲し得られたと首肯することが出來る。小野小町は出羽郡司の女とは古今集目錄より始まりしなるべし、比古姫を比右姫と誤まり母を衣通姫云々と書きしはひどい、と書いてゐる。面白いには違ひないが、その論述が餘りにも凡て獨斷的口調を帶びてゐる。常詞は無いから常嗣の書き誤りで「あらう」から、初ま

つて、扨てそれが如何にして小野宰相と呼ばれしかは論證されず、小野に住んでゐたのが果して確かなことかも論ぜられず、さつぱりわからない小野姓を持ち出して、小野は藤原姓だのに小野と云はれたと云ふあたり、傳說の「小野」を決定すべきその結論からしてそれを前提として史實をだらうだらうと推論して行く珊環論法や、常嗣の子興邦の母の素性を家系正しく認めたとて、小町がその母の子であるかどうかゞ決まらない時、「若し同母の姉とすれば」など臆測して推論に便するなど、畢竟傳說としての小町を決定するのが如何に困難であるかを示すものと思はれるつまりこの一說も「私はかう思ふ」といふに止まつてゐる。この歌仙繪の詞にしても既に古今集目錄にはかう云つてゐると書き添へねばならぬ程、小町は曖昧にされた輪廓の持主であつたことを示してゐるからである。この時小町の生存推定時期から三百年を過ぎてゐる。

このやうな次第で鎌倉のその昔より、小町程人氣ありながら、その傳記のわからない人も少ないのである。凡そ才女には後世傳說の附會される傾向のあることは、小町もその例證にされる次第であるが、畢竟それは誰の名前でもいゝのである。小野小町といふレッテルをその女主人公に貼り付けたに止まるのであるが、如何にして小町がかく迄人氣を負ふに至つたかは依然として解かれぬ謎でなければならない。

小町は絶世の美人とされる。然し衣通姫や光明皇后、檀林皇后には容貌容姿を形容したものが傳はつてゐるが小町には殘つてゐない。だからどういふ美人であつたかは想像に苦しむ次第であるが、かの信實筆三十六歌仙の繪に於いてその肖像画を求めて見ようとすれば、實にその小町は後姿にして顔が画かれてゐないのである。美人と傳へられてゐながら、どんな美人かわからないので、信實も困つた擧句、後を向かしてしまつたかと思ふと微笑を禁じ得ないものがある。

平家物語には「小野小町と云ひける者は、いろ姿人にすぐれ、情けの深かりければ、見る人聞く人、心をいためぬは無かりけり、されど其の道には心強き名を取りけるにや、人の思ひ、漸う積もりて、果は風を防く便もなく」云々と書かれ、かく貞操正しき女として傳へられてゐたのが、古今著聞集になると「小野小町が若くして色を好みしころ、もてなし有樣たぐひ無かりける」云々と書かれて好色ものになつてゐる。深草少將百夜通ひの話にしてもよくこれと首尾相照らしてゐる。

小町は、美人だつた、しかも男にはつれない女だつた。これが傳說の女主人公である。只それだけの話である。我々はそこから何を引き出さうにもどうにも仕樣のないこと、以上書かれ

た通りの結果である。それ故我々はかゝる俗說を離れて直ちに小野小町として傳へられる歌を考察すべきであつて、又それのみが唯一の道である。

奈良朝の萬葉集より平安朝の古今集が編まれるその間にあつて、小町は實に平安朝歌壇の先驅者の一人である。紀貫之はその古今集序に於いて「小野小町は古の衣通姫の流なり。あはれなるやうにて强からず、いはゞよき女の惱めるところあるに似たり、强からぬは女の歌なればなるべし」と批評してゐるやうに、ともかく批評の對象にされて將來六歌仙の一人として尊ばれるもとを置いた。寔に序文の批評の如く小町の歌は實にやさしい女性的な美を具へつゝその底には奔放なる情熱を藏すかに見えて、彼女の分裂的な性格を示してゐるかのやうに思はれる。感情をあるがまゝに、却つて散文的な口調に迄自由に歌つてゐるのが特色であらう。

家集には小町集があるが杜撰なものである。勅撰集に入れるものは古今集十七、後撰集四、新古今集以下に凡そ四十二、合計六十二首に及ぶ、その他私撰集に入るものでは、新撰和歌集五、その他傳說に伴ふもの數首を數へられる。そのうち自然詩は四首で、他の人生を歌へるものゝ大部分は戀歌である。要するに彼女は戀愛詩人だつたといへる。

うたゝねに戀しき人を見てしより夢てふものはたのみそめてき

思ひつゝぬればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを

夢と海とは小町が常套的に用ひた素材であつたが、このやうな表現には萬葉集にある卒直な告白といふよりは、現實に對して技巧的な見方を暗示する平安朝を見ることが出來る。底に深い戀の思ひが罩められてゐる。然し彼女の戀愛は幸福ではなかつたか哀しい歌が澤山殘されてゐる。凱歌を擧げるやうなのは無いのである。

ある人の心がはりして見えしに
心からうきたる船にのりそめて一日も波にぬれぬ日ぞなき

と涙のかはかぬことを云つてゐる。

やむごとなき人の忍びたまふに
現にはさもこそあらめ夢にさへ人めつゝむと見るがわびしき

と誰か貴人との秘かなる逢瀬のあつたことを語り、しかもそれも悲しみのうちに閉ざされてゐたのであらう。

心にもかなはざりける世の中をうき身はみじと思ひけるかな
海人のすむうらこぐ舟のかぢをなみ世をうみ渡るわれぞ悲しき

花のいろはうつりにけりないたづらに我身世にふるながめせしまに

と泣いてゐる。遂に求め得られなかつた戀の涙にぬれた歌である。要するに彼女の歌は得意の歌ではない。かゝる戀愛を通つた彼女は年老いて文屋康秀に三河へ來ないかと誘はれて、「わびぬれば」の歌を贈つたが、そこには一脈の自棄的な所さへ見えて、彼女の一生が何如にもの哀しいものであつたかを示してゐる。幸薄き星の下にあつた。これが彼女の一生だつたのである。

こゝに於て我々は小町は好色だつたの、男に對して驕慢だつたのといふ傳說に對して、如何に戀に惱める女たりしかを知るのである。全く可哀さうな女であつたであらう。その戀の相手はやむごとなき人だつた爲か、會ふ瀨も少なかつたか、夢になりとも會ひたいと願つて、衣を裏返へしにして寢れば夢を見るといふ云ひ傳へを眞にうけて、夜の衣を裏返しにして寢る程の切ない戀をした女だつた。彼女の晩年は若い頃の驕慢のたゝりで遂には野垂死をしたといふ。云はば自業自得で、いゝ氣持だといふやうな筋會ひの傳說には、私は何となく小町をかばつてやりたい氣持になる。美人はとかく、振られた男に怨を買ふが、終を全うせしめた話は尠ないのである。クレオパトラ、揚貴妃共に非業の最期を遂げてゐるのも一奇である。

小町についての最も有名な深草少將百夜通ひの傳說を、黑岩氏の說く所を紹介して私はこの稿を終らうと思ふ。

彼は深草少將を義宣或は良峯宗貞とされるがそうではない。深草の御門と申されるは仁明天皇のことであると云ふ。明言を憚かつた爲に深草少將といふ說話になつたのであらうと云ふ。即ち小町が宮中に仕へてゐた時の正良親王であらせられる。崩御の後深草の陵に葬られたので深草の御門と呼ばれたのである。その百夜通ひといふのは、

あかつきの人の羽がき百羽がき君が來ぬ夜は我れぞ數かく

の古今集の歌から三字を改めて、

あかつきの榻の端しかき百夜がき君が來ぬ夜は我れぞ數かく

とかへて、百夜通ひの歌となつたと顯昭法師の說明がある。これを說話者がもぢつたのであらう。榻とは牛車の轅棒をのせる臺である。深草の少將が牛車にのつて小町の許に通つて云ひ寄つたが應じない。百夜通へば身を委かせるといふので少將は非常によろこび、夜の曉け方に、なつて別れる時、車に乘らうとして榻の端へ一度來た證に一の數をひいて、その後は毎夜來る度に一線づゝふやして行つた。これが「曉の榻の端がき百夜がき」の意味である。然しそのう

ちに小町も心が動き、少將の來ぬ夜は自ら悶えて早く百夜の數が滿つればよいと、數を自ら書き足したいと焦れた。之が「君が來ぬ夜は我ぞ數かく」の意味である。かういふのである。

勿論架空な物語である。小町の歌に「やむごとなき人の忍び給ふに」と歌詞のある歌があることから思ふと、御身分故に夢に會ふさへ世間晴れてといふことが出來ず、御微行なりといふ意が含まれてゐると思ふ。その上に、戀しき人がこの世を去られたとき彼女が詠める長歌には、

いつか戀しき雲の上の人に逢ひ見て此世には思ふことなき月とは爲るべき

と終りに書いてある。戀しき人は雲の上人であつた。かういふのである。

藤原道綱の母

——蜻蛉日記の作者——

平安朝は我が女性が文學の世界に於いて萬丈の氣焔を吐いた時代である。特にその中期に於ける物語日記草紙の類は日本の全歴史を通じての誇りであるばかりでなく、又實に世界文學界の至寶である。紫式部の源氏物語、清少納言の枕草紙は共に燦然と輝いてその最高峰であることは云ふ迄もないが、又この蜻蛉日記三卷も、彼等の光に消され難き特異なる存在であることを忘れてはならない。

蜻蛉日記は、その名前はわからないが道綱の母と傳へられる者の作である。後に攝政關白になつた藤原兼家が未だ微なりし頃通ひ初めたその貴婦人が、兼家とは別居しながら、その間に生まれた一子道綱の生長を賴りに暮した家庭生活の手記である。その記事は天德、應和、康保、安和、天祿、天延に至る廿一年に亘つてゐる。

さうして我々はこの現實生活の破綻に懊惱する記事を讀んで、或は當時の女性が如何に男性の玩弄物であつたか、家庭生活とはどんなものであつたかを知る一種の材料と考へることは出來るであらうが、然しながら、この日記を綴いて端的に我等を打つ所のものは、あらゆる女性としての苦惱を身を以つて生活したその靈の涙の記錄であるといふ感銘である。

うら若き日の戀に契りを重ねて、やがて身籠る頃の親切だつた兼家が、その道綱が生れ出づる頃から早くも他所の女に心ひかれて、追々に足の遠のくあたりから、一途に兼家を賴つてその愛の獨占を願つて止まない彼女は、捨て去られて行く淋しさの中に、あらゆる苦惱を嘗める身となつた。或時は焦がれ或時は憎み、或時は燒くやうな嫉妬を他所の女に感じ、又女も捨てられると聞いては骨を刺すやうな殘忍な歡びを感じたりする。すねたり、いさかつたり、實に女性のあらゆる生活を感情した。遂には御佛の力に賴らうとし、或時は死んで甲斐なきものと悲んだりしたが、そのどうにもならないながらも現實への絆は、一子道綱への愛情がほのかにしかも確乎として發展して、この母性愛の自覺のうちに、わづかに安住の地が見出されてゆく。さうして、ゆくりなくも身のまはりの自然に靜な眼指しを送りながら、自然の美が彼女を慰めてくれるといふ生活の破綻から生じた苦惱の中に、母性の愛と自然とを自覺して行つた所の、

讀み行けば讀み行く程我等の胸を打たねば止まない所の、眞情あふるゝ人生記錄である。彼女は自らの靈の底に身を投げいれて、女性ならば必らずや體驗するであらう所の生活感情を、否女性ならでは捉へることの出來なかつたであらう所の女の生活感情を記錄したのである。當時の社會風習に束縛されてゐたが故に、尙一層切實に響くであらう彼女の血のにじむやうな涙聲も、實はかゝる家族制度の桎梏なくとも、尙依然として女性の惱みであらうと思はれる、實にそのやうな生きる限りの女性の心の問題が記錄されたのだ。

そのやうに私にこの日記は訴へてくる。一人の貞淑な婦人が一人の男を賴りに、堅く身を守るといふやうな、そのやうな事柄から生れてくる感心ではない。純心に愛情あるものが報ひられない嘆きである。何處にも遣り所のない悶へである。この苦惱が彼女を驅つてあらゆる生活感情を體驗せしめたのである。彼女のこの廿一年間の生活は外面的には何等動きのない平穩なものであつたと云へようが、彼女の心の經驗は波瀾を極めて人生の眞髓に迫らうとしてゐる。彼女を捉へ、日記に殘されたくさぐさの記錄は、皆さゝやかにして純眞なる姿のものゝみであつた。そしてこの日記全般に亘つて如何に泌み透るやうな愛情がみなぎつてゐることか、ましてふと屋根に置く霜の白さに冬を感じたりする彼女の感覺の新鮮さは、その感傷性が一般に平

安朝的であるといふことを措いて、鮮やかに彼女の「詩人」を覺える。この日記を文學作品として批評紹介するのは、かゝる女性評傳の如き種類の本の目的とする所ではない故他日にゆづるとするが、只次のことだけは云つて置きたい。

日記の上卷に、「物はかなきを思へば、あるかなきかの心ちする、かげらうの日記といふべし」とあるやうに、藝術的な深い觀照を以つて、自已の果敢ない過去を、ゆらゆらとゆらめく陽炎のやうなものとして半ば隨筆めいて書きとめたのであつて、一種浪漫的な感慨のもとに出來上つてゐる。そこには女性の生活が表現され、魂の靜かな凝視、人生への矛盾に富める、がしかし滋味ある愛が實に切々として書かれてゐるのであるが、これは畢竟は彼女の眞率なる性情より自然とにじみ出たやうなものであつて、必らずしも人生記錄として意圖して書かれたわけではない。彼女にとつてはたゞ愛への浪漫なる悶へであつたと云へる。それ故彼女がその周圍の世界が持つ傳統的束縛には何の反省もなく、只どうにもならないものとして受けいれられてゐて、例へば兼家が情れない仕打を責めることも、或は道綱が可哀そうな取扱ひを父兼家から受けることにかつと眩む程に腹立たしく情れなくなつても、結局は彼女はぢつとその運命を受けてゐるだけである。進んで打開しようとはしないのである。）かゝる消極性は男に對しても

社會に對しても平安朝女性の性格を形付くつてゐるのであつて、必らずしも道綱母に限つたことではない。素朴にして自由だつた萬葉女流に比較して、運命に無反省な、感傷性にのみ洗練された消極的な女性を私は平安朝に見るのである。蜻蛉日記も亦かゝる雰圍氣の中にあつてその浪漫的な感懷を盛つたものである。それには相違はない。しかもさういふものでありながら尙も堂々たる人生記錄の感酷を起させるのは、一つに作家がその魂への眞率な態度があつたに依るのである。蜻蛉日記が不朽の名作であるのもこゝに在るのである。

即ち深い藝術的觀照によつて、彼女は自己の魂への凝視に、女性のあらゆる心を體驗せしめて、人生と自然との愛に目覺めたのである。私はこの道程の順當さに著者の魂の成長を見る思ひがする。餘りにもいぢらしく涙をさへ覺えて。

それ故私はこの作家の傳記を編むことに一種の情熱をさへ覺ゆる次第であるが、そんな些やかな傳記の何ものよりもこの日記三卷の藝術的なるもの、雄辯なるに若かないのである。

彼女は作者部類に右大將道綱母陸奥守藤原倫寧女とある人である。倫寧は冬嗣の曾孫惟岳の子である。伊勢守、上總守、河內守、丹波守、常陸守、右兵衞佐、右馬助となつた人で、その母は山城守恒基王の女で歌人であつた。倫寧の子には男では理能長能あり、女は道綱母の外にその姉と妹

とで三人あつた。姉は爲雅妻となり妹は考標の妻となつてゐる。長能は有名な歌人で、能因は彼について歌を學んだ。(袋草紙三) 彼は花山院に於いて詠じた三月盡の歌を公任に罵倒されて慚死したと傳へられる程に藝術的良心に强い人であつた。家集長能集の卷末に附けられた略傳では道綱兄となつてゐるが、中古歌仙傳に云ふやうに弟といふが正しいらしい。また彼女の妹の菅原考標にとついだ女は更級日記等夢幻的浪漫的な作品を殘した藝術的天分の豐な女性であつた。このやうに彼女の家族は藝術的才能に惠まれて居り、道綱母も亦その血の中には已に藝術的なる香りを宿して流れてゐたことが察せられる。

彼女はその名も年も明らかではない。しかし兼家が通ひ初めた天曆八年には彼は二十六歳に當るから、以つて彼女の年齡に想像をいれることも出來ないわけではない。

彼女は美人であつたらしい。それは系圖、及び顯照の和歌色葉集、名譽歌仙傳に本朝第一美人三人內也とある。三美人と云ふのは光明皇后、麗景殿女御、道綱母、又一說に衣通姬、染殿后、道綱母と云はれる。然しこの三美人內也といふのは鎌倉以後のことであらうが (弘長二年書寫の色葉集には載つてゐない) ともかく日記の中にも美人だと褒められたことが書いてあるから、美人だつたには違ひなからう。

彼女が藝術的才分はこの日記文に表らはれたに止まらず、彼女は當時の名譽ある歌人たらしめてゐる。大鏡、枕草紙等にも賞讃されてゐるばかりか、寛和二年の内裏歌合にも出席してゐる。その席上郭公を詠んで、

都人ねてまつらぬや郭公いまぞ山邊をなきてすぐなる

といふ和歌は後に清輔が郭公秀歌五首として貫之、公忠、兼盛、實方と共に推賞した所である。彼女の歌は道綱母集又は傳大納言母上集として家集に編まれてゐる。然しこれは彼女自身が集めたものではなく、敬語等が使用されてゐるから、誰か他の人が編纂したものに違ひないが、これが何時の間にかこの蜻蛉日記の末尾に附加されて流布してゐる。八冊目の中より下の部である。

愚抄抄下に、

道綱母はくらき所にてよみならひたるとかや、いつも灯火をそむけて目をとぢて案ぜられ侍りけるとなん

とあるから、彼女が創作の苦心の大なることが察せられる。

このやうに彼女は才色兼備の人であつた。しかも當時の宮廷の女性に見られるやうな、例へ

ば和泉式部や赤染衛門のやうな素行治まらざる者に比して雲泥の差のある貞淑溫良な婦人であつたことは、日記三卷の何處にも浮いた話がないのでもわかる。兼家に疑はれたことさへ只一度だけといふ婦人であつた。この日記は天延二年十一月の頃で中絶してゐて、その後どうしたかわからない、その後十六年、攝政太政大臣兼家は六十二歳で薨じてゐるが、その頃彼女はまだ存命であつたことは知られる。或は晩年は尼だつたかもしれない。

歿年はわからない。然し小右記長德二年五月二日には、

新中納言通綱母周忌法事送七僧云々

とあるから、これを一周忌と考へると長德元年五月二日に歿したことになる。

扨て、顧みると以上の如き穿鑿はこの蜻蛉日記に何等增益するものではない一種の蛇足に過ぎないやうな氣持さへする。そこで最後に、では彼女はいつ頃この日記を執筆したのであらうか。藤岡博士は天祿二年頃に執筆され、前の分を追記したのであらうとその著國文學全史に說いてゐるが、寧ろ日記の終つてゐる天延二年以後歿年迄の間に書かれたのであらうと思ふ。

日記には錯簡がある。脫落したのであらう。そこで私はこんな推測をして見る。長德元年に歿したとすれば正曆より後れること六年である。天延二年よりは廿年後に當るわけであるが、

何となく正暦頃兼家の死の前後に、丁度彼女も五十歳を過ぎた頃合であるし、何か泌々と自己の過去をふり返へつて見るやうな氣持になつたのではないかと思ふ。自己の一生涯の苦惱の種であつたが、ともかくも懐かしい人の死、これが動機ではなかつたかと思ふ。さうして天延二年以後の分は恐らく脱落してしまつたのではないだらうか。

以上によつてこの蜻蛉日記による記述は終つたやうに思ふが、ついでに兼家が妻妾のことに書き及んで筆を擱かう。何故ならば蜻蛉日記を嫉妬の文學であるといふ一面的な批評迄ある位ひ其處には女の心に喰ひ入る嫉妬が書かれてゐる。勿論彼女を惱ました女の人達であるからである。又これによつて兼家が如何に好色だつたかも知れて、讀者は蜻蛉日記の作家により大なる同情を禁ぜずには居られないと思ふからである。

先づ攝津守藤原中正の女がある。道隆、道兼、道長、超子、詮子を生む、次に對の方がある。皇太后權大夫從三位國章の女である。綏子を生む。對の方は好色にして、初め道隆の妾として三條の宮の御匣殿になつた女を生んだ、その對の方を父なる兼家が奪つたのである。御匣殿は綏子の妹とあるが實は姉である。兼家には尙これに類した行爲がある。近江といふ女に通つたが、彼女は兼家の伯父の實賴の召人だつたが、彼の死後美人の譽が高かつたので通つたのであ

る。源宰相兼忠の女にも通ひ一女を生んだ。道綱母が乞ふて養女にした女である。尙日記によると町の小路に居る女で、一女を生んだ者もある。又村上帝の女三宮を愛したが後女御殿超子の侍女の大輔に變へたので、三宮は恥かしく思つてなくなられたといふ話が榮華物語に出てゐる程彼は罪作りであつた。

要するに兼家は當時の長者の例に漏れず、單なる情慾の相手として女を漁つた男であつたらしい。道綱母の悲劇は寔に同情に値する。なほ道綱は兼家の第二男に當るのである。

清少納言

清少納言は源氏物語の紫式部と共に我國女流文人の特に代表的な双璧である。古來幾多の研究がこの二人に就いてはあらゆる分野に進められた。然しながら、その傳記は依然として判然としない人の部類に屬してゐる。平安朝女性の傳記不明は一般的のことながら殘念なことには清少納言のやうに不朽の名文を殘した人でさへもその一人であらねばならぬのである。

清少納言は、

清原深養父——顯忠——元輔——清少納言と傳へられる。深養父は古今集に載せられてゐる程有名な歌人であり、清少納言の父なる元輔も後撰集の撰者の一人、即ち梨壺の五人の一人として有數なる歌人で、河内大椽となり、正暦元年八十二歳で歿してゐる。

こゝあたり迄の家系は幾分分つてゐるが、肝心の清少納言となると急に不明瞭になり、生年歿年からその名前までも明らかでない。

伊勢貞丈によると諸子と云つたとあるが、眞僞の程は保證の限りでない。無名草子には檜垣の嫗の子と記してあるが、元輔が肥後守であつた頃は檜垣の嫗は文字通り嫗だつたらしいからこれも當てにはならない。女房作者部類六によると、七年にして手をよく書き、十三歳にして令義解を講じ、廿歳にして歌人として知られたとあるから、之を全部信じないにしても、幼少より頴敏だつたといふ傳へのあつたことだけは本當のやうに思はれる。兎も角も彼女は元輔の一人子であり、自身はお嫁にも行かず子供もなく、皇后定子の宮に仕へてゐた。枕草子、清少納言集の作家であるといふだけが傳へられてゐる女姓である。枕草子の名聲嘖々として我國隨筆文學の明星とされるに比して、清少納言の傳記は誠に哀れを止めてゐると思はれる。然しながら名にし負ふ枕草子の作家であるからにはその傳記も穿鑿せられ、追々と研究されるのも當然の歸趨ではないかと思ふ。

森氏の清少納言の家庭についての研究によると、通説には反して清少納言にはなほ致信、戒秀の二人の兄弟があると云ふ。彼は種々の清原氏系圖より以上二人を拾つたのである。致信は太宰小監號清監と註があり、戒秀は「歌人山」と註記がある。思ふに比叡山の僧にして歌人の意味であらう。勅撰作者部類には「清原元輔子」とある。定額の父である。

清少納言は一生妻とならずと傳へられるが、續作者部類庶女の部に「清少納言が女新拾に一首」とあり、父は不明とされる。彼女の情人は枕草子の記事でも種々考へられるので、契沖の如きは、行成の子かと云つてゐるが、憶說に止まる。然しこゝに清原氏系圖中、清少納言の傍註に、攝津守藤原棟世妻と明記されてゐるものがある。つまり清少納言は棟世の許に嫁いだことになるのである。棟世は南家眞作の流れで、天曆三年卒、從五位下伊賀守保方の長子、正四位下左中辨、筑前、山城、攝津守となつたと尊卑分脈に出てゐる。只これだけはつきりしてゐて、尙新拾遺集の釋敎に清少納言女として名付けられるには少し可怪しい點がないではないが、森氏は母なる清少納言の名が有名だつたから、そのやうに云はれたのであらうと云つてゐる。棟世の生歿年は不明である。只その弟の棟列が花山天皇の永觀二年に卒したとあるから凡そその頃と推定するだけである。棟世と清少納言との關係については、他に傍證となるべき史料はない。枕草子にも出てゐない。この爲め彼女の結婚のことが、すつかり世人から忘れられて一生妻とならずと云はれるやうになつたのであらうと云つてゐる。そこで森氏は想像すらく、彼女は若くして棟世に嫁いだが、兩者の年齢は相異があつたらしいから、その後別れたか、又は棟世が老いて歿したかで、清少納言は寡婦となり、三十歳前後で宮仕へに上つたのだらうと考へ

てゐる。

もとノ、、清少納言の年齢は不明である。齊信行成と親交があつたので、その頃合の年輩かと考へることも出來るが、それも只考へて見るだけのことである。從つて分らないといふより他に仕方はない。彼女が皇后定子の宮に仕へたのは正曆三年頃か。その時彼女は自分を「いとさだすぎふるぶるしき人の」と云ひ、「若からん」人の中にあつて自らの年ふけてゐることを示してゐるから、三十を越してゐるのではないかと思はれる。行成齊信の近くの年輩とすると廿四、五歳に當るが、もつと更けてゐたのではなからうか、これとて憶說に過ぎないこと同斷である。

彼女は長保二三年頃、定子の崩御迄宮仕へしてゐたやうである。この間約十年間に當るが、崩御後は宮中を退いて、その後は不遇であつたらしく、又出でゝ宮仕へしたやうにも思はれない。

定子は道隆の女で、一條天皇の中宮より皇后になられたお方であるが、道隆薨じて後、伊周隆家の事變があつて、道長がその間すつかり勢力を張つてしまひ、その子彰子を中宮に奉つて定子の威勢は全くその面貌をかへてしまつた。定子は怪しき死を遂げたと傳へられる程で、道

隆、道長の勢力爭ひは史上明白なことであつたし、又定子彰子の後宮の勢力爭ひも自ら捲き込まれた流れであつた。

當時彰子の侍女には紫式部あり、和泉式部あり、定子には清少納言あつてその才を競つたのである。

中宮の問題をこゝで說くのは好ましくないが、藤原氏は外戚としての勢力を張る爲め、各家は競つて中宮を奉り、皇子の御誕生を祈り、外戚の威を振ふ便宜にしたやうである。その爲めに各家は女子の生まれることを願ひ、その成長にはあらゆる努力を惜まず、後宮に入る資格を作らしめやうとした。その教養の爲めに先生としての才女を要し、かくて平安朝に才女の輩出を見るの結果を齎したのである。定子、彰子の周圍に才女が雲のやうに集つたのもこの一つの現象である。それ故に又道隆薨ずるや忽ちにして定子の身上に秋風落莫として吹き荒ぶのも當然のあらはれであつた。

このやうな事情の中に清少納言は彰子の侍女を向ふにまはしてその才を振つたのであらう。この宮中奉仕時代の彼女の颯爽たる振舞は、枕草子に傳へられる所であつて、その機智縱横にして博學多識なること後宮の女子は勿論、當時殿上の男子をして顏色なからしめてゐる。彼女

は史記、漢書、蒙求、文選、白氏文集等を讀皆んでゐたらしい。千定國、孟嘗君、九品蓮臺、香廬峰の雪の逸話はよくその才智を示して餘りがある。その爲定子に愛せられたことも首肯せられる所である。

定子崩御の後、宮を退いて又仕へずといふのも不遇だつた定子に對する同情が强かつたからでもあらう。父道隆薨じ、道長の全盛となれば兄なる伊周は流謫せられ、定子の生ませられた皇子は御即位も叶はず、勢力全く地に墜ち、茅屋に怪死を傳へられる程であるから、數多の女官は多く散々になつて行く中に、清少納言だけは最後迄皇后と運命を共にしたのである。それ故宮を退いてより全く不遇の中に悲慘な末路を遂げたといふが、その狀態は想像に難くない。

彼女程の才女をどうしてむざむざかゝる目に會ふやうな仕儀に立ち至らしめたかは上述の社會情勢で說明しなくてもわかる所である。畢竟は彼女は餘りにも定子方としての勇將だつたことである。後に天下は移つて道長、彰子の天下になつた場合、彼女の才智に壓倒せられてゐた人たちの反感もあつたらうし、彼女の意地もあつたらうし、動きが取れなかつたのであらう。或は甘んじてその苦杯を受けたかも知れない。ともかくその後の消息は一切不明である。

思ふにその後は道長の威望獨り隆々として、この世をば我が世とぞ思ふといふ有樣であつた

から、世の記錄者が主として道長系に關することを書き殘すのは考へられる道順である。

それ故、清少納言とは公の立場を反對にした紫式部が、幾分なりともその傳記の編まれるに都合よき記錄を搜し得るに反して、その敵役の清少納言への傍證を欲くに至つたのであらうと思ふ。

彼女の悲慘なる末路については、古事談、無名草子、續千載集、清少納言集などに傳へられてゐる。それによると、零落して後尼となり、都の片ほとりに草庵を結んで住んでゐると、一日若殿原が通り過ぎた。昔名高かりし清少納言のなれの果てかと、そゞろに感懷を催して馬の足を停めた所、內よりしやがら聲で「駿馬の骨を買はぬか」と聲がしたといふのである。この逸話はすつかり說話めいてゐるから、只そのやうな逸話があるとするより他に仕方はないが、續千載には、老の後こもりゐて侍りけるを人の尋ねまうできたりければと詞書があり、新古今集にも、元輔がむかし住みける家のかたはらに清少納言すみけるころなどと書かれてゐるから崩御の後は尼となつて都近い所に住んだものであらうと思はれる。

彼女程の才と學とを持ちながら、晩年をかくして送つたかと思ふ時、皇后に對する至誠の心持や、時流に對する白眼も思はれて、女の意氣の程が感ぜられるのはうれしい次第である。

扶桑拾葉集、作者系圖に、後上東門院侍女となるとあるのは誤りであらうと思ふ。只彼女は道長の室倫子とは親密であつたことは清少納言集に見えてゐて、これが當時道隆對道長の爭ひの分明な時代であるだけに、定子より疑はれた所であるが、枕草子には彰子のことは一言もない所を見ると、矢張り彰子の上東門院に後仕へたといふのも疑はしいと思はれる。女の意地として、これまで敵とした彰子の侍女の仲間入りは何としても出來ない性分であつた。だからこれは誤りと思つて至當であらう。尙ほ春曙抄には、榮花物語に三條院の女御淑景舍、即ち定子の妹に宮仕へしたとあるが、榮花物語を讀みそこなつたのであつて、そんな本文はないから、これも誤りである。

彼女は何處で歿したか、これについては各地に傳說を殘してゐる。讃岐象頭山の鐘樓の傍にも墳があり（閑田隨筆）、又近江にある（一話一言）、或は阿波國撫養郡に五輪の塔があると傳へる（和漢三才圖會）、又これ等には種々なる土俗的說話を傳へてゐて、小野小町や和泉式部等と共に說話研究上の資料である。

枕草子を通して知られる彼女は、ともかくも學問を積み、才はじけた女性であつた。物事に對しても實に鋭敏なる感受性あることを示し、その點枕草子なる隨筆文學を以てその道の雄者

たることを得たのである。室町時代になつて吉田兼好法師が眞似て徒然草を書いたが、遠く及ばない。その藝術味は古今獨歩と云つてよい。

枕草子は李義山の雜纂を模倣すると云ふ者もあるが當らぬ說である。池田氏は枕草子には大體類纂的な部分、打聞的な部分隨筆的部分と三つに區分せられ、その間統一がないやうだが恐らくはもと三本あつて後に枕草子なる一冊にまぎれ組まれて、現今のやうな形になつたのであらうと說いてゐる。

その第一の類纂的には學術的興味のものを盛り、第二の打聞的とは衒學的興味のもとに、第三の隨筆的とは純粹に創作的な感興で筆を取り成立したものと見る。即ち池田氏は、第一は學問藝術の實用的動機が主、第二は勝氣な氣まゝな婦人の得意な雄辯を通しての自己滿足が主、第三は永遠の美に向ふ創作的動機が主と考へる。それ故若し紫式部の源氏物語と比較するといふならば、かの長編の周密なることは到底同日に談ずべからざるものであることは確かではあるが、然しこの隨筆文學には又それ自身の獨自の境地がある。尙云ふならば、かゝる形式の文學を創始したといふ所に於いて已に絕大の功績が認められなければならない。私はこゝで隨筆文學の効能を並らべるつもりはない。只正當な長編的小說なる文學に對して隨筆文學は作者の

個性に徹することの出來る、つまり矛盾を矛盾としてそのまゝ表現し得るやうな、一種の內面的價値を持つことの出來る文學であること、それ故又自ら別の世界を持つものであることを云へば足りる、事實我々は枕草子を通して淸少納言の性格を知るばかりでなく、矢張りその藝術的深さに於いて、源氏と共に我が國文學の華であることに異論はないのである。

彼女は冷度和歌を作るやうな創作慾で、創作してゐる。鮮やかな潑剌たる感覺、作者にして初めて見られる自然なり人生、それに多彩なる諧調を加へるものは、これこそ彼女の獨壇場である。その自由にして奔放なる、何人が眞似して得られるものであらうか。一言にして個性に徹したる作品であると云へる。冷靜にして知的なる、且つ人事への諷刺、浪漫的にしてしかも寫實的なる傾向を示す作品、矢張り源氏物語の感傷的なるに對して特異なる感覺性であることを示す。

然し彼女は何處か態度に磊落粗放なる所があつて、何處までも男まさりの、或は人を人とも思はぬやうな振舞が見られ、驕慢にして、女らしからざるものとしての非難は當るやうである。中關白記によると、大酒不二女所爲一と云つてゐる彼女は女だてらに大酒飲みであつたらしい。

これらの餘りにも才勝りたる行動は、紫式部に次のやうな批評を書かしめてゐる。「淸少納言

こそしたり顔にいみじふ侍りけん、さばかりさかしらだち、眞字かき散らして侍りける程もよくみればまだいとたへぬことおほかり」と云ふ。えらそうにしてゐて本字なぞ書き散らしてゐるが、よく〳〵見ればまだまだ未熟な所も多いといふのである。

清少納言には枕草子の外に、清少納言集といふ家集がある。彼女は歌人元輔の子に似合はず歌はさして上手ではなかつた。又彼女自身もよく之を自覺してゐて、和歌に關しては謙遜であつた。このことは實に紫式部の批評を否定し得べきよき材料であつて、彼女は身の短所と長所をよくわきまへて、へり下だつてゐる。だから驕慢に見えた行爲も或は彼女の反抗的な心のやり場だつたと思ふべきではないか。少くとも彼女は勝氣な女だけが持つ一種の空虛をそこに感じてゐたと思はれる。

このことは、彼女が憂愁に閉された家集を持つてゐるのでもその間の消息を窺ふことが出來る。一般に紫式部と比較して彼は靜に對して動だといふ、如何にも一見云ひ得たやうな言葉であるが、じつと裏にこめてゐた紫式部に對しては思つたことをぽんぽん行爲や言葉で外に表はす性質を彼女は持つてゐた。これは彼女が直截にして淡白な性格だつたことを示すのであつてそれがこれ迄の批評のやうに必ずしも上辷りの人間であることを示すのではない。

然し彼女はともかく一種の刺を持つて周圍に對してゐたことはわかる。彼女は自然の美に嘆稱してゐる澄んだ彼女の中に已に或る機智的なるものが見える。この刺を持つたる性格が時に誤解を生み出したもとであり、しかも彼女が彼女であつたものである。彼女に對する數々の好もしからぬ逸話は凡てこの刺にさゝれた者が漏らす反感であつたと考へることによつて、彼女の本質と、それに反する說話とを考へる矛盾を除くことが出來るやうに思はれる。それは紫式部日記の寛弘六年の條に、清少納言を罵倒した末に、「そのあだになりぬる人の果いかでかよく侍らん」と云つてゐるのを見ればよくわかると思ふ。又紫式部が源氏物語の評判が餘り高いので、自分はくもる源氏といふのを書いたが、比較にもならぬ駄作だつたので自ら破つて枕草子を作つたなど云ふ話と實によくこの消息を語る反感の結果の作り話である。

彼女には外に松島日記といふのがあるとなつてゐるが、勿論僞作である。

紫式部

源氏物語が平安朝文學の粹であることは贅言を要せぬ所であるばかりでなく、日本文學の代表作品である。世界最古の最大の長編小說であつて、ダンテの神曲に先立つこと三百年である。

しかし作者紫式部の傳記となると、その偉勳に拘はらず、その著紫式部日記、家集紫式部集その他による推定に止まるのは餘儀なき次第である。平安朝時代の女性は皆この程度である。殘念ながら致し方ない。然し紫式部は古來我文學殊に歌の方面の大事な人物とされてきただけに研究も深く多方面に亘り、ともかくもその傳記の編まれてゐるのは此際幸福としなければならない。

紫式部は藤原冬嗣の六男良門を祖とする名門の出である。父は爲時といひ、母は同族の攝津守爲信の女堅子である。その家系を尋ねると、曾祖父中納言從三位兼輔迄は上卿の列に連らなり、上部の家柄であるが、父爲時になつて地方官となつた。兼輔は堤中納言と呼ばれた延喜の頃有數な歌人である。紀貫之とも交り厚く、家集一卷を殘して居り、又小說も書いたと傳へら

る。その子孫に源氏の作者を出したといふのは甚だ興味がある。(現在の堤中納言物語は後人の作である)その文藝的の血は流れて、その子雅正、清正、孫爲賴、爲時、共に歌人として令名がある。特に紫式部にとつて父である爲時は文章生の出身で、時の碩學菅原文時に學んで更に詩文の名が高かつた。その詩は本朝麗藻集に載つてゐる。官は低く、越後守となつたに止まるが、その文名は大江匡衡をして當代文人六名の中に數へしめてゐる位である。

このやうな血統を持てる式部には尙文筆の立つ兄弟があつた。惟規、惟通、定暹の三人の兄弟と早く嫁いで歿した姉とがあつた。惟規、惟通は宮仕へしたが、定暹は出家して僧となつた。惟規も式部丞に任官し、歌詩文をよくした當代の風流才子であつた。このやうに彼女には文藝的な血統が脈々として流れてゐたのである。母の家系も亦冬嗣の一男長良を遠祖とする名門であつた。紫式部には、それ故何處か氣品を備へてゐるのを見るのもかゝる育ちに由來する所が多いのであらう。特にその藝術的素質を代々傳へられた深さを持つてゐたのである。

彼女は幼にして聰明だつた。兄惟規よりも傍に聞いてゐた式部の方がより速かに父の素讀を暗んじて、父をして「口惜しう、をのこにて持たらぬこそ幸なかりけれ」と歎ぜしめた。(紫式部日記)といふ位であつた。思ふに、年幼き頃より文人の家柄としての敎養もあつたであらう

し、實に彼女は和漢の學、音樂、香道、繪画に堪能であり、又佛画にも明かつたのである。佛典は弟の定遍より敎はつた所が多かつたのであらう。かくの如く彼女は惠まれた文藝的環境に育ち、自らには生まれながらの素質があつた。

かういふ育ちの中から更に〳〵困苦して、源氏物語のやうな立派な作が大成されたことは少しも不思議でない。

彼女は、父や兄が式部丞だつたので式部と呼ばれたのであらうが、はじめには藤式部と呼ばれ、源氏物語に理想的女性として紫の上を描いてから紫式部と呼ばれるやうになつたのであらうと云はれる。その他色々の說をなす者はある。

與謝野氏の紫式部新講によると、彼女は幼時、冷泉天皇の中宮に宮仕へしたのであらうと考へてゐる。この童女時代の宮中の見聞が、他日源氏物語を書く時、貴人の生活の描寫に役立つた所が尠くなかつたらうと思ふと述べてゐる。

彼女十九の時、父爲時は越前守に任ぜられ、父に伴はれてその年の秋任地に赴き、翌年迄逗留した。長德二年のことである。家集にはこの時の歌が載つてゐる。この一ケ年の滯在は餘り樂しくなかつたが、鄕愁に沈んでゐたらしく、多分晩秋の頃か、父に先立つて越前より都に歸

つてゐる。而して長德四年の夏頃から藤原宣孝との戀愛が初まつたやうである。けれど式部は左程の愛情がなかつたらしく、なるべく戀を避けやうとした歌が殘されてゐる。

宣孝は當時四十七歳にもなつて居り、父と同じ年輩である上に、數人の女とも關係し三人の子迄あるのだから、未だ若い身の式部が二の足を蹈むのは當然である。併し宣孝の積極性にほだされて、遂にその戀を容れるに至つたものと云はれる。秋頃迄はその關係もどつちつかずだつたらしいが、かくしてその翌年長保元年にはだん〳〵と接近し、秋には結婚生活にまで進んで了つた。時に彼女は二十二歳、宣孝四十八歳であつた。

宣孝は紫式部と同族で、冬嗣の孫良門の二男高藤の子孫に當る。尊卑分脈には妻妾四人子供六人とある。式部もその四人の中の一人であつた。つまり平安朝の一般風習の通り彼女も一種の妾であつたやうだ。然し式部は妻として平靜な生活を樂しんだやうである。十一月宣孝は勅使として宇佐へ行き、翌春三月に歸京してゐる。而して宣孝との間には一女が擧げられた。尊卑分脈に「賢子、母式部、成章卿室後一條院御乳母從三位號大貳三位」と書かれる女である。即ち後に大貳三位と呼ばれた賢子で越後の辨である。但しこの後一條院は、後冷泉院の御乳母の誤りである。この誤りなどから式部には大貳三位、辨內侍二女ありといふ誤說が生れるので

ある。

しかしこの宣孝式部二人の間は忽ちにして悲しい時が來てしまつた。それは僅か二年有餘の生活にして宣孝の死に遭はねばならなかつたことで、實に長保三年四月廿五日であつた。彼女の結婚生活は餘りにも果敢なく、餘りにも短かつた。彼女の夫への愛は結婚の後の愛撫によつて自覺されて來たものであつたらしく、夫の亡き後の淋しさは更に深く悲しいものであつたやうである。大體式部は内氣であり且つもの靜かな、敏感な感受を持つてゐた人であつたので、或時は出家しようと果敢なんだり、又幼兒への愛情に縛られたりした。亡き夫への追慕と、生きることの惱みから、彼女は源氏物語を創作しようと思ひ立つたものであらうか。以後五六年の寡居中に源氏の一部は書かれてゐたらう。彼女が道長の推薦で一條天皇の中宮彰子に宮仕へするやうになつた寛弘五年頃には少くとも源氏のうちの或るものは世に流布してゐたと考へられる。當時後宮の繁榮は一門の繁榮とばかり、その侍女にはあらゆる才女を集めてゐた。時に皇后定子の方には枕草子の作者清少納言が女房としてあり、彰子の方でもそれに匹敵する者を必要として紫式部を採用したのであらうと考へると、彼女は當時才女の譽が高かつたことであらう。從つて源氏の一部分はその時已に流布してゐたことのよき示證と思はれる。

中宮彰子に仕へたのは彼女三十歳、寛弘四年十二月二十九日と推定される。彼女は自已の性質上、宮仕へは望んでゐなかつたが、一旦宮仕へに上つてからは、一條天皇、中宮彰子、道長夫妻に愛せられた。而して文人としての名聲は一層高くなり、一時は日本紀の御局と呼ばれたといふ位であつた。同輩から尊敬されたことは勿論であるが、同時にその嫉視敵愾心は彼女に住み憂き世界と觀ぜしむるに充分であつた。この宮中に於ける生活の狀態の一部分は紫式部日記によつて窺ふことが出來る。日記は寛弘五年七月頃より道長邸の模樣や、中宮御產の模樣が誓かれ、寛弘七年一月十五日後朱雀天皇の御五十日の祝儀迄書きつがれて終つてゐる。

彼女が宮仕へ中の逸話として有名なのは、後一條天皇の御五十日の祝儀が行はれた時、酒に醉つた公任が「あなかしこ、此わたりに若紫やさぶらふ」とからかつたといふ話と、道長が挑んだが彼女はうけなかつたといふ話とである。寛弘六年の夏、渡殿に泊まつた夜道長は彼女を訪れたのだが、「戸をたゝく人ありと聞けどおそろしさに音もせであかしたる」と書いてある。その翌朝、早く道長は歌を送つた。

よもすがらくひなよりけになくなくぞまぎの戸口にたゝきわびぬる

そこで彼女は、

たゞならじとばかりたゝく水鶏ゆゑあけてはいかにくやしからまし

と返歌した。この挿話は式部の貞淑の例にひかれて、彼女は褒められる材料となつてゐる。

當時の宮廷女人生活から見ると、或は貞節と思へることは確かだが、彼女が亡夫への義理立てに道長に從はなかつた貞操見るべしと云ふのは少し見當違ひであらう。貞操觀念は武家時代に封建制度を擁護維持する爲めに、家の觀念が固定化されて以來勃興した觀念で、それ迄はそんな自覺はなかつたのである。有るのは「貞節なるもの」であつた。だから貞操觀念で褒めるのは平安朝女性には當らないのである。思ふに彼女は只恐しく、つゝましやかだつたに止まるのではないかと思ふ。彼女の性格も見られて、何處となく床しい感が持たれる逸話である。ともかく當時は一般の風習を考へて矢張り一種の挿話であることは確かである。

寛弘八年は彼女にとつて大事件が續發した。二月には父爲時が越後守に任ぜられ、四月に赴任して淋しい折柄、六月には一條天皇が崩御せられた。而してその翌年即ち長和元年には中宮彰子が皇后宮に上らせられ、式部は引ついで宮仕へしてゐたが、この年の秋は昨年にも增して悲しい思ひをしなければならなかつた。それは兄惟規が父の任國越後に父を訪ねて行き、不幸にも越後で病歿するに至つたので、父爲時は未だ任期が滿たないのに官を辭して、遺骨を携へ

て都に歸つて來たのである。その上に尙も彼女を悲しましめることが續いた。それは宮廷生活を通じて彼女と最も親しかつた小少將の君が死んだ事である。これ等涙の乾く暇もない悲しさに沈んでか、長和三年の頃からは彼女は病氣勝ちになり、間もなく彼女は享年三十九歳の短い生涯を終へる時が來た。長和五年のことである。父爲時はこの年四月二十九日三井寺に出家してゐる。

以上が諸記錄等より推定された通說である。彼女は夫宣孝を亡つてより淸らかに、そして靜かな一生を終へたやうである。

そこで新らしく問題になるのは源氏物語が何時執筆されたかといふことである。源氏五十四帖、その中初めの四十四帖は正篇ともいふべく、光源氏とその周圍の女性との色々の事件を描いて居る。就中女主人公は紫の上といふのが理想的な女性として描出されてゐる。後の十帖は宇治十帖とも云ひ、源氏の子と云はれる薫大將が、光源氏の得戀物語にひきかへてこの續編は失戀物語である。かうした源氏物語成立に關しては色々の傳說が傳へられてゐる。無名草子によると大齋院選子內親王より何か徒然を慰むる物語はないかとのお尋ねがあつたので、上東門院が式部に相談をかけられた。式部は門院の命を蒙つて石山寺に參籠し、時に十五夜の明月湖

水にうつるを見て、ふと思ひ浮かべる想ひを基にして先づ須磨の卷に筆を染め、「今宵は十五夜なりけり」が全篇の冒頭だといふのが世に流布してゐる。河海抄には、西宮左大臣高時が安和二年太宰權帥に左遷され式部が悲歎にくれてゐるとき、大齋院選子內親王より御所望があつたので石山寺に參籠し、十五夜の明月を眺め、興起るまゝに佛前なる大般若の料紙を本尊に申しうけ、先づ須磨明石の兩卷から書いたといふ。まあ同じやうな俗傳が傳つてゐる。今でも石山寺に行くとこの俗傳を眞にうけて源氏の間があつたりする。石山寺は承曆二年正月炎上してゐるのだから、それだけでも源氏の間などを附托されるのは困る次第である。

この著作年代については、紫家七論では日記の記事を基にして推定するには、寛弘五年に公任が「若むらさきやさぶらう」とからかつた事、同六年には一條天皇が源氏物語を愛でられた記事があることによつて、長保の末寛弘の始め、式部が寡婦となつて里にゐた頃、徒然に作つたもの歟と云つてゐる。本居宣長も、藤岡氏も與謝野氏も大體こんな意見である。これで年齡を推すと三十歲頃となる。然しかかる大作が三四年の短日月に出來る筈がない。手塚氏は、御はかし、及び天皇御惱に關することの史實との照合によつて、恐らく源氏物語の澪標の卷以下は長和二年以後即ち寛弘元年を去ること十年以後に書かれたものであらう。少くとも長和二年

以前には源氏物語が完成されてゐなかつた事は明かであらうと云ひ、そして宇治十帖を後篇と見るのは誤りであるとし、源氏を三期に分けて、第一期は桐壺から須磨明石まで、これが寛弘の始め頃(長保の末より)、第二期は澪標から雲隱迄(寛弘の末から長和、寛仁の頃)、第三期匂宮より夢浮橋まで。(寛仁及びそれ以後　又作中人物のモデル說について書いてゐる。

光源氏　發端の部……村上帝
　明石まで……內大臣藤原伊周
　明石以後……御堂關白藤原道長

紫の上　作者自身の理想化

薄雲女院(藤壺)　一條帝の后定子(伊周の姉)

致仕の大臣(葵の兄)(初、頭の中將)　須磨明石まで……伊周の弟、藤原隆家

同じく以後……四條大納言公任の性格に公季の官位を着せるもの

朧月夜內侍　爲光の三の君または四の君

夕霧　賴通の性格に敎通の人事關係を附したもの

明石中宮　一條帝の中宮彰子
玉　鬘　道長の室高松殿

尙、螢兵部卿は花山院ではないかと思はれる。

而して、式部の描かうとしたところは、宮廷をとりまく攝關家藤氏一門の榮枯盛衰であるから、源氏物語は藤氏物語の假名であらうと云つてゐる。これも一の異說とすることが出來よう。また和辻氏は式部以前に已に源氏があり、式部も書きつぎ、又後人も更に後に書きつぎして源氏五十四帖は大成したらうと云つてゐる。說の當否はともかくとしてかくの如く寡居の四五年間で全部が出來たらうと云ふのは考へるのに困難であるために、このやうな種々の議論が出ることとなる。

それ故文脈の上から云ふならば藤裏葉と若菜とで上下に分けることが出來るから、恐らく前半は寡居時代に、後半はその宮仕中に追々と筆を加へて、ともかく五十四帖を完成したのであらうと云ふのが普通の說である。初めは短篇として書かれたものが、後に長篇としての一貫したものに纏めるやうになつたのであらう。それから桐壺は主人公の系譜地位の說明として後より發端に据ゑられたとは通說である。

源氏物語が小說として、文學として、如何に立派な作品であるかは呶々を要しない所であるが、その內容が男女の間柄を書いてあるが爲めに、嘗ては紫式部は好色本の著者であるとして酷く非難されたこともあつた。物語の內容を以つて作者を推した偏見であるは云ふ迄もない。然るに紫女七論に於いては、才德兼備の賢婦である、……からやまとにもたぐひ稀なるものと賞讃してゐる者もある。然し、彼女が淸少納言等を罵倒した文章が日記の中に見られる所よりすれば、彼女は圓滿と云ふよりは、何處か嫌味な性格を持つてゐたと思はれると說く者も出て來た。すると又これは日記に混入した彼女の娘に與へた手紙で、敎訓が書いてあるものである。だから嫌味とばかりでは片付けられない。このやうに透徹した觀察眼を以て自分にも子供にも修養の材料にしたのであるから、精神を汲むならば遙かに眞率なるものに遭遇するであらうと云ふ者も出てくる。

是に於いて紫式部を理想化しようとする考への一を見ると思ふ。池田氏は和泉式部に於ける戀愛の憧憬が、紫式部に於いて人間的なるものへの追求に深まつたのは當然のことで、そこに浪漫的精神の正當なる發展のあとが眺められるとし、物語日記を貫くものは魂の深みにある美しい幻影を描かしめる所の「心ばへ」であるとするのである。この說は嘗て本居宣長が玉の小

樹に於いて、勸善懲惡物語、或は天台の宗義を述べる爲めとか云ふがもとより信ずるに至らない。物のあはれを知らせるために作つたのだといふ說と同一軌道にある說である。この考へに誤りはない。

然し、物のあはれといひ、心ばへといひ、畢竟大文學にはその眞價として必らず具へてゐなければならないものであつて、源氏の特徵でばかりあるのではない。それは文學であることの意義であると云へる。それ故これを以て源氏を說明し得たりとするのは、恰もモデルが考へられるやうに、當時の宮廷を寫したが故に寫實小說だといふ粗末な議論とよい相棒である。藝術上の主義といふのは描寫の態度を云ふのであつて、素材の如何で定めることは出來ないのである。その點源氏は勿論浪漫的にして象徵的なものである。

私は餘分な文學論にまで深入りしたやうである。が顧みれば、そのやうに迄源氏物語は我々を搖り動かしめ、あらゆる考察を深からしめる存在である。

和泉式部

凡そ男女を通じて、平安朝の歌人を擧げれば、前に在原業平、後に西行法師、中頃に和泉式部あり、之を平安朝歌壇の三聖とすとは藤岡氏が國文學全史に說く所であつて、寬弘頃に於ける第一人者は何といつても式部であらねばならぬと推賞してゐる。實に彼女は日本文學史上最も優れたる歌人の一である。

和泉式部はかくの如く稀に見る情熱歌人であつて、かなり大部の正續の家集を殘し、この外には帥宮敦道親王との戀愛事情を述べた和泉式部日記（和泉式部物語とも稱せられるもの）を殘してゐる。

式部の傳記は明らかでない、中古歌仙傳を見ると、

和泉式部越前守大江雅致女、或說權中納言懷平卿女云々、母越中守平保衡女、太皇太后宮昌子御乳母號三介內侍、和泉守橘道貞妻、仍號和泉式部、童名御許丸、上東門院女房。

とあり、また扶桑拾葉集には、

資高――女爲和泉守橘道貞妻、因稱和泉式部、上東門院女房、實越前守大江雅致女、資高養爲子、再醮藤保昌、母越中守平保衡女

とある。また尊卑分脈には、懐平の女となつて、資高の妹となつてゐる。併し雅致の女といふのが正しいらしく、その出生は判然としないが、安和前後かと推測される。而して恐らく京都に生れたことと思ふが、式部が誕生の傳説は各地にある。即ち因幡、肥前、丹後、駿河、信濃、陸中、和泉の堺など實に夥しい數に上つてゐる。兎も角彼女の童女時代は母の仕へてゐた昌子の宮に過したらしく、式部といふ女房名は父が式部丞あたりであつた爲めではないかと思はれる。

和泉式部は實に容色艶麗、資性多感な女性であつた。それ故その生涯を奔放な戀愛に終始したやうである。

初め彼女は橘道貞の妻となつたが、その最初の關係は不明である。けれど彼女は道貞の妻となりしが爲めに和泉式部と呼ばれるやうになつた。道貞の和泉守時代は長保元年から同五年に至る間であつたらうが、この道貞は道長に愛されて陸奥守になつた程の有爲な人物であつたが、

式部が放縱の限りを盡すには閉口したらしく、その間に萬壽二年十一月小式部を生んだ時なども『誰の子かしら』と周圍の人々から疑はれた程であつた。

式部は夫と共にその任地に下ることもあつたが、京都に殘つてゐたことが多いらしい。こんなことから彼等の間には面白からぬ感情も生じて離別したらしい。而してその主なる原因が式部の多情によることは想像するに難くはあるまい。

彼女が彈正宮に接近して行つたことも、恐らく、まだ道貞と別れぬ前であつたらしい。この彈正尹爲尊親王は冷泉院第三皇子で、貞元二年の誕生である。親王と式部の戀は長保二年に成立し、道貞が怒つて式部と斷ち、式部は兩親姉妹と離れて住んだと、家集の詞書を以て證するものもあるが、よくは分らぬ。何れにしても、宮は長保四年六月二十六歳で薨去せられてゐるから、その時まで戀愛生活は相當のものであつたらうと思ふが、式部が彈正宮を悼んだと見られる歌が家集に無いのはどうしたものか。

爲尊親王の薨後彼女は暫く獨居してゐたが、その頃既に彼女の情事は絶えなかつた。日記の本文に、清少將雅通、兵部卿等が通ふといふ噂があつたと書かれてゐるのみならず、宮の薨後まだ一年も經たぬ長保五年四月には、宮の同母弟太宰帥宮敦道親王と戀を語つてゐる。時に宮

は二十三歳、この情事を書いたものが即ち和泉式部日記である。

日記を見ると最初宮から誘はれた時のことを左のやうに記してゐる。

かくしば〳〵のたまはするに、御返しもときぐ〳〵きこゆ、又つれぐ〳〵も少しなぐさむ心ちしてあるほどに、又御文あり、ことばなどこまやかにて、

語らはば慰む方もありやせむいふがひなくは思はざらなむ

あはれなる御物語も聞えばや、忍びてくれにはいかゞとのたまはせたれば、

慰むときけば語らまほしけれどみの憂事にいふがひぞなき

おいたる足にては、かひなくやときこえつくれば（下略）

この文から考へると、彼女は宮よりも年長であつたらしく、また「正月一日に院のはいらいに、をのこばら數をつくしてまゐり給へるに、宮もおはしますを見れば、いと若ううつくしげにて、多くの人にすぐれ給へり、これにつけても、我身はづかしく覺ゆるに、うへの御前にも女房だち出でゐて物見るに、まづそれをば見で、此の人を見む〳〵とあなをあけてみさわぐいとさまあやしや」など書いてゐるのを見れば、宮は年も若く（その時二十四歳）美しかつたのに比べ、彼女は大分年上であつたことと思はれる。かくして彼女は身分の賤しい女で、且つ淫

奔な女といふ非難の高いにも拘はらず、終に宮との間に烈しい戀を語り、爲めに家庭に風波を起した程であつた。

尤もこの戀愛は、道貞の妻たりし頃より始まつてゐたといふことは樣々の事柄で想像されるが、兎も角も熱烈なものであつたらしく、彼女の最も心を打ち込んだ戀心であつたらしく、寛弘四年十月宮の薨後は涙の日を送り迎へて、或る時は尼にならうとさへした。而して一年の喪に服したのであつた。かほどの悲みの中にも拘はらず、彼女は男と同車したといふ噂が立つた位だから、驚かざるを得ない。

こんな戀愛生活の終つた後、寛弘六年頃から道長に招かれて、中宮彰子に仕へるやうになつたのである。而してこの宮仕へ中に、藤原保昌と結婚した。彼は道長の家司の一人であり、文章博士藤原菅根の曾孫で、父は致忠、母は醍醐天皇の皇子源允明の女である。

この保昌ほ當時賴光と共に武勇の譽が高かつたが、寛弘七年五十三歳で歿してゐるから、結婚したのは極めて晩年で、式部にとつては物足りなかつたことと思ふ。

けれど式部は兎にも角にも夫に從つて丹後に下向したこともあり、その留守中に宣賴が小式部にからかつて「大江山生野の道の遠ければ」の歌を返へされたといふ逸話が殘つてゐる。

赤染衛門

平安朝女流歌人は和泉式部を第一人とするが、彼女に比肩するは赤染衛門である。彼女は藤原道長の室倫子に仕へ、倫子七十の賀が長元六年十一月二十八日に賀陽院で行はれた時屏風歌を徵せられてゐるし、又長元八年五月の賀陽院水閣三十講歌合にも出席して頗る名譽を博してゐる。袋草紙によると、

江記云、良暹云、式部赤染共以歌仙也、但赤染鷹司殿御屏風十二首中十首は秀歌、又賀陽院歌合時多秀歌、如屏風は式部不可及彼人、云々

と、その屏風の歌の如きは式部も及ばないと賞讃されてゐる。（然しこの兩度の歌には、式部はその員に入つてゐない。或は式部は已に死んだ後であるかとも思はれる）清輔はこの良暹の說に反對してはゐるが、ともかく彼女は式部と共に二大女流歌仙と云はれた程、歌人としての名聲が高かつた人である。それ故何かと云へば式部赤染は相對して批評の對象にされた。定頼

は父の公任に式部衛門何れが優れると尋ねた時、公任も答へに窮して一口では到底論じられないと云つたが、尙式部の方を認めた。又鴨長明はその著無名抄で、作品では式部が優るが、人物としては衛門が優ると比較してゐる。和泉式部は放從不羈の情熱家で戀愛に身心を爛らした生涯を送つた。又一種の女人であつた。衛門は之に反して貞淑溫良よく慈母としての愛を以て妹や子供に對し、その身持は式部の多情に比して格段のたしなみが深かつた。比較的な話ではあるが、かゝる身持の點で褒められたなどは、平安朝期としては正に異例に屬するとすべきであらう。

彼女の歌は家集赤染衛門集として傳へられてゐる。群書類從に載する家集には集末に、

關白殿に、集ども集みさせたもふとて、こゝにもあらむ書きて參らせよと仰せられたれば、みな忘れにけるを、たゞおぼゆる限りかきいでゝまゐらするおくに

これならで思ふ事のみ數なきをかきあつめても君に見せばや

と誌されてゐる。即ち關白頼通が家集を集められたので、それに應じて記憶してゐる限り書き集めて上つたと云ふのだから、この家集は自撰歌集である。尙ほ圖書寮にも赤染衛門集が傳へられ、この類從本よりは組織的に書き集められてゐる、旁々その內容の點なぞよりして恐ら

くは彼女は類從本の系統のものを賴通に上り、後に組織的に精撰したのが圖書寮本かと思はれる。が、ともかくその家集はその生前に於ける自撰歌集であることは確實とされる。それ故我我は彼女の歌と共に、彼女の傳記をもこの家集から求めることが出來るとしていゝわけである。それ故歌と共に袋草紙その他に傳ふる所を引き合はせてその逸話を拾つて見ると、その生ひ立ちに關しては、袋草紙四に記されたる所によれば、赤染時用の女と云はれるが實は兼盛の子供である。彼女の母即ち兼盛の妻は離別して後間もなく衛門を生んだので、兼盛は尋ね引き取らうとしたが、母は惜んで與へなかつた。爭論の末公に訴へたので適々檢非違使時用が裁判したが、彼と母は夙に密通してゐたから彌兼盛の子ではないと稱し、何處までも時用の子であると云つた。兼盛はせめて對面だけでも許されたいと願つたといふことである。赤染衛門の生ひ立ちはこんな事情が伏在してゐた。兼盛は天德歌合に壬生忠見の「戀すてふわが名はまだきに立にけり人しれずこそおもひそめしか」の歌に對して「忍ぶれど色に出にけりわが戀はものやおもふと人の問ふまで」と歌つて勝つたと傳へられてゐる。この歌と赤染衛門母とどんな關係があるかはわからないが、その間に想像を逞ふして見ると、兼盛の參つてゐる姿が見えるやうな氣がする。

時用の家系、傳記等は不明であるが、續日本紀孝謙天皇の條に「正六位赤染造廣足、赤染高麻呂等二十四人賜常世連姓」とあるから赤染とはこの一系の中であらう。衛門とは時用が右衛門の志尉等であつた爲めとされる。

衛門の幼時は不明、長じて大江匡衡の妻となり、子供に擧周、江侍從がある。彼女は長命したらしく曾孫に匡房を知つてゐる。

匡衡は學者の系統で、名のある博士であつた。かゝる人の妻となつて衛門は幸福であつたらしいことは、子供の擧周が生まれてその乳母を求める時、後拾遺集に傳へる所では、

乳母せむとてまうで來りける女の、乳の細く侍りければよみ侍りける、

はかなくも思ひけるかな乳なくて博士の家のめのとせむとは　匡衡

勿論乳なくてとは智なくてと戯れたのである。赤染は返して

さもあらばあれやまと心し賢くばほそちにつけてあらすばかりぞ

と洒落を云つて應答してゐる所を見るべきである。女は悧發にしてよく內助の功があつたと傳へられる。その一例として寛弘元年に藤原公任が權中納言を辭さうとして上表文の草稿を匡衡に賴んだ時、赤染が夫によく助言をしたといふ話がある。話は次のやうである。公任は長

保三年權中納言に任じ、正三位に陞つたが、寛弘元年には齊信が公任を立ち超へて從二位に陞つたので面白くなく、表を上つて權中納言を辭さうとしたのである。天皇は驚かれて藏人經通を遣はして從二位に陞せしめられた。(續古事談) この時の上表文のことである。初め公任は當時の名文家紀齊名、大江以言に書かせたが、どうも不滿足に思はれたので改めて大江匡衡に依囑して來た。匡衡は齊名、以言でさへ落第する文案を自分が如何にして書けやうかと、すつかり當惑してゐると、妻の赤染衛門が考へて云ふには、公任は大體傍慢の人であるから、家系が立派なるにも關らず位が頗る下であることを書けば悅ぶだらうと助言した。そこで前者の草案を見ると何れもその點に觸れてゐないので、妻の言に從ひ公任の祖先から書き立てたところ、果してそれは公任の滿足したといふのである。(袋草紙、十訓抄) この逸話は彼女の明智と家庭愛が察せられて、衛門にとつては好もしい話である。しかしこの逸話のみに限らないやうだ。彼女は常によき逸話に圍繞されてゐる稀に見る好運な女性であつた。

衛門は道長の妻倫子に仕へた。大江匡衡に嫁した後であるか以前であるかは判明しない。上記の如く寛弘元年公任辭表の時には匡衡の妻となつてゐたことが知られるに止まつてゐる。尾上氏は紫式部日部に「丹波守の北のかたをば宮殿などのわたりには、まさひら衛門とぞいひけ

る」とあるより寛弘七年匡衡が丹波守になつた後に倫子に仕へたかと思ふが、匡衡はその後三年、長和元年には卒去して居り、衛門も幾何もなくて尼となつてゐるから、倫子に仕へたのは結婚前であり、結婚の後は匡衡が尾張權守に任ぜられたので共に尾張にも下り、又丹波守になつたので、寛弘七年には丹波へも共に下つたものと思はれる。そしてその間にも昔の緣故で倫子にも出入してゐたのであらう。そこで「丹波守の北の方」が匡衡衛門とも云はれたのであらうと說いてゐる。(尾上氏、歌と草假名) 尤もこの紫式部日記の文は實は衛門の子江侍從のことで、彼女は道長に仕へ、丹波守高階業遠の妻となつてゐるから、和泉式部と相對して批評されてゐるのは江侍從であると云はれるから、尾上氏の說も一應は疑問であるかも知れない。

和泉式部と衛門とは親しい間柄であつた。式部の父は大江雅致で、匡衡とは同族の大江氏であつたから、雅致、匡衡と親交があつたらしい。式部がその夫橘道貞と別れて爲尊親王及びその薨後親王の御弟君敦道親王と更に燃ゆるやうな自由戀愛を始めたので、衛門は戒めて歌を贈つた。

うつろはでしばし信田の森を見よかへりもぞする葛のうら風

すると、和泉式部は秋風は吹いても葛の葉はうらみ顏には見えまいと思ふと歌ひ返して平氣

だつた。道貞は和泉と別れて、寛弘元年三月下旬陸奥守となつて下つたが、その途上尾張權守として尾張にあつた匡衡を訪ねた。道貞は和泉に別れたことも、或は遠く道の奥に下る悲しさも語つたことであらう。衛門は贈物などして慰めてゐる。

和泉式部と衛門との間柄には尙深い因緣が重ねられた。衛門の子擧周は和泉の妹と戀をしてゐる。その二人の間柄も未だ程もないのに擧周は御嶽詣に京を發ち、更には親について尾張國に下つてゐるので、衛門は京に殘された女が不憫であると思つて、擧周をして歌を女に贈らせてゐる。實はその歌は赤染衛門の代作であつた。

出でゝこし道のまにまに花薄招くやとのみかへりみぞせし

その返しが贈られてきたが、これは女の姉の和泉式部の代作である。

とまるべき心ならねば花薄たゞゆく秋にまかせてぞみし

然しこの戀愛は實を結ばなかつた。彼女は擧周を離れてしまつたので、赤染が之を詰ると和泉は之に答へたりしてゐる。こういふことが度重つてか、二人の交りもだん〳〵疎くなつたかと思はれる。式部は道貞に別れて爲尊、敦道兩親王に寵せられたが、その御兄弟の薨去後、藤原保昌の妻となつた。情熱の波に乘つた起伏ある生涯を送つた式部に反し、衛門は匡衡と共に

平らかな安泰の生活を營んだ。この安らかさから淸少納言の晩年の不幸を痛ましげに眺めさせてゐる。淸女は親の元輔が昔住んだ家のほとりに住んでゐたが、大雪が降つて隔ての垣も仆れたのを見て衛門は、

あともなく雪ふる里は荒れにけりいづれ昔の垣根なるらむ

と歌つてゐる。衛門は誠に幸福であつたらしく思はれる。

夫匡衡は寛弘七年丹波守になつたが、任地に居ること三年にして長和元年任期中に病歿したことは前にも述べたが、それは匡衡六十一歳の時であつた。かくの如く家庭生活の幸福であつた彼女はこの死別の悲しさを次のやうな情愛溢るゝ歌で表してゐる。

丹波守なくなりて、七日の誦經にすとて裝束どもとりいでたるに睦月に着たりしかばねりかさねのしたかさねの鮮やかなりしに

かさねてし衣の色のくれなゐは涙にしめる袖となりけり

又初瀨に詣でたとき宿で枕に草を結んで出したが、嘗て夫と一緒に詣つた時にはこんな事はなかつたと思ひ起して、

ありしよの旅は旅ともあらざりきひとりつゆけき草枕かな

このやうに彼女はその悲しみを歌つた。以て衛門の人となり、家庭の情態を察することが出來るであらう。彼女は何處迄も家庭人であつた。よく夫を助けた妻であつた。夫の死後は擧周の出世が樂しみであつたらしく、女院に運動したりしてゐる。又法華經序品の意を詠み、維摩經の十喩を歌に譯したりしてゐる。彼女は夫の死後間もなく尼になつてゐたやうである。萬壽元年には大原少將入道時叙が薨じてゐる。彼女とはその年若い頃親交があつた人であつた。年老いて親しき者の死に遇つて悲しかつたのであらうか。

いとへどもあまり憂き身のながらへて人におくるゝ數も積りぬ

と淋しがつてゐる。衛門は幾歳位だつたらうか、はつきりわからないが、長和元年に卒した匡衡は六十一歳であつた。前にも述べた倫子七十賀は長和元年より二十二年目に當る。老女衛門と云はれてゐる故、恐らくは六七十の老齢であつたであらうか。彼女は長命であつたらしい。擧周の子成衡の生れて五十日目の祝に歌を作つてゐるばかりでなく、成衡の子匡房が長久二年に生まれた時にも彼女は歌を詠んでゐる。匡房は彼女の曾孫に當るのである。

雲の上にのぼらむまでも見てしかな鶴の毛衣年ふとならば

と匡房の產衣を縫つて贈る時の歌がある。長久二年は七十賀の時より約十年の後に當るので

ある。衛門には擧周の外に江侍從がある。彼女は永承五年の祐子內親王家歌合の作者と知られる。衛門には別に道綱が通つた娘（後拾遺集卷十二）又衛門より先に歿した娘（家集）があるが、若しこれが共に同じ江侍從とすれば、衛門は永承五年には存命してゐたといふことにならう。そうすると永承五年は夫匡衡死後三十九年目に當る。それ故匡衡六十一歳で卒した時彼女五十歳位としても九十歳位の長命者となる。ともかく長久二年曾孫匡房の生れた時には確かに存命してゐたことはその產衣を贈る歌の外にも、同年の弘徽殿女御十番歌合の作者であることによつて知られる。長久二年としても先の順で數へて見れば八十歳位に當るのだから、ともかく長命の人だつたとすることが出來る。しかも老いて益々盛んな人だつた爲めか、後世榮花物語の作者に擬せられてゐる。尤もこれに關しては種々の說がある。藤原爲業、又は赤染衛門が全部書いたといふ說には異論があつて、藤岡氏は爲業の在世年代を考證すると幼少或は出生前の執筆となるといひ、安藤爲章は衛門の在世年代の考證の結果、百二三十歳頃の執筆となるからいけないとされる。然し榮花物語には上下兩編に述作の態度等の差異がある所より別人の筆になるものであらうとの說よりすると、その上編は赤染衛門と云つても云ひ得るとも云はれてゐる。ともかく確證はないが傳稱に從つて、上編は赤染衛門ならんとされる。それ故これ迄同

物語が赤染作と傳へられることは僞であるとのみは云はれないのである。(大石氏、和田氏、正宗氏、三條西氏) 因みに下編は出羽辨 (後一條院の乳母) と云はれてゐる。

榮花物語は歴史として貴重なる資料である點に於いて、平安朝文學の中でも特殊な位置を持つてゐる。恐らくは六國史に續くものとして宇多天皇より筆を起し、藤原氏、特に道長の榮華の樣を中心記事として記錄したものであらう。記事概して正確、中には誤りがないでもないが只所謂史論としての批判を欠くのが瑕である。然し當時の文學を見渡すと、一方には源氏物語の小說體があり、枕草子の隨筆體のものがある。又一方日記としての物語、記錄體のものがあるが畢竟文學としての立場に終始すると云へる。只この榮花物語が少くとも歴史として取扱はれるといふのはその書かれたる題材の內容による幸運とはいへ、特殊の存在であることを示すと思ふ。かゝる意味に於いて筆者として擬せられる赤染衛門はまた頗る幸運な人と云はなければならない。彼女は歌人としての名譽を在世中に與へられた上に、死後は又歴史記錄者として記憶されたのである。榮花物語の著者は非常なる學殖深き人と思はれるだけに一層赤染が名譽といはねばならない。たゞ憾むらくは文章流暢にして優雅なれども迫力の弱いことは、到底平安朝期文學の花なる源氏物語や枕草子に遠く及ばないと云はねばなるまい。

●大體衛門は幸運な人と云ふべきであらう。歌に於いても和泉式部の名歌とは比較にならぬ歌人でありながら、その對抗する名聲を擔つてゐた。情緒的なる所乏しくて、只この實生活の樣を詠みこなした。そこには女性としての自覺はあつたが畢竟才ある女でしか無かつたやうだ。眞に人生を體驗するには才が餘り過ぎてゐたといふ評もあながちに過言ではない。

然し一方には夫匡衡の死を悼んだ悲しい歌のやうに、情愛深きものもあつて、彼女の爲人に一種の味を齎らしてゐることは見逃すことが出來ない。この愛情は發しては周圍の女性や世の中へのいたはりともなり、又子供の擧周や娘の江侍從の婿の業遠に對する母性愛となつて種々の逸話を殘さしめてゐるのである。擧周を和泉守にと女院に運動し、功奏した時の嬉れしさうな歌や、或は彼が殿上人となつて庭上に拜する姿を見て喜ぶ衛門の歌など、歌そのものはともかくとして、如何にも老いたる母の安心と誇りともいふべきものがあつてなつかしき母性である。特に擧周が和泉守に任じた時共に子供について任國に下つたが、任終つて京に歸へる時、擧周が不思議な病氣にかゝつた。人々は住吉神社の祟であらうといふので、彼女は三首の歌を添へて幣を住吉神社に捧げ、我命を以て代らんことを祈り、

かはらむといのる命は惜しからでさてもわかれむことぞ悲しき

と歌つたのである。その夜髯の白き翁がこの幣をとると夢みて、擧周の病は癒へたといふ。然し擧周は我が身が助かつても母が身代りとなつては親不孝の限りだと思ひ、元の如く我が命を失ひ給へと祈願したので、この親思ひのやさしき心に感じてか母子共に事なきを得たと傳へられる。(家集、後拾遺集、詞花集、今昔物語、古今著聞集)これなどは歌に添へられた話ではあるが、一面彼女の生活振りがかゝる逸話を產ましたのである。

又彼女はよく代作をしてやつてゐる。

やすらはで寢なましものを小夜ふけて傾くまでの月を見しかな

は彼女の妹の馬內侍の作として傳唱されてゐるが、これは赤染の代作である。中關白道隆が藏人の少將であつた頃、馬內侍の許に通つた時の代作である。馬內侍と道隆との戀物語は袋草紙に傳へられてゐる。馬內侍は餘程道隆に參つてゐたらしく、道隆に忘れられる身となつても尙戀ひ慕つてゐた。或宵南の簾を捲いて眺めてゐると直衣を着た人が這入つて來た。それは彼であつた。彼女の悅びは云ふ迄もなかつたが、然し不思議なことには去り行く曉にも、音づれてくる夕の宵にも車の音が聞えない。不審に思つて、針に絲をつけて直衣の袖に刺してみるとその翌朝絲は南庭の樹の上に留まつてゐた。樹靈が彼女の戀慕の心につけ込んで誑かしてゐた

のであつた。その後男は通つては來なくなつたが、彼女は間もなく懷姙してゐた。いよいよお產をする時がきたが、生まれ出たものは只胞衣のみで何もなかつたといふ。この傳說は三輪山傳說が附會されたものであるが、このやうな戀慕に狂ふ妹の爲に代作してやつたなど、やはり優しき心のあらはれであらう。

このやうに、夫や子供や同胞に對する思ひやりが、彼女をして家庭人としての女性を高く買はしめるのである。そして公任の辭表文の草案の時の鋭い觀察ぶりと內助振りは更に一層彼女をして妻としての龜鑑たらしめる名譽を持たしめ、貞淑溫良の良妻賢母と賞讃せしめられたのである。彼女としては或は當然の資格かとも思はれるが、しかし讃められ方が餘りにも完璧な爲めに、こゝにも又私は彼女の幸運を思ふ次第である。何故と云ふに、彼女とても平安朝の女性にあり勝ちな戀愛がないではなかつたからである。

衞門は匡衡の外に、匡衡の從弟に當る爲基とも關係があつたやうで、その贈答歌が四十何首とつゞいてゐる。(家集)爲基が三河守になつて下る時、衞門は扇を送つたりした。その辭爲基からは會ひたいと云つたが應じなかつた。さうかと思ふと爲基が病んだ時には藥王品を書寫して贈つたり、又その後彼が法師となつた時には若菜を送つたりしてゐる。其他右衞門督朝任と

も關係があつた。(後拾遺集) 更には娘の許に通つた道綱とも浮名が立つたり、(後拾遺集) 大原少將入道 (藤原時叙) とも歌の贈答があつたり、その他男から文や歌の贈られたものもかなり多かつた。

以上によつて考へてみると、貞淑そのものゝやうな彼女も亦相當戀愛生活をしたことが知られると思ふ。

彼女の歌はその家集赤染衛門集に集められてゐるが、勅撰集に入つた歌は拾遺集一、後拾遺集三十二、詞花集八、千載集六、新古今以下四十六、計九十三首。私撰集には玄々集六、後葉集五、續詞花集十二あり。歌を贈答した女性には清少納言、伊勢大輔、辨內侍等あり、僧には道命法師があつた。外に、彼女の作品としては尾張紀行一卷がある。

以上によつて朧氣ながらも赤染衛門の輪廓を描いたと思ふ。平安朝期の文學に名のある女性が、小町から和泉式部、清少納言、紫式部とその家庭生活が悲慘だつた中に獨り衛門がそれを完うしたといふことは、彼女の思慮と思ひやりと共に注目される所であらうと思ふ。特に榮花物語の作者に擬せられたことは、文學者の中にあつて歷史に關與した者として特殊の存在となつたことである故更に注目されていい點であらう。

菅原孝標女

菅原孝標女は更級日記の作者として知られる。從來この日記は專門家以外には餘り知られてはゐなかつた。七ケ所の錯簡のために專門家と雖も讀めなかつたのであるが、大正十三年八月に佐々木信綱博士及び玉井幸助氏が帝室御物の定家自筆の更級日記を調査した結果、錯簡は御本の綴ぢ誤りであることを發見して以來、正しき形になほされて、多くの研究が發表され、今やその更級日記と共に彼女の名も廣く世に知られるやうになつた。

更級日記は平安朝浪漫主義のその末期に於ける華である。美しき幻想、憧憬の夢、夢幻への思慕が綴られてゐる。平安朝文學史をこゝで說く必要はないが、更級日記が持つ位置の考察の爲に一瞥を與へるならば、己にこの評傳で述べられた道綱母より和泉式部、紫式部と見通す時この間自らなる浪漫精神の發展が見られる。即ち蜻蛉日記にあつては戀を求めつゝ愛に破れた女性の現實的な煩悶があつた。和泉式部にはこの悶へは戀の翼にのつて奔放な浪漫的精神が誕

生されてゐる。彼女は人生を戀愛の中に模索した。情緒的なる世界に這入つて行つた。しかし彼女はこの世の中より切り離れてはゐるものゝ、深き人間への解剖がなかつた。この點紫式部はいみじくも人間愛の把握をその心ばへの徹底によつて成就せしめようとしてゐる。この物語の世界に調和ある美、こゝに浪漫的精神の健全な發展が見られる。

然し浪漫的なるものは畢竟止むるところを知らないあこがれであり、あこがれの世界が物語の中にあつたといふ。然し今は自分が小說の主人公として、あだなる涙も切實に流れる身の上と觀じてこそ、この憧憬も生き生きとする。紫式部によつて美的なるものと把へられたものが今やこの更級日記に於いては夢の現實として眺められてゐる。現實を掩ひつくす夢、それが實は現實であるといふ主觀性への歸依が更級日記の本質である。この點我々は平安朝的浪漫精神の爛熱をこの日記に認めることが出來よう。

つまり、生活の夢幻化が實に平安朝の文學の精神だつた。更級日記はそのきらびやかな花である。

右のやうに見てくると、更級日記が持つ地位の高さがわかると思ふ。又一面には平安朝文學の行く先きが生活そのものから離れていつた道程も明らかにされて、それ自らの發展の限界も

知られ、更級日記の後の讃岐典侍日記あたりから、やがて滅亡の道をたどるのも肯かれるであらう。

然らば更級日記はどのやうな特徵があるか。少し文學に偏する嫌ひはあるが、この際紹介することにしよう。

彼女は幼い頃より物語を愛して、夢幻的憧憬的精神の萠芽を現はしてゐる。十歲の時父が上總介に任ぜられたので共に伴はれて任地に下つたが、上總にあつては、その幼い身を以つて等身の藥師像を作り、人の見ぬひまに額づいて、「京にとくのぼせ給ひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せ給へ」と念じたりしてゐる程の早熟さであつた。止まること四年、彼女は十三の暮に京に歸へりついてゐる。更級日記はこの旅行より筆を起してゐるのである。その路すがら、病める乳母を訪れては月かげのいと白う淸げにめづらしと思つたり、足柄山にさしかかつては月のない暗い夜に、影のやうに出てきて又影のやうに消えて行つた三人の髮の美しい遊女を見送つたりしてゐる。山の宿で夜中に音立てゝ屋根に落る柿に驚かされ、或は逢坂の關で半成の丈六の御佛を見ては「あはれに人ばなれて何處ともなくておはする佛かな」と口ずさんでゐる。これらの幼き乙女心にうつる夢のやうなあこがれの陰影もさることながら、彌々京

に歸つてより、伯母なる人より源氏物語五十餘卷を箱入りのまゝ、他の物語と共に贈られたときの日記の文こそ驚くに足るものがある。

はしるはしる、わづかに見つゝ、心もえず、心もとなく思ふ源氏を、一の卷よりして、人もまじらず、几帳のうちに、うちふして、ひきいでつゝ見る心ち、ささきの位も何にかはせむ。ひるはひぐらし、夜は目のさめたるかぎり、火を近くともして、これを見るより外のことなければ

といふのである。嬉しさに胸がわく〳〵して、本をとつてバラ〳〵と走り見をする。心もえずといふ。もうぼうとなつてしまのである。人とも話もせず、几帳のかげに隱れて源氏物語を第一卷からひき出して讀むその心持、王妃になつたよりも尙うれしいといふのである。だから、明るい中は日の暮れるまで、夜は夜で目の覺めてゐる限りと日夜を分たず讀み耽つたといふのである。このやうな感激である。そうして彼女は今や自分を物語の主人公になぞらへて空想を走らせるのであつた。「さかりにならば、かたちも限りなくよく、髮もいみじく長くなりなん。光の源氏の夕顏、宇治の大將の浮舟の女君のやうにこそあらめ」と乙女らしい思ひをかけたりする。そうしてその頃の彼女の自らの胸にゑがく理想といふのは、

物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年に一度びにても通はし奉りて、浮舟の女君のやうに、山里にかくしすゑられて、花、紅葉、月、雪を眺めて、いと心細げにて、めでたからむ御文などを、時々まち見などこそせめ。

といふのである。何といふ空想であらうか。彼女が秘かに胸にゑがく理想の女は夕顏のやうに薄幸な、浮舟のやうにもの淋みしき愛人である。そうして、光源氏のやうな麗はしき人に山里のやうな所に圍はれて、年に一度の逢瀨を樂しみ、時折の手紙を待つて暮らすといふ「いと心細げ」なる身の上であつた。何といふ感傷であらうか。一體平安朝時代は空を見れば月いと細うと云ひ、或は地の草には薄の葉の細々とした群れた線にその美的感傷をときめかした。この傳統的な感懷が更級日記の作者にも遺憾なく表はされてゐるのである。いと心細げなる所が彼女の美的感情なのである。華麗な王妃のやうな世界をではない。私はこゝに平安朝文學の特質を見ると思ふ。夢のやうに漾ふ女性的なるはかなさ、これであつた。それ故こゝで彼女達の人生觀がどうのこうのと徒らなる詮義立てはすまい。彼女たちが平安朝に於いて如何にも世の表面にあるが如く見えて、しかも男の世界に對して全く無力なる玩弄物でしかなかつたことを思ひ合はすれば、その無氣力で消極的なのも思ひ半ばに過るものであらうからだ。彼女たちは

この作者のやうに思ひを夢の中に走らせる外はなかつたのである。現實の生活に惱んで、夫の愛を獨占したいと願つた蜻蛉日記より見るならば、その人生觀の變化に驚くものが見られるが、これは勿論文學的感傷の洗練された表現があると共に、一方には社會的事情のいよいよ尖鋭化して、片よりつゝあることが窺はれて來るのである。

素よりかゝる特色の彌々深められたのは作者の浪漫的感傷の尖鋭化によるのである。これが即ち更級日記の持つ位置である。この夢を現實とする彼女の夢は、不圖彼女の手許に表はれた一匹の猫を行成の女の生れがはりだとする所に最もよく見られる。侍從大納言行成の女は父に似て手蹟の麗はしき佳人であつたが、作者が京に戻つたその翌年に死んだ。彼女はその書をお手本にもして敬愛してゐたので非常にその死を悼んだ。すると或時一匹の怪猫が現はれて彼女になついたが、一夜夢に猫が自分は行成の女の生れかはりだと告げた。それからは作者には夢も現實もその境を失つて、誰も居ない時猫の頭をかき撫でながら、侍從大納言の姫君でおはすか、と話しかけたりするのであつた。このやうに彼女はこの生活を夢と化し、夢を現實化してゐる。尤もこのやうな說話化は次の鎌倉時代にかけて幾多の迷信的說話が書かれてゐるから、凡そ一般的な迷信であつたらう。つまり時代的特色を持つてゐると云へよう。それだけに尙こ

の更級日記に書かれてゐる夢は時代的に注意される必要がある。即ち諸々の物語を持つ鎌倉時代への道が見られるのである。

右のやうに、彼女は、夢とも現實ともつかぬセンチメンタリストであつた。これが彼女が十五六歲の頃の若き日の姿であつた。そして又この更級日記を貫く精神であつた。

私は作者の傳記を書くにしては更級日記について筆を使ひ過ぎたと思ふ。然し飜つて日本文學全體から眺めると、平安朝文學の纖細さに對して肩を並べることの出來るものは、古くは萬葉集の偉大さと新しくは芭蕉等の幽遠さである。勿論日本に於ける最高峯の一つである。そればかりか、かゝる古き時代に於ける小說體として世界に冠たるものである。それ故平安朝期一群の女流作家は日本の女性の誇りとして記憶されるばかりでなく、又世界に記憶される人たちである。その意味に於いて、このやうな評傳に於いて割合多くの頁を作家たちに割くのも强がちに意味なしとは云へないであらう。源氏枕の名聲におされてこれまで餘り人に知られなかつたが、この更級日記はそれ自らに持つ意義のある所を以つて、私は紹介したかつたのである。

では、菅原孝標女とはどんな人であつたか。父孝標は菅原道眞の曾孫の資忠の長男で、位は上總介、常陸介等になつたが概して不遇な人であつたとされる人である。彼女の兄の定義は大

學頭、文章博士等になつた學問のある人、又彼女の母は藤原倫寧の女で、母の兄姉には長能、道綱の母がある。この人たちが優れた藝術家であつたことは道綱母の項に於いて詳述した通りである。特に彼女に物語などを貸してくれた伯母といふのはこの道綱母であらうか。この蜻蛉日記の作者を伯母に持つた彼女の文學的環境は實に惠まれたものといへよう。尙その上に、彼女の繼母は上總大輔とよばれた有名な歌人であつた。

彼女は右のやうな藝術的なる家族の中に生ひ立つた人である。彼女の文學的才能はかくして育てられたであらう。

彼女は寛弘五年の生れ、十歳まで京で育つたが、父が上總介に任ぜられたので、繼母、兄姉と共に父の任國に下つたり、十三歳、寛仁四年の秋の終に京へ向つて旅立ち、十二月二日に京に着き、一品修子內親王邸である三條の宮の西に住んだ。その翌年治安元年繼母は離緣して去つたが、四年間親しく暮らした彼女は別れを悲んで、梅の花にそへて歌を贈つてゐる。この年は疫病大に流行して乳母が死んだり、又侍從大納言行成の姫君も死んでゐる。伯母から源氏物語等が贈られた年で、几帳のかげで耽讀したといふことは前に書いた。治安二年五月には例の猫が出て來たことも前述の如く、治安三年には火事があつて家が燒失し、又姫君の身代りとし

て可愛がつてゐた猫も死んだ。

彼女廿五歳の時、長元五年父は常陸介となり七月任國に下つた。父は時に六十歳であつた。この時彼女は太秦に詣でゝ父の無事歸國を祈つてゐる。やがて任期滿ちて父は歸つたが、家庭は淋しく、そのため祐子內親王に出仕することゝなつた。長暦三年、彼女三十二歳の時である。また長久三年十月關白賴通の高倉殿で不斷經があり、その夜右大辨源資通と四季の品定めについて語り合つたり、その翌年八月には宮のお供で內裏に參つた際に資通に會つて歌を詠むだりしてゐるが、この若者に對して彼女は一種の床しさを感じた、これが彼女の知つた只一度のほのかな戀心であつたらしい。

寛德元年の頃橘俊通に嫁した。三十七歳の頃である。而してその翌年一子仲俊を生んだやうに思はれる。この頃は嘗ての乙女時代のやうな空想は去つて、現實の重壓を感じてゐたやうであるが、仲俊を生んでよりは女性に目醒める時が來て、やがてはかなき物語のあこがれが、今や佛を念ずる心になつて來た。

天喜五年、俊通は信濃守に任ぜられ、八月廿七日仲俊を伴つて任國に出發した。然るにその翌年四月には夫は任國より歸つて來て、九月廿五日發病し十月五日五十七歳で歿した。時に康

平元年彼女は五十一歳であつた。

かくして、彼女は佗びしい寡居の生活に入つた。身の越し方の思ひ出は盡きなかつたのであらう。かくて更級日記が書かれたのである。即ち日記は寛仁四年、上總よりの旅路にはじまつて、康平元年夫俊通の死去に筆を擱いてゐる。その後彼女はどのやうな晩年を送つたかは知ることが出來ない。

彼女の麗筆は更級日記によつて知られるが、尙その他に、濱松中納言物語、夜半の寢さめ、みづからくゆるあさくらの作者に擬せられてゐる。

濱松中納言物語は更級日記奥書及び拾遺百番歌合に記する所より、大體作者ならんと推定されてゐる。これは濱松中納言といふ人が唐土に渡つてその妃と通じて子を產んだといふ話からその後のいきさつが書かれてゐる。更級日記同樣に夢の話が多くて、それが宗教的で且つ現實世界に必らず關聯がある。竹取物語の童話的、源氏物語の戀愛的、この物語の宗教的とこゝにも矢張り平安朝浪漫主義の展開が見られ、文學史上矢張り重大な意味を持つ作品である。文學史的にはこの物語の後には、とりかへばや物語がつゞいて、無理な構想に末梢的な興味を求めるやうになつて平安朝文學は亡んだのである。

以上によつて菅原孝標女とはどんな人だつたか、又その功績のほどを知つたと思ふ。一言以つてその特色を約するならば、彼女は夢と現實の區別が出來なかつた程の幻想的な人であつたといふことに盡きよう。その點矢張り日本女性史上異色ある人であつた。

小督

京は嵯峨の奥、天龍寺の傍にさゝやかな一基の塚がある。小督の墓と傳へられる。風光明媚の嵐山に杖を曳いた人は、恐らくこの桂川に渡す渡月橋の北詰の小督の塚にお參りしたことであらうと思ふ。そして又峯の嵐か松風かといふ平家物語の名文を思ひ出して、この可憐な美人を心に弔つたことゝ思ふ。私も亦その一人であつた。晩秋の紅葉ももう散つた頃、この嵐山の山峽は急に底冷えがしてくる。冷え冷えと、そして忽ち日の暮れかゝる夕暮れ時、河原の水の音に耳をすませて詣でた曾遊の折が思ひ出される。その思ひ出の中から平家物語に傳へられる小督の話を書くとしよう。

小督は高倉院の寵妃であつた。高倉天皇は平安朝末期の、折惡しく清盛の全盛時代に當られて、彼の横暴によつて幸薄き短き御一生を歎かせられし主上である。天皇は風雅の御心深くましまし、嘗て御鍾愛の紅葉が一夜嵐に散つたのを園丁が焚火にした時、林間に紅葉を焚いて酒

を暖むと自樂天の詩を以つて、却つてこれを風雅なものに御覽ぜられようとせられたといふ逸話が殘されてゐる程であつた。

高倉天皇の中宮は清盛の女建禮門院であつた。所が主上はこの中宮の女房が召使つてゐた上童に御志を寄せられてゐた。そのため當時謠詠があつて、生男勿喜歡生女勿悲酸男是不封侯女爲妃、と云はれたから、この女も女御后とも國母仙院とも云はれる時があるだらうと噂し合つて、その名は葵の前と云ふのを内々では葵の女御など、囁やかれた。これを聞召された主上は世の謗を憚からせ給ひ、その後は葵の前を御召しにもならず、秘かに御惱み遊ばされた。時の關白松殿（基房）が御慰め申さんとて參内したが、主上は「位をすべつて後は、まゝさるためしもあるが正しく存位の時左樣の事は後代の謗なるべし」と仰せられて基房の言をお聽きにならなかつた。その後主上は、

忍ぶれど色に出にけり我戀は物や思ふと人の問ふまで

の古歌を冷泉少將隆房に賜はり、次いでそれを葵の前に賜はせられた。彼女は是を取りて懐にいれ、顏を赤らめ、常ならぬ心地がして來ましたとて里に歸つたが、臥すること五六日にしてこの世を去つた。

爲に主上戀慕の御涙に沈ませ給うたのである。これを御覽じて中宮は、その痛ましさを御慰め申さんとて、中宮の御方より小督殿と申す女房を奉つたといふ。

かくして小督は平家物語に登場したのである。

小督は櫻町中納言重教卿の娘で、當時禁中第一の美人、無雙の琴の名手として名高かつた。天皇はこの爲めに御心を慰めさせられ、やさしき中宮の御心づかひも誠に甲斐あることであつたが、主上の小督に寵を垂れ給ふことは更に更に深く、ために却つて建禮門院への御寵愛が衰へたと傳へられる結果となつて了つた。而して恰度それは清盛がその勢力にまかせて横暴限りなき時世であつたから小督の悲運は齎らされることになつたのである。

その上に、彼女の優しき心がも一つの悲運を作つてゐた。もともと小督は冷泉大納言隆房が未だ位低く、少將だつた頃に見初めた女房であつた。隆房は夢中になつて歌をよみ文を盡したが、更に靡く氣色もなかつた。けれど流石に彼女は情に弱き女であつたか、終には隆房に靡いたのであつた。然し今は主上に召されたことであれば、涙ながらに飽かぬ別れをしたといふわけであつた。しかし隆房は戀慕の情に堪へかねて、も一度會ひたいものと用もないのに參內しては小督の局のあたりを彼方此方と彳んだりするのであつた。小督は君へ召された上からは、

少將が何と申されようと言葉もかはしてはならぬと心に決し、振り向いても見れなかつた。少將は淋しかつたが若しやと思つて、

思ひ兼ね心は空に陸奥(みちのく)の千賀のしほかま近きかひなし

と詠じて局の御簾の中へ投げいれた。小督もあはれに思つて返事したかつたが、現在の身分を思つてか、手にも取らず、上童に取らせて坪の內へ棄てさせて了つた。それを見て少將は情けなく恨めしく思つた。しかし流石に人に見られてはと空怖しく思つたのであらう、急ぎ之を拾ひ懷中して立ち出たが、再び引きかへして來て、

玉章を今は手にだに取らじとやさこそ心に思ひ捨つとも

と嘆いた。而して、今は此世で會へないなら生きて人を戀ふよりは唯もう死にたいのであると死を願ふに至つた。この隆房はどういふ因緣か清盛の女婿であつたことは小督にとつて此際誠に運の惡いことであつた。清盛にしてみれば、建禮門院といひ隆房の妻といひ二人までも、その夫の愛を小督に奪はれたといふ事になつたのである。これでは清盛のおさまりやう筈がなかつた。これが天皇の御意であるなどゝは暴逆無道の彼には眼中になかつた。自分の娘を不憫に思ふにつけ、小督が憎かつた。「二人の婿を取られては世の中好まじ、如何にもして小督を召

出して失はん」といきまいた。小督は清盛が思ふことはどんなことでも仕遂げるといふ横暴な男であつたことを知つてゐるので、身の程も恐ろしかつたが、それよりも、君の御爲めに心苦しいと思つたのであらう。夜に紛れて、行方も知れず内裏より遁れてしまつた。

こゝに主上の御歎きが一方でなかつたことは云ふまでもない。晝も御寢殿に籠られ、夜は南殿に出て月影を仰いでは、わづかに胸の中を慰め給ふといふ御樣子であつた。傍若無人の清盛はこの由を聞いて、さては陛下には小督故に御沈ませ給ふなり。さういふわけならば、とて御介錯の女房たちも近づけしめないのである。又參内すれば清盛に猜まれると怖れて參上する臣下も自らないといふ有樣で、禁中うちしめつて忌々しふぞ見えし、と書いてある。

主上の御心のうちや察するに餘りある次第である。然し幸なことには小督は再び探し出されて宮中に召されることになつた。平家物語には、明月の夜琴の音をたよりに遂に小督が探し出されるといふ、風雅そのもののやうな物語が、一流の美くしい文章で書かれてゐる。

頃は八月十日餘の事である。隈なき明月の空を涙ながらに眺めさせ給ふ主上は、胸の思ひに堪へさせられぬのであつたらう、夜更けて人を呼べば、その夜宿直してゐた彈正大弼仲國が罷り出た。主上には「小督は嵯峨のあたり、片折戸とさした内にあると申す者がある。家主の名

は知られぬが、何と尋ねてみてくれぬか」との切ない仰せであつた。仲國も家の主の名が知れないでは尋ねる術もないとほとほと困じ果てたが、扨てつくづくと思ふに、小督は琴の名手であつた。此の明月に君を思ひ出でゝ琴を彈かぬといふことはよもやあるまい。幸ひなことに嘗て内裏で琴彈く折には仲國召されて笛の役を勤めたこともあれば、その琴の音色は何處にても聞知つてゐる。嵯峨の在家多しと云つても幾程かあらう。打廻つて尋ねたならばよもや聞き出さないことはあるまいと思案して、仰せを承つて小督さがしに出かけることになつた。

仲國寮の御馬賜つて、明月に鞭をあげ、西を指してぞ歩ませける。——このあたりから平語の文章は躍動してくる。小鹿なく此山里と詠じけむ、嵯峨のあたりの秋のころ、さこそ哀にも覺けめと情況を思はしめる。仲國はあちこちと片折戸した家を求めては此内にもやと控へ控へ聞いたが琴彈く所はなかつた。或はそれでは御堂の方にでもと釋迦堂を始め堂々見廻つたが、小督に似た女房の姿だにもなかつた。今は何としよう。仲國さがし惑ふて思ふに、このまゝ手を空うして御所に歸つては、出て來ないよりも却つて惡いことである。さればといつてこのまま身を遁れんとするも何地とても王地にあらざるは無い以上、身をかくす宿もなしと嘆き、如何したものかと案じ煩ふのであつた。が又ふと思ふに、法輪寺も程近いことであれば或はこゝ

に月の光に誘はれて來てゐられるかもしれぬと氣をとり直して、その方に向ひあくがれて行つた。すると耳の迷ひではない。龜山のあたり松の一叢ある方に、幽かに琴が聞えたのである。

「峯の嵐か松風か、尋ぬる人の琴の音か、覺來なくは思へども、駒を早めて行く程に、片折戸したる內に琴をぞ彈き澄まされたる、控へて是をきけば少しも紛ふべふもなく小督の爪音なり、樂は何ぞと聞ければ夫を想ふて戀ふと詠む想夫戀といふ樂なりけり。仲國さればこそ、君の御事思ひ出てゝ樂こそ多けれ、此樂を彈き給ふことのやさしさよと、腰より橫笛を拔き出し、ちつと鳴らして門をほとほとゝ敲けば……」と書いてある。矢張り小督であつたのだ。彼女は清盛が餘り怖ろしいことばかり申すのでそれを聞くのが淺ましさに、或夜ひそかに內裏を忍び出たが、かゝる所の栖居故琴彈く事もなかつた、しかるに明日よりは大原の奧へ世を遁れようと思ふので、今宵ばかりの名殘を惜んで宿の女房のすゝめるまゝに琴を彈いたのであつた。そうして易々と仲國に聞き出されてしまつたのであると小督は涙と共に述懷するのであつた。仲國はやうやうの思ひで小督をさがし當てゝ主上の御文を渡すことが出來たものゝ、聞けば明日よりは大原へといふが、定めし髮を下して尼にでもならうといふのであらう、そうしたらどうして主上に御會はせが出來ようかと打ち案じ、この女房を家より出してはならぬと供につれてき

た馬部黃仕丁共を留め置きてその家を守らせ、自分は馬を驅つて內裏に歸つた。もうその時は夜もほのぼのと明けてゐた。主上は然し尙も夜邊の御座に在ませられたのである。仲國急ぎ參上して、小督の返事を奉れば主上の御喜びの如何ばかりであつたかは云ふも愚かな次第であらう。一方ならぬ御叡感に與つて「然らば汝早速この宵つれて參れ」と仰せられた。仲國は入道に聞かれることを怖れたが是又勅命なれば、人に車を借つて嵯峨に向つた。小督は清盛を怖れて氣も進まなかつたのを、色々と云ひつくろつて車にのせ、內裏に迎へ戻したのである。

主上の御喜びは云ふばかりない。その後は清盛に悟られぬやうに、人の目立たぬ所に忍ばせて、厚く寵を垂れさせられた。間もなく小督は姫宮を產むに至つた。これが坊門女院範子である。

所が、果然清盛の知る所となつてその憤激を買つた、「小督失せたりといふは跡形もなき虛言なり」と怒つて、謀り出して小督を捕へて尼にし追放した。是時彼女は二十三歲。出家はもとより望なりけれども、心ならず尼になされ、濃黑染に窶れ果て嵯峨の奧にぞ栖まれける。無下にうたてき事どもなりと平家物語は結んでゐる。

高倉天皇はかやうな御惱みより御病氣にならせ給ひて遂に崩御せらるゝに至つた。御寶壽わ

づかに二十一歳であらせられるといふいたましさであつた。

以上が平家物語に傳ふる小督の哀話である。しかし思ひ返へせばその美文の故に思はず讀み終らせられるといふ種類のもので、扨て何處までが史實であるかといふことは疑問かもしれない。特に月光に誘はれて彈く琴の音を便りに人を訪ねるといふ趣向や、いよいよ探がし求めた時に居た居たと叫ぶよりも、先づやをら腰なる横笛を取り出して、ちつと吹きならして訪ふあたり、正しく平安朝的風流の美文化であることが知られる。だからこの點、風流の角度よりつづられた小督の局であることは勿論云ふまでもないことであらう。扨て然らばこの美文の裝ひをとつて裸形にされた小督といふ女性はどんな人であつたかといへば、清盛の横暴さはさることながら、情にほだされては隆房に通じ、天皇に召されては隆房を捨て、清盛に睨まれては天皇よりも離れて野に隱れ、仲國に見出されては又宮中に歸り、遂に清盛に捕へられて尼さんにされたといふ女性である。これでは自己の主張といふものが全然見出されない。强力なるものに引摺られてゐる。氣力なく男の玩弄に委かせてゐた平安朝時代の女流の矢張りその一人であることを最もよく表してゐる。源義朝の妻であつた常盤御前が敵の清盛の妾となり。更に一條大藏卿の妻となつてゐるのを見ても分る通り、これが當時普通の女房氣質だつたのである。そ

れ故長門本平家物語には、清盛、小督を引出して見ると想像以上の美人だつたので、耳語しておのれの意に從へと迫つたが小督が聞かなかつたので耳と鼻を切つて尼にしたとあるが、これは嘘だらう。若しそれが事實ならば恰度常盤御前のやうに清盛に靡いたであらうと異說日本史が評論してゐるが、成程一應首肯出來る所である。然し常盤御前の時は夫と雖も矢張り臣下の一人だつたから、小督とは場合が異なる。一天萬乘の至尊で渡らせられるのである。それ故如何に平安朝時代型の女性なりと雖小督は矢張り日本國民の一人として、清盛のいふことを聞かなかつた位の氣位はあつてもよい筈である。その上にこの小督の哀話に見られる主上への種々なる心使ひは、たとへ平家物語が書かれた鎌倉時代に於ける京都方の人々の意嚮の反映であつたとばかり云ひ切れるかどうか。私は主上の尊嚴性が必らずや維持されてゐたと思ひたいのである。平家物語の文章はその點主上を如何にも品格高く描寫してゐるのは嬉しい限りである。然しながら、轉々として無自我的なる彼女の性生活振りは掩へない事實である。この點に關しては小督は紛れなく當時の女房氣質の外のものではない。否寧ろこういへる。平安朝女房とはどんな型かと問はれた時、小督のやうな型であると答へられるやうな人であつたといへよう。しかもその間にかゞやいて男の心を打つ所の、あのしなしなとしたやさしさは矢張り一種の女

性美であることは嬉しさを感ずるのである。

一體平家物語は平家の盛衰を書いたものではあるが、當時の時世として佛教的結論に導かれてゐる。それ故この物語に語られる多くの女性の哀話は、祇王祇女や佛御前、二代后、維盛の北の方、小宰相、內裏の女房、千手前、横笛等夫々に佛教的結論に色取られ過ぎてゐる。實在の女としてよりは一歩說話的な女であることは云ふまでもないが、それ故にこそ平家物語作者がこゝに求めてゐた平安朝女性の美が理想化されてゐることを知らねばならない。實在の女がもつと現實的で功利的であつたといふことを知るのは勿論大事なことであると同時に、女のしほらしさにその女性美を特徵付けることを知るのも甚だ有益である。それ故日本の女性の中に小督のやうな或は横笛のやうな女性があつたといふことを知ることは必要である。

筆を擱くに當つて彼女たちに、貞操觀念の批判を加へることの無意味なことを書き加へて置かう。貞操といふ家庭道德は、封建社會が成立して後一家の存續といふ目的から組織された規律であつて、これにはその奥に社會的經濟的事情を考慮しなければいけない。それ故平安朝朔の貴族社會に於ける玩弄物であつた彼女たちには貞操といふ負目はなかつたのである。あるのは更に意味を異にした節操觀念であることを銘記してゐなければならない。轉々とした無自我

的性生活は彼女たちには寧ろあたり前だつたと思ふべきである。この點の解明は女性史に於ける一課題である。女性自覺史にあつては彼女たちは無自覺的の時代であり、やがて封建制度の時代には家族の一員としての自覺を產み、現代のやうな自由主義的經濟社會になつては人間としての自覺に於いて解放されんことを希望してゐるのである。この時代的烏瞰の下に平安朝の彼女たちを眺めなければいけない。彼女たちが迷惑だと思はない批判の尺度を用ひなければならない。

祇王・祇女・佛

平家物語第一卷を飜くと祇王の事が書かれてゐる。入道相國平清盛、世に勢を得るや何事も能はざるなき權勢に嬌慢して、横暴の限りを盡した。この祇王の物語も、彼の爲に蹂躙された年若い白拍子の哀れな物語である。一體清盛の我儘勝手な振舞は、殆んど人情を知らぬ者の如く尋常一様の心の者には思も及ばぬ非道極まるものであつた。彼は何事も平氣で、しかも强引にやつてのけてゐる。こゝに彼清盛の押し强い我意の一面と共に、人を人とも思はぬ人間性を飲いた性格が見られる。その點誠に興味ある性格ではあるが、それに捲き込まれた人の迷惑は云ふ可からざるものがある。平家物語の筆者が清盛のやり口を見て、不思議とより他に何ともいへなかつたのも首肯出來る。不思議なとは思ひも及ばぬといふ意味である。だからこの祇王物語も、うら若い女性が清盛の非人間性の犧牲となつて、かよわい神經をくしや〳〵に蹂躙され遂に佛門に歸依していつた、世にも憐れな物語と云へよう。

私達は先づ平家物語を讀まう。

其頃京中に名の聞えた白拍子の上手で、祇王、祇女といふ姉妹があつた。白拍子閉の娘である。一體白拍子といふのは平安朝期に現れた「うかれめ」の後身で、いはゞ酒間を斡旋する藝妓の如きものと思へばいい。平家物語には、鳥羽院の御宇に島の千載、和歌の前、かれら二人が舞出したもので、始めは水干に立烏帽子、白鞘卷を佩いて舞つたので男舞といはれたが、中頃より烏帽子刀を除かれ、水干ばかり用ひたので、白拍子と名付けられるやうになつたと書いてある。つまり專門的職業婦人である。だから勿論社會的地位はあまりいいものではない。

清盛はいたくその姉なる祇王を寵愛した。その結果妹の祇女も厚くもてなし、母閉にもよき家を造つて與へ、毎月米百石錢百貫を仕送つたといふ。一家の樂しいこと一通でなく、春のやうな麗日だつた。そのために又京中の白拍子が羨望と嫉視の的ともなつた。中にはその芽出たさにあやからうとて、ともかくも祇の字を名前に付けて、かうしたら芽出たき事もあらうかと或は祇一祇二、或は祇福祇德など呼ばれるといふ程の榮華であつた。こゝに三歳、はからずも加賀の國より佛といふ美人が京に上つてきた。彼女は生れて十六歳の白拍子、その雙びなき麗質は忽ちにして都第一の名聲を獲ち得た。所が未だ入道殿から聲がかゝらない。何しろ白拍子

で水商賣のことである。時の權勢に呼ばれぬ以上は威張り甲斐のない身の上である。そこで佛思ふには、生れて白拍子たり、入道殿に召されぬからは誠に本意なきことである。是非見參にいりたきものである。强いて見參に上るとも、我等白拍子のことであるから別段深い咎めもあるまいと考へて、扨て西八條の清盛の邸に自ら推參に及んだものである。佛はそれが失禮なことは知つてゐたが、これ以外に仕方がないと思つてゐた。所が果して入道は怒つた。大體白拍子の如きは呼ばれて來るべきに、自ら推參とは何事であるかといひ、それに我には祇王がある。祇王があらん間は、神にもあれ佛にもあれ叶ふまじきぞと大變な權幕で追ひ返してしまつた。これでも分るやうに、清盛は祇王を溺愛してゐた。だから祇王も感激してゐたでもあらうが、この際彼の女は、一圖に思ひ込んで推參した佛の心根を不憫に思はずにはゐられなかつた。せめて對面なりともさせて頂くならば誠に難有きお情にこそと言上した。源平盛衰記によると祇王が邪魔立てしたと思はれることを恐れて清盛にとりなしたとある。一面かゝる虛榮もあつたであらう。然し遊女である白拍子の身にとつて佛の心の中を察して同情したのであると思はれる。又祇王とても自らは十分に自信を持つてゐた。だから情を以てこのとりなしをしたのであらう。佛に寵を奪はれるかもしれないなどゝは思ひもよらなかつたことでなければならない。

清盛も、亦祇王がとりなしに、それではとばかり使を立てゝ佛を呼び戻さしめた。

かくして佛は思ひもかけず清盛に見參が叶つた。實際運命は皮肉であつた。佛は入道より求められて今樣を歌つた。

君を始めて見る時は　千代も經ぬべし姫小松　御前の池なる龜岡に　鶴こそむれて遊ぶめれ

と三度繰り返した。入道感心して更に舞を所望すれば、佛立つて「心も及ばず舞すます」とある。何とも形容のし盡されぬ程舞がよかつたと見える。入道恍惚としてその舞に氣を奪はれてしまひ、そこで忽ちにして佛に心を移して了つた。

然し佛には人間の心があつた。佛が見參の叶つたのも祇王が心意氣から出たとりなしに依ることを思へば、どうして清盛の請ひが受けられよう。暇賜はりたいと願ふのであつたが、無法の入道の心は却つて募り、祇王に義理立てのためのことならば、祇王をこそ追ひ出したらよからうと云ふ。

かくして祇王には思ひも設けぬ結果となつて、家に下げられることになつた。祇王は泣いた。彼の女の顏は丸潰れだ。しかし祇王とて、いつかは捨て去らるべき白拍子の己が身の上を知つ

てゐた。今やその時が來たのであると思ひ諦めて入道の邸を出たのであるが、去つた後の紀念にもと障子に歌をかきつけた。

萠え出づるも枯るゝも同じ野邊の草いづれか秋にあはではつべき

祇王西八條殿を去ると聞いた京の者は上下の別なく、或は文を寄せたり人を遣はしたりして、會ひたいといふもの忽ちにして集まつてきたといふ有樣であつたが、誇を傷つけられた祇王は深く身を悲んで、今更人に會ふべきではないといつて、堅く門を閉ぢ、何人の招きにも應ぜず、只管に傷いた神經をいたはつてゐた。

冬も過ぎ、明けて又年の春が來た。彼女への運命は更に苛酷となつて、入道殿より使の者が見えた。それは佛が徒然で困つてゐるから參つて慰めよといふのである。何といふことであらうか。祇王は佛のために涙の乾かぬ身の上となつたのではないか、人もあらうに、その人の爲めに、しかもその退屈凌ぎに出て來いといはれる。何とて祇王この召しに應ずる心持になり得やうか、とかくの返事のなかりしも無理からぬ次第である。然し母閉は矢張り世間的に弱かつた。清盛の不興を買つた時のことを考へ、彼の我儘者の清盛が何をしでかすであらうか、若い身の者はともかくも自分のやうに年老いし者はどうなるだらうと、その心配でいろいろに言ひ

なした、心やさしき祇王は母に憂目を見せまいと、いやいやながらも、妹祇女及白拍子二人總勢四人同じ車に乘つて清盛邸に向つたのである。

祇王の心中察すべきであるが、行つて見ると事情は更に酷薄だつた。彼女は背て自分の居た頃の奥の座敷には通されず、下々の座敷で待たされるといふ冷たい待遇に先づ會ふのであつた。佛もそれを見て氣の毒さに胸を打たれたが、入道相國は何等意に介する所なく、祇王に向つて一さし舞つて佛を慰めよと命ずるのであつた。何といふ侮辱であらうか。祇王は話相手となる位のことは豫て覺悟はしてゐたであらうが、舞を舞つて見せねばならぬとは思つてゐなかつたであらう。然し入道相國平清盛が命令だ。致し方はない。今は泣く泣く佛の前に舞ふのであつた。

佛もむかしは凡夫なり　我等も終には佛なり　いづれも佛性具せる身を　隔つるのみこそ悲しけれ

と二度繰り返した。祇王が胸中推しはかつて一座涙を流さぬものはなかつた。不敵なる清盛は更に語をついで、今日の程はこれにて慰めも叶へり、これから後は時々に出て來て佛を慰めよと命ずるのである。酷い話である。彼は人の心といふものを持たなかつたのであらう。或は

寧ろ人を苛めて快感を感ずるといふ變質的な所もあつたのかもしれない。

祇王はその面目丸つぶれ所のことではなかつた。彼の女はその心のうちさへも何等いたはられなかつた。その神經は揉み苦茶にされたのである。彼女は家に歸つて泣いて倒れた。あゝかかる憂き目を見るよりは寧ろ死んだ方がと歎くのであつた。祇女もすつかり同情して、それならば私も一緒に死なうといひ、母も亦子供二人に死なれてはと其後を追ふといふ。何といふ不幸なことか。祇王は自分の悲しみのために母を死なせることの罪深さを悲しみ、死を思ひ止まる他なかつた。かくして都にあれば再びかゝる目にも會はう。今は都の外に離れんとて、祇王廿一にて尼となり、嵯峨の奥なる山里に柴の庵をひき結び、念佛三昧の境界に入つた。祇女十九、母閉四十五、諸共に尼となり、只管に後世を願ふのであつた。

このやうに祇王は愛せられては一世の美望の的となつたが、捨てられては何等顧みらるゝ所なき一介の道具にしか過ぎなかつた。運命の激變これに越すものもなき有樣である。又何をか頼まん、彼女が佛門に入るのも淺からぬ因緣であつた。

然るに秋の或る夜、ほとほと柴の扉を訪ふ者があつた。晝さへ人の稀な山里に、夜更けて人の氣配がするに魂消えたが、彼女たちは扉を開けると更に驚いたのであつた。訪ふ人とは佛そ

の人であつたからである。佛がかき口説く言の葉には、更に更に彼女たちを驚かすに足るものがあつた。佛は祇王が優しい心意氣に感じて心の底より同情してゐたが、清盛が人を人とも思はぬ無作法さに、どうともすることが出來なかつた。祇王が身の上も、又明日の我が身の上であると思ふにつけ、嘗て祇王が障子に書きつけた歌の言葉が思ひ合はされて、一入祇王に心ひかれるのであつた。此頃密かに人に聞けば尼となつて嵯峨野の奥に佗しく住み給ふといふ、今は矢も楯も堪らぬ、晝は出られぬ身の上故、今宵ひそかに邸を抜け出して、こうして參り來たのであるといふのである。佛は更に言葉をついで、自分も世のはかなさを知つた。何卒これまでのことは許して、念佛三昧の生活を共々にさせてくれといふ。被ぎものを外せば丈なす黑髪は剃り落され、全く樣を變へての尼となつてゐたのである。祇王それを見て驚き、手をとつて泣いた。自分たちは佛に寵を奪はれて、これ迄は怨み心地になつてはゐたが、今はその心の中を知つてそのやさしさに打たれたといつて詫び、これより後は共々に、佛に仕へる同心の者とならうと、かくしてこの奇しき運命に結ばれた四人が一所に籠つて念佛して世を送つたといふのである。

以上が祇王の物語である。平家物語は遂に佛道に入るを以つて本願とする旨の書物であるか

ら、祇王物語も亦その例に漏れるわけにいかないが、こゝに興味ある點は祇王佛共々に白拍子としての社會的地位を自覺して互に他をいたはり合ふ心意氣を持つてゐることである。門前拂ひをくつた佛を呼びもどした祇王の心意氣、白拍子としての張り、みえ、更に嵯峨野に尼となつた祇王に殉じて自らも亦尼となつた佛が心意氣、こゝには掬すべき人生が描かれてゐるやうに思ふ。只徒らに權勢に媚びてその汚辱に翻弄されながら、轉々として何等恥なき當時の上流社會の女性には、殆んど見られない所の、思ひつめた自己の精神の世界を持つてゐたことが見える。意志ある女性としての人間性が見られる。

然も彼女たちは遊女であり、娼婦たるべき白拍子の身の上であつた。それにも拘はらず、そこには弱くはあるが、やさしさが持つ女の清さの感情があり、矢張後世忘れられぬ女性の一人であるには相異ないであらう。

建禮門院

太政大臣平清盛に女德子があつたが、後白河法皇之を子として養はさせ給ひ、承安元年、德子十五歳の時、從三位に叙し、高倉天皇の女御となし、その翌年中宮にあげられてゐる。

かくして德子は清盛が藤原氏に倣つて企てた宮中政策の運勢に乘つて歴史に登場した。清盛はその外戚たることによつて家の繁榮を計らんと願つたのである。德子宮中に入つた時天皇は未だいとけなく、御年十一歳に渡らせられるといふに、清盛は早くも嚴島に詣でゝ德子に皇子御生誕を祈願するのであつた。このやうに德子は歴史の役割を擔つて、一世に赫く時代の花となつたのである。

時は來た。天皇御成人遊ばされて聖壽御十八の時、中宮德子は廿二歳、この治承二年に御懷胎あつて、平家一門が待望の日が來たのである。中宮は出でゝ重盛の邸宅にあつて、御攝養遊ばされたが、皇室の御喜びは申すも恐れ多き極みで、天皇はその安産を祈禱されるに、使を四

十一社七十四寺に遣はし、僧及陰陽博士を禁中に召し入れて祈らしめ、或は大赦を行はしめられて輕囚流人七十二人の罪を免じ給うたのである。

然るにいよいよ御産の時に及び、甚しき御難産であり、衆人等しく心を痛むる中に、或は藤原成親、西光法師、僧俊寛の祟であらうといふ者もあつて、さしも不敵の清盛も憂ひ色にあらはると誌されてゐる。この成親一件とは成親及西光法師が自己の立身出世を平家にしてやられたのを怨み、僧俊寛と鹿ケ谷に會合して平家打倒の謀議を凝したのが、平家に洩れ、治承元年六月に西光は斬られ、成親、俊寛は鬼界ケ島に流された。適々今度中宮御懐胎とあつて成親はこの七月許されて召されたが、俊寛は遂に許されず鬼界ケ島の鬼と化した。依つてかゝる俊寛等の怨みが積るのであらうといふのである。何しろ地獄極樂もまともに有ると思ひ、人の祟りの恐しさは言語に絶してゐるのであるから、如何に威張つてもこれだけは清盛如何ともし得なかつた。ともかくも一大事である。彼は嚴島神社をはじめ諸寺諸社に祟を解いて安産あらんことを祈れるは勿論であるが、中宮もまた自ら御使を石清水、平野、日吉に遣はされて祈願をこめられ、それは〳〵非常なる心の痛めかたであつて、平氏一門の痛心は平常心を失はしめる程であつた。當時後白河法皇とは鹿ケ谷の事件以來疎隔してゐたのであるが、清盛を憚つての御心

づかひもあらうが、今では法皇も産室に臨まれて御自ら千手經を誦されるなど、最早天下を擧げての事態察するに餘りがある。

十一月德子漸くにして皇子を産み奉り、言仁親王と申上げた。清盛今やその愁眉を開く所ではなく、得意滿面の時勢が來らんとする。德子は正しくその殊勳者となつたのである。清盛は日頃の願望叶ひしこととて、親王御生誕後一ケ月にして立太子の御儀を行はせられるや、清盛外祖を以て政權を執らんとし、尙院政を聽こし召される後白河法皇と抗爭し、三年十一月には法皇を鳥羽離宮に移し奉り、法皇の親近三十九人の官職を褫ふの暴擧を敢てし、その翌年高倉天皇は言仁親王に御位をゆづられて安德天皇立たれるに及び、いよいよ外戚を以て一世を威壓する時が來り、平家は實に隆々たる家運であつた。當時平家は一族皆朝廷に立つて、一門の公卿十六人、殿上人三十餘人と數へられ「平氏にあらざれば人にあらず」と云はれた。その繁榮が藤原の榮華を凌ぐに至つたのも、これ凡て德子がその契びであつた。そこで養和元年號を上りて建禮門院と申上げる。

世の中が常に同じであるならば平德子は實に果報の女性といふべきであつたであらうが、翻弄されるのが彼女の宿命であつたか、瞬く間に世の中は變つて了つた。清盛の傍若無人の横暴

さに對する指彈と嫉視との間に、源氏が忽ちにして蹶起し、平家が榮華に醉へる間に地方の形勢は徐々として一變せられてゐたのである。

世人はこれを怪まうとはしなかつた。こんなことが云ひ傳へられてゐる。宮廷では、皇子御生誕あれば屋に升り甑を投じ、若し親王ならば南、內親王ならば北といふ故事があつたのに、是の言仁親王の時は誤つて北に投じてしまつたので、人皆是を異としたといふことである。或は又御產に難むの時、德子の母なる時子が之を憂へて親らその占をしたが、譯のわからない言葉を得て心配した。後壇の浦の悲劇にあつて成程と首肯かれたなどといふのも、凡て世人が平家の衰運を當然として見た心理を托したものである。その繁榮を妬む族は些細のことにも何かと附托して、けちのつくことをひそかに願つてゐたのであらう。

それかあらぬか、この時より平家沒落の運勢が現はれ出した。而して治承三年には平家が柱石と賴む重盛未だ四十二の壯齡を以て薨ずれば、清盛の橫暴、平家の繁榮益々昂くして益々人望を失ひ、治承四年二月安德天皇御年三歲を以て皇位に即かれ、今や清盛の野望の達した時運と思つたその得意の絕頂の、時も時、折も折、先づ源賴政は以仁王の宣旨を奉じて擧兵し、やがて源賴朝は伊豆に、源義仲は木曾に各兵を擧ぐるといふ、容易ならざる形勢が見えて來たの

である。

安心しきつてゐた平家の驚愕は一方でなく、維盛大軍を率ひて東に下つたが、一夜富士川の水鳥の羽音に狼狽し、戰はずして敗走し、京都に逃げ歸つて來るといふ、凡そ腑甲斐なき武人ぶりを暴露した。清盛は怒つたがもう追ひつかない。天下の形勢は一變せんとしてゐた。その中を又清盛大熱を病んで焦げ死んでしまつた。時に養和元年、さしも誇りし平家の一族も、もう駄目だ。

壽永二年七月には木曾義仲大擧して京都に迫り叡山に據れば、浮足立つた平家の軍兵は何條のことあらう。折角の宇治瀨多の備へを捨てゝ戰はずして京都に引き返し、今は騷亂の巷と化した京都を後に、先を爭つて西に向つて落ちて行くのである。

清盛の橫暴を再三惡くませ給ふ後白河法皇は、夜ひそかに延曆寺に行幸せられて義仲の軍に投じ給ふ。最早平家最後の時が來た。宗盛はあはてた。即ち今はこれ迄なりと安德天皇を擁し奉つて福原に逃げ、更に一門舟に浮んで九州の大宰府に落ちた。建禮門院またこの時一族と共に舟にあつて西に赴かれたのである。

かくして、九州西國を占むる平氏、畿內北陸に勢力を張る義仲、東國一帶に立つ賴朝と天下

は三分の大勢となつた。勢力伯仲して未だその變易目覩すべからざる形勢であつたから、西に落ちたりと雖も平家は必ずしも往日の威勢がない譯ではなかつた。然るにこゝに天下の戰略家義經現はれ、忽ちにしてこの鼎の足の平衡は破られて、遂に平家滅亡の悲運に遇ふことゝなつた。

壽永三年正月、先づ義仲は粟津で敗死し、平家も一の谷屋島に戰つて敗れ、文治元年三月廿四日、壇の浦の海戰となつた。平家にとつては最後の土壇場だつた。平軍は知盛之を率ひて豐前田浦の沖に陣し、源軍は義經を將として滿珠干珠の島の附近にあつた。この關門海峽は滿干の潮は日に四回あつて、先づその正午頃潮の上に乘つた平軍から戰は開始された。一時は源軍すつかり壓迫されて大いに苦戰となつたが、軈て二時半頃より潮の方向が轉換するや忽ち源軍優勢となり、平氏は遂に壇の浦に追ひつめられて、午後の四時頃、平家の一門は宗盛父子兩人捕虜となつた外は、悉く花々しい戰死を遂げ、この時まで伴ひ來りし平家の女房たちも皆一族と共に海の藻屑となり終つた。

この一門悉く海に沈んだ平家の滅亡は實に落日に雲が映ゆるやうな花々しき最期であつたといへよう。何といふ壯絶さであらうか。この一種名狀すべからざるすがすがしき感懷にひたる

は決して古の軍記作者に限らないであらう。

この時のことである。特に哀れなりしは二位の局が安德天皇を抱き參らせて海中深く入らせ給ひしことである。天皇御歳八歳、年の程よりはませ整はせ給ひ、御かたちあでに美しく御髮黑くふさやかに御背に懸かり給へりと誌され、そのあどけなき御姿を想像するさへ哀情一入深きものがある。一天萬乘の至尊の玉體を以て海中に消えられたのである。建禮門院も今は後れじと、御燒石硯の箱などを兩の御袂にいれ、身を重くなして、水に御身を沈めさせられた。哀れ淸盛の夢も、何の殘る所なく果敢なきことゝなつてしまつた。一門の沒落を眼前に見て建禮門院もこの時如何なる思ひを胸にひそめられたであらうか。これが建禮門院の御最期であることがどんなにか悲しい望みであつたであらうか。然るに平德子、彼女は何といふ運命のもとにあつたのであらうか。女院入水せらると見るや、源氏の士渡邊五島允昵急ぎ海に入つて女院を抱き奉り、昵の郎黨が熊手を以て髮にからませて救け申上げたといふ。

建禮門院は救ひ上げられてしまつた。今は死ぬことさへも叶はで京都に還り給うたのである。女院にとつて誠に口惜しき限りの海戰であつた。生きて殘る者ほど辛らかつた。世は既に源氏となる。今は平家一門の繁榮のあとを弔ふより他に道はない。女院は京都の吉田のあたり、

中納言の法印慶彗といふ奈良法師の許に隱れて、御髪を下され眞如覺と名乘られた。戒師は長樂寺阿證坊の上人印誓だつた。女院は他に物もなければとて、先帝の御直衣を布施に賜はつた。御衣は幡に縫つて長樂寺の佛前にかけたといふ話である。

かくして嘗ては清盛の女として、或は中宮御生母と仰がれし女院も、今や時運非にして居るに所なく尼とならせ給ふ。隨分大きな境遇の變化である。そればかりでなかつた。都近くにあつてその悲運を泣くに堪へなかつたのであらう、更に長月の末に大原の寂光院に入られた。大原は誠に淋みしい里であつた。暮れ方不圖楢の落葉を履む足音をきいて人かと驚いたが、見れば鹿だつたといふやうな山里であつた。女院はかゝる人里離れた山中に、時に御年廿九歳を以て墨染の衣を纏つて隱遁されたのである。

誠にかよわき女の身こそ哀れである。後白河法皇も御心を察せられて、一度は訪ねて慰められんとは思召されたが、鎌倉を憚かつて果し得られず、文治二年、補陀落寺行幸にかこつけて夜をこめて大原の庵を訪れさせ給ふ。これが謠曲や平家物語に有名な「大原御幸」の一節である。

「かくて春過ぎ夏來つて北祭も過ぎしかば法皇夜をこめて大原の奥へ御幸なる……」

と書かれた文章は、風趣ある庵室と、その哀れなる生活ぶりを書き傳へて、誠に千古の名文である。建禮門院が今以てその哀れな人生を顧みられ同情されるのも、實はかゝつてこの名文に存するともいへるかも知れない。御年召された法皇の慈愛に充ちた御眼ざしと、若くして髪を下ろされた美くしい女院の悲しげな面指しと、この人里離れた山中での御出會ひがどんなであつたか想像するに難くない。平家物語に誌されたその名文の一節をこゝに書き加へてその狀況を想ひ見るとしよう。

「西の山の麓に一宇の御堂あり、即ち寂光院是なり。舊ふ造りなせる泉水木立、由ある樣の所なり。蕊破れて霧不斷の香を燒き、扉落ちては月常住の燭を挑ぐとも、かやうの所をや申すべき。庭の若草茂りあひ、青柳絲を亂りつゝ、池の浮草浪に漾ひ、錦を暴すかと謬たる、中島の松にかゝれる藤波の裏紫に咲ける色、青葉交りの遲櫻初花よりも珍らしく、岸の山吹咲きみだれ、八重立つ雲の絶え間より山郭公の一聲も、君の御幸を待ち顏なり……

……

法皇はこの庵に立ち寄られて、人やあると召された。森閑として返事もない。やゝあつて老い衰へた尼が一人出て來て、女院には只今この上の山に花摘みに入らせ給ふと申上げる。生憎

のお留守であつたが、この老尼が故少納言信西の女阿波の内侍であつたには法皇も只々夢かとばかり思召されるのであつた。庵の中を見渡せば一間には來迎の三尊をかけ、傍の御寢所とおぼしき所には、竹の御竿に麻の御衣紙の御衾などがかけられてゐる。日日の念佛の程も察せられるに、やゝあつて上の山より濃き墨染の衣を著た尼が二人、岩の懸路を傳つて下りなやんでゐるのが見うけられた。法皇があれは如何なる者かと仰せられると老尼涙を抑へて、花筐臂にかけ岩躑躅取具して持たせ給ふは女院にて、又一人の爪木に蕨打添へて持つてゐるのが大納言の佐の局と言上した。

何といふ身の變り方であらう。法皇もそゞろに感慨あふれて見守り給へば、かの女院も亦、はからざる御幸を受けて茫然として立たせ給ふと書かれてゐる。頗る詩的な、或は劇的なる光景とこそ申すべきであらう。

この山里にこの風情、正しく大原御幸は一篇の詩である。女院と法皇は互に往事を語つて、衣の袖を絞り給ふもふさはしき景色であらうか。平家物語は遂に佛道の書物である。常に因果を說き無常を歎く、こゝに阿波の內侍をして佛の道を說かしめ、又女院をして「六道」を說かしめてゐる。畢竟は著者の說教に止まるのではあるが、しかし我々は女院が物語る世の有爲轉

變に會つて窘迫汚辱を歎かるゝのを見ることが出來る。そうしてそれは、世に在りながら六道を經驗するを得た身の果報を述べて極樂往生をことほぐかに思はしめる。こゝに我々は建禮門院が單に愚痴の一生を寂光院の庵室に生きたといふよりも、更に佛道の歡喜を持つてゐたらうことが察せられるのを何よりも女院のために祝福したいと思ふ。

かくして夕陽西に傾き、法皇還御あつて、趣深き御幸の一日は暮れたのである。

女院は建久二年二月中旬遂に身まかる。御年五十七歲。女院には次のやうな歌が誌されてゐる。

この比はいつならひてか我が心大宮人のこひしかるらん
いざさらば涙くらべん郭公われも憂き世に音をのみぞなく

と、淋しさやる方なき御境涯であつた。

靜御前

今も昔も我等が祖先の中で最も人氣のある英雄は九郎判官源義經と、太閤豐臣秀吉である。微力なものより立つて、忽ち天下を風靡したが、數奇な運命のもとに、あはれの最期に終る。それに敵役たる賴朝家康と相對してその颯爽たる英雄の末路をあはれむのである。秀吉は明治になつて、所謂大阪ものとしての豆木によつて大いに天下の少年に味方を得、義經は室町時代のお伽草子によつて天下の同情を集めた。わが靜御前も亦義經とのゆかりに於いて天下誰一人とて知らぬものはなき有名な白拍子となつた。

靜は二條帝の永萬元年讃岐國淡路の志津賀に生まれたので靜御前といふと傳へられてゐる。後京に移り住んだ。母は磯の禪師と云ひ、讃岐國大川郡小磯の人で、後鳥羽院の時藤原通憲に從つて白拍子といふ一種の舞曲を始めた人であるといはれ、靜も共に習ひ覺えたといはれる。白拍子の起源なんて後世附托する所であるから、何處迄信用のある說かは問題にならないが、

ともかく靜は美しく且つ舞の上手な白拍子であつたことは確かなのだらう。

「白拍子といふのは平安朝末期に「うかれめ」についで起つた一種の遊女である。「うかれめ」のその起源を尋ねると、もと奈良朝の時代には采女といふ制度があつて、諸國より美人を朝廷に徵集せしめた。一種の官女だつたが、それが段々と墮落して娼妓化した。又地方にも娼婦が出現して遊女、傀儡師等が現はれて遊行しつゝ客の枕席に侍した。平安朝に入ると支那風俗が隆盛となるにつれて支那的な婦人蟄居の風が起り、娼婦はかくして酒間に斡旋する專門的職業婦人となつた。これが「うかれめ」で攝津の神崎蟹島江口等に群居し、世の需要に應じて益々擴がつて行つた。彼女たちもはじめは名門の子女で、貴族に媚びてゐたが、保元平治となり、戰亂に乘じて武士が勃興するや、勢力は武家に集まるに從つて相手は武士に變つて來た。これ迄は和歌に堪能であることが「うかれめ」の技能だつたが武士にはそれでは仕方がなかつた。かくして武士に喜ばれるやうな舞が出てきた。これが「うかれめ」に次いで白拍子が起つた次第である」

藤原通憲が磯の禪師に舞はしたのは、白き水干に長袴を穿ち、烏帽子を引入れ太刀を佩いて舞ふものであつた。それで白拍子と名付けたと傳へてゐる。祇王の項に、はじめは水干に立烏

帽子白鞘巻を佩いて舞つたので男舞といつたが、中頃より烏帽子刀を除かれて水干ばかりを用ひたので白拍子と名付けられたといふ平家物語の言葉を書き誌したが、このやうに太刀を佩いたり男舞といはれたやうに活潑な男性味ある舞だつたと思はれる。白拍子が武士の間に歡迎されたのも遇然ではない。ともかく一種の藝妓の如きものであつたが、相手が武士だつただけにこれ迄のうかれめなどゝは異なつて酒間の斡旋にも一種の心意氣の風が起つた。これは誠に注目に値する現象で、當時の上流貴族の婦人にはこの心意氣が寧ろ欠けてゐて、男性の翻弄に委かせて媚を呈し、或は壇の浦に敗れた平家の女房が源氏の軍兵のために玩弄されたのが、室、八島、神崎あたりの私娼窟に投じたといはれるのは有名な話である。かういふ中にあつて身の卑しい白拍子の間に却つて婦人の道を履み心意氣高尚なものを見ることは、恰も當時の公家の道徳と武家の道徳との相異が、こゝにくつきりと白拍子にも現はれてゐたやうで、寔に愉快なことである。わが靜御前も亦このやうに心意氣の高く香る白拍子であつた。

「義經は兄頼朝の指圖で、河越重頼の女を妻としてゐた。彼女は義經と苦樂を共にしたが餘り世に知られず、然るに靜と義經の悲戀物語は、鎌倉時代これに越すものなき華やかな物語となつた。それは義經の名高きによるばかりでなく、靜自身が一世一代の名優だつたからに依るの

である。」

義經は無類の戰略家だつたが、頼朝とは仲が悪かつた。はじめ範頼と共に鎌倉の軍勢を以て壽永三年には義仲を京都に討ち、直ちに長驅して平家を一谷に陷れた。その武功赫々たるや頗る朝廷のうけもよろしいので、頼朝は義經を憚つて追討の大將たることを解任してしまひ。範頼ひとり追討使として西に向つたが、彼は知盛の術中に落ちて背後を斷たれ、豐後に入つて動きがとれなくなつてしまつた。そこで頼朝は止むなく再び義經を立たしめた。義經忽ちにして風雨をついて屋島を落し、平家を壇の浦に全滅せしめて了つた。これが壽永四年即ち文治元年である。義經が神出鬼沒、疾風迅雷の戰略は、その名聲天下に鳴つたのである。

このやうに義經の出現は華やかであつた。

「かゝる間に於いて白拍子靜は義經の寵愛を受くる所となつたものらしい。」平家物語によると義經は平家滅亡後頼朝の不興を買つて、遂に義經暗殺のため、土佐坊昌俊が鎌倉から上つて來た。その時判官は靜といふ女を寵愛してゐたと書き出されてあるに過ぎない。ものゝ本に載る所このやうに唐突として彼女は出現する。白拍子の如き身の上であつて見ればさもあらんかと思ふ。

頼朝義經は當時頼朝反對の朝臣があつてその一味の策動もあり、その上に頼朝と惡く、且つ義仲と行を共にした源行家が義經を頼つてきたことが、最後の決裂になつた。この文治元年十月初旬には梶原景季が京都より歸り、頼朝に讒して、義經虚病を使つてゐる樣尤も怪しむべきことを言上したので、頼朝も今は行家のみでなく、それと同心と認むべき義經を誅すべきことを群議するに至つた。土佐坊昌俊この時進んでその暗殺の役目を引きうけてゐる。一方義經も梶原景季の密偵を察し身の向背を分明せねばならなくなつてゐた。そこで十一日十三日と再度に亘つて仙洞御所に參内し、事情を具陳した。行家が關東に背いて謀反を企つ故、それを誅すべきの旨頼朝より達しがあるが、何の過怠あつてか罪なき叔父を誅されようか。義經とても平氏の凶惡を退け世を靜謐に屬せしむ。然るに兄頼朝はその酬を存ぜずしてたばかつて殺さんと謀つてゐる。今やその難は遁れ難し、即ち己に行家に同意した旨を述べ頼朝追討の官符を賜はりたいといふのである。

このやうに事情は切迫してゐた。かゝる所に十月十七日土佐坊昌俊は京都に着いた。頼朝は義經に油斷させようとして僧侶の昌俊を選んだのであるが、早くも義經の看破する所となつて六條室町の館に昌俊を呼びつけて訊問した。昌俊は熊野詣に參りしにて決して別に他意なきこ

とを陳辯これつとめた。遂には起請文を何枚も書き、或は水に浮かして飲んでみせたり、大分冷汗を流したが辛うじて己が宿に歸へることを許された。今は躊躇すべからずとて夜のうちに義經を襲はんとした。

一方義經はその夜何分にも不安に思つてゐた。側についてゐた靜も矢張り氣になつて、何となく表の方が騒がしいが變事でもなければいいがと心配し、禿二人に樣子を探りに行かせた。心配は眞實となつた。禿二人は歸つて來ない。そこで更に女中一人を遣はした所、息をきらして歸へり告ぐる所によると、二人の禿は昌俊の宿の幕の外に斬られて居り、幕の中では鞍を置いた馬が數十頭出動の準備をしてゐるといふのである。かくと義經に告げられた。義經は怒つた。彼は靜の進める甲冑弓矢に身を固めて今やおそしと待つ所へ、昌俊六十騎ばかりにて推し寄せた。吾妻鏡によるとこの時義經方の壯士は西の河邊を逍遙してゐたので殘つてゐた家人は幾ばくもなかつたが左藤四郎兵衛忠信等相具して、義經自ら門戸を開いてかけ出して攻め戰つた。行家此事を聞き傳へ、後面より來援し相共に防戰す。乃ち少時にして昌俊退散すとあつてこの土佐坊の暗殺は不成功に終つた。

土佐坊は身を以て逃れたが、廿六日その家臣三人と共に鞍馬山の奥より義經の家人に探がし

出され、六條河原に梟首された。この物語は義經記や平家物語に面白く書かれてゐる。そうしてこゝに初めて登場した靜は決して只の娼婦ではなかつた。思慮もあり、氣轉も利く女性であつたことが先づ一段と興味を惹く所であらう。かくして靜は義經の悲運と共に世に知られてきこゝに於て、義經賴朝の間柄は公然と全く斷絶してしまつた。義經は自衛のために起たねばならなくなつた。遂に十八日に至り後白河法皇に賴朝追討の院宣を强請し奉つた。賴朝之を聞きて憤激し、將に天下の大事は至らんとした。今迄義仲の時も平家の時も賴朝は動かなかつたが今度は一大事である。彼自ら陣頭に立つて義經を討つといふことになつた。然しながら義經はともかくも天下の人氣者であり鎌倉武士の間にも相當崇拜者があつたらしい。吾妻鏡の十月廿四日の條を見ると、この日賴朝は自若として南御堂の供養を終つて歸館の後義盛景時を招いて、明日は上洛の覺悟と軍兵を聚めしめた。その夜半迄に群參の御家人は千葉常胤以下二千九十六人あつたが、直ちに從つて上洛すべき由を申出るもの朝政朝光以下五十八人と誌されてゐるのを見てもわかる。賴朝自身出馬は當然迫まられた策略だつた。彼はかくして衆論を一にして、廿九日鎌倉を立ち、十一月一日駿河國黃瀨河の驛について、先づ京都の樣子を見んとてこ

こに屯した。

義經は確に天下無雙の戰術家であつた。然し彼は奧州より出でゝ別に手兵の大軍を擁してゐたわけではなかつた。平家追討の際でも主として鎌倉勢を引率してゐたのであるから、此際かかる事態に立ち至つては義經兵を聚むるの他はない。そこで行家と共に一旦西海に去つて兵を集めんとし、この三日遂に京都を落ちた。從ふ者二百騎ばかりであつた。こゝを見ても關東と義經とは其勢力に雲泥の差があつた。義經の悲運は既に見えてゐるとすべきであつたらう。義經は河尻で攝津の多田行綱を討つて血祭にあげたが、六日大物濱より船に乘つて西海に赴かんとする時、疾風俄かに起つて逆浪船を覆ひ、進むことが出來なかつた。これが義經の運の盡きるときであつた。こゝに軍卒分散してしまひ、義經に從ふ者纔かに四人、所謂伊豆右衞門尉、堀彌太郎、武藏坊辨慶並びに妾女字は靜一人也と吾妻鏡に載せられてゐる。「このやうな時にまで傍離れずにつき添つてゐた靜はよほど義經の寵愛をうけてゐたものであらう。」都を落ちる時は靜に狩裝束をさせ、又他に四人の白拍子と共々十一　一つ船に乘つたと義經記には誌されてゐる。その夜天王寺のあたりに一宿して、こゝより跡をくらまして逐電しなければならぬやうな運命に落ちてしまつた。

かくして舞豪は靜御前の方に廻つてきた。賴朝は義經等難船して逐電したと聞き鎌倉に歸り更に義經追討の院宣を賜はり、草の根を分けても探がし求めやうとするのであつたが、義經かくれて皆目知られない。そのうち義經は吉野山に籠るといふ噂が聞えてきた。そこで吉野の執行は惡僧共を集めて、日來山林を搜したがその在所をつきとめ得なかつた所、この十七日の夜に一婦人吉野山藤尾坂より下つて藏王堂に來た者があり、その姿甚だ疑はしいので衆徒見咎めて執行の坊へ連行して子細を問ねた。彼女は靜だつた。その語る所によると、大物濱より義經は此の山に來て五ケ日逗留してゐたが衆徒蜂起の風聞を聞き、義經は山伏の姿となつて逐電した。その時別れに臨んで、數多の金銀財寶を靜に與へ、雜色男等を付けて京都に送らんと欲したのであるが、彼の男共その財寶を奪つてこの深峯雪中に靜を棄てゝ逃げたので、靜はこのやうにさ迷ひ來たのであるといふ。さしもの愛妾靜も落魄の義經と別れねばならなかつたのである。一方行方不明の義經のありかを知るには靜を捕へたことは一樓の手蔓であることは知れてゐる。さらばといふので不愍ではあつたが吉野執行は靜を都に送りとゞけた。北條時政は十一月下旬に上洛してゐた。

然しながらその後も巧みに地下にもぐつた義經はその在所を人に知らしめなかつた。義經の

行方がわからなければわからない程靜は益々世の視聽を集める身の上となつた。そこで鎌倉でも靜を叩いて口を割らしめようと思ひ、時政に命じて鎌倉に送らしめた。靜は文治二年三月一日鎌倉に到着し、母の磯禪師之に伴ふて、安達新三郎の宅にはいつた。數日して靜は召されて俊兼盛時の訊問を受けた。嘗て時政は靜の口狀を飛脚を以て報じてゐたが、その文面によると義經は天王寺より逐電したが、その時に日を約して今一兩日こゝで待つがよいといはれたが、その約束のやうに馬を送つてきたからこれに乘り、何處か知らぬが三日の旅して吉野山に來、彼の山に逗まること五ケ日逐に別れて其後は行方を知らない。靜は深山雪を凌ぎ、辛うじて藏王堂に辿りついたとあるが、大體吉野山に逗留といふのが甚だ以て信用出來ないとかういふ所から訊問がはじまつた。そこで靜が答へるには逗るといふもそれは山中ではない。當山の僧坊だといふ。義經は大衆蜂起すと聞いたので其處より山伏の姿を以て大峯に入るといつて山に入つた。かの坊主僧之を送つたが靜も亦慕つて一の鳥居のあたり迄來た所、女人禁制である、女は峯に入つてはならぬと彼の僧侶がいふので、これよりは京の方へ趣かうとした。此時、雜色等が財寶を取つて逐電したから藏王堂に迷ひ出たのであると答へた。そこで更に重ねて訊問した。然らばその坊主僧名は何といふかと尋ねると靜の答はすつかり忘却してしまつたと申す。

どうも手のつけやうがない。凡そ京都より申送つて來た旨とこの口狀とは頗る相違する所あつて、これはどうでも法にまかせて訊問せねばならぬと頼朝から仰せが出る有樣で、定めし靜も嘘を申立てゝゐるのであらうかと思ふのであるが、義經の在所を知らないと云ひ切る以上どうにもならないのであつた。大の男がか弱き女をとつちめて痛めつけながらも始末に困じてゐる樣子を思ふと寧ろ滑稽な位ではあるが、遂に義經のありかについて何等の暗示をも與へしめなかつた靜の怜悧さは尙一入である。當時義經は、吉野から多武峯に入り、更に十津の鄕に向ひ奈良の興福寺に或は京都の所々に、鞍馬、仁和寺や院宮や、攝政基通の家等に潛んで、文治三年四月には奥州の藤原秀衡のもとに頼つてゐた。だから靜詰問の頃は何處をどうしてゐたか靜自身も全く知らなかつたことであるだらうが、このやうな女の口を割ることによつてせめても の手蔓を得ようとあせつた鎌倉の困惑の程も知られて却つて面白い話である。

最早仕方がない。靜には用はない。京都に送り還へすべきであるが、當時靜は義經の子を身孕つてゐた。そのためその御產の濟む迄とゞめられることになつた。この滯在中に彼女の名が一世に響き、後世忘じ難き印象深き事件があつた。それは靜が八幡神前に於いて舞を舞つたことである。吾妻鏡卷六、文治二年四月八日の靜を召して舞曲御見物といふ項によつてその次第

を書かう。

この日頼朝及政子は鶴丘の宮に參詣した。その序を以て靜を廻廊に召し出し、舞を舞はしめようとされた。もともとこのことはかねてより仰出されてゐたのであるが、彼女は病氣だといつて參らなかつた。身賤しき者であるならばとかくの返事もあるべきではないが、いやしくも義經の妾である。卒然として衆人環視の場に引き出さるゝこと頗る恥辱に思ふといつて日頃內內には澁つてゐたのである。然し靜はともかくも天下に聞えた名人である。適々參向したが、歸洛も近きにある、その藝を見ずに終るは無念であると政子は頻りと勸めるので、こゝに召出され、舞ふて八幡大菩薩の冥感に備へたらよからうとすゝめた。然し靜は義經と別れてゐて愁に堪へないでゐるので、曲を舞ふやうな業は思ひもよらないといつて座についても猶固辭するのであつたが、再三の勸めに遂に立つて眞白の衣の袖をひるがへし歌を歌つた。左衞門尉祐經が鼓をとり畠山重忠が銅拍子を打つて之に和した。靜、先づ歌を吟じ出して云ふには

よし野山みねのしら雪ふみ分ていりにし人のあとぞこひしき

次いで別物の曲を歌つた後、又和歌を吟じた。

しづやしづしづのをだまきくり返し昔を今になすよしもがな

誠是社壇の壯觀、梁塵も殆んど動く可しと書かれたが、その位上下すつかり感動してしまつた。靜の氣持を忖度してみると、賴朝や政子のすゝめによつて彼等の前で舞は舞つたが、然し彼女はそれを彼等に見せる爲ではなかつたのだらう。この源氏の守神八幡宮にその戀しき夫義經の無事と兄弟平和を祈願せんとして神前に舞つたのであらう。誠にその心事やさしき中に毅然として賴朝の前をはゞからなかつた所が見えて、胸のすくやうなことであつた。然し賴朝は怒つた。八幡宮の寶前で舞を舞ふのであれば、よろしく關東萬歲を祝すべきであるに、この賴朝の目の前で反逆の義經を慕ひ、別曲を歌ふとは怪しからぬといつてむくれた。その時政子が靜かに賴朝をなだめたしなめた。政子が云ふには、君流人となつて伊豆に坐す時、妾と芳契ありと雖も、父時政は時の平家を怖れて潛かに引き籠められしが、妾は尙君に和順して、暗夜に迷ひ深雨を凌いで君の所に參つたことがある。又君が石橋山の戰場に逃れ出でられた時、獨り伊豆山に殘留してゐたが、君の存亡もわからず日夜魂も消ゆる程でした。その愁ひをいふならば今の靜の心と同じである。義經多年の好意を忘れて戀慕しないならば、貞女の妾とはいへまつすまい。だからこの舞も、外にあらはるゝ風情に寄つて、中に動く眞心を出したのである。尤も幽玄と謂ふべし。抵げて賞翫されよと條理を盡し、貞女の譽を賞したので、賴朝も成程と怒

るのを止した。そして着てゐた衣を脫いで簾の外に出して靜に祝儀とした。これは「うかれめ」に對する當時の習慣だつた。

これが有名なる八幡神前の靜の舞であつた。夫の悲運を思ひ、天下の大勢を思ひ、神に額づいて夫を思ひつゞけた靜の哀愁は、正しくこの際好箇の小說である。又特にこゝに政子の女らしい心遣りが注目される。政子はやさしい女であつた。彼女は靜に同情してゐた。その實情その後度々靜に對して現はれてゐるが、こゝで政子が一旦夫と定めた男に操を立てることの貞女のほむべきを强調してゐることは誠に立派である。當時の公卿の子女にはこの思想がなかつた。武士的婦道はいみじくもこゝに宣言されてゐるといへよう。然も靜御前が白拍子の身を以てしかも貞女の姿であつた。八幡神前の歌舞一篇が後世人口に膾炙するのは當然なことである。

靜はこの點流石に立派であつた。この舞の後、五月十四日、工藤祐經、梶原景茂、千葉常秀等の面々が若黨をつれて靜の旅舍で酒盛をした。郢曲妙を盡し、靜母磯禪師又藝を施すといはれるから中々盛大なものであつたであらう。この夜景茂は數杯を傾け、亂醉して、艶言を靜に通じた。靜はそれを聞いて涙はらはらと落していふには、義經は鎌倉殿の御連枝である、吾はその妾である。お前たち家人の身にとつては吾等は決して普通一通の男女とはいへないのであ

る。若し義經にして浪々の身ならずば、お前たちの對面も叶ふまじき身分ではないか。況んやこの儀に於いておやと慨いた。景茂恐らく一言も無かつたであらうが、靜の心意氣正に見るべきものがある。妾たりと雖も一旦寵愛を受けたからには凜として犯すべからざる節操を持してゐた。讃むべき哉。

政子の長女に大姫公といふのがある。木曾義仲の嫡子志水冠者義高に嫁いだが、頼朝義仲の不和の結果義高は殺された。大姫公はいたく悲歎して、すつかり憔悴してしまはれたので政子も色々と心配し、大姫公も南御堂に參籠などしてゐた。召に應じて靜も大姫公の爲に舞を舞つたりしてゐる所を見ると、戰爭による身の不幸を共にかこち合ひ、なぐさめ合つたものと見える。武家時代ほど婦人の不幸なことはないのである。一家のため、武家的勢力のため、婦人たちの一生は只に道具に過ぎなかつたからだ。婦人は寧ろ悲慘だつた。この點は政子と雖もまぬかれなかつた。

遂に靜出産の日が來た。幕中にあつては、若し女ならば靜に與へるもいゝが、男ならば後々のこともあるから、未熟のうちに命を斷つがよからうと評定が出來てゐたが、生れて見ると男であつた。そこで閏七月廿九日、安達新三郎に命じて由比浦に棄てしめた。新三郎は使を出し

てその赤子を請取りに來たと告げたが靜は敢へて子を出そうとしない。衣を纏つて抱臥し叫喚して數刻に及んだ。安達も困つて頻りに責め立てた。母磯禪師は殊に恐縮して、無理に赤子を押し取つて使の者に渡したといふ。實に無慙なことである。嘗て頼朝を生かして置いた爲めに平家は滅亡すべき運命になつた。この二の舞を恐れて赤子を殺したのであらうが、靜の唯一つの命ともいふべき赤子を押取られたその心中や察すべきであらう。これ以上の悲慘事が人生に又とあらうか。此事は政子も非常に悲んで、頼朝に思ひ止まるやうにと宥めたが、遂に叶はずこのやうになつたといふ。

人の宿運誠に豫期し難い。九月十六日暇を給つて歸路についたが、一つに系つて義經の身の爲に艱難の人生を背負ふに至つた。政子大姫公共に憐れと思ひ、多くの重寶を賜はると書かれてゐる。哀れ靜に何の罪科があらうぞ。彼女ほど不幸な運命のものは尠ない。身は微賤な白拍子で、一度は義經の妾として世に時めいたが、今や夫は天下の手配人と化して生別をしなければならぬ上に、愛兒迄も奪はれて、淋しく放逐されんとするのである。同情の涙を禁じ得ない所である。

靜は都に歸つて嵯峨の奥に庵を結び、尼となつたが、幾くもなくして歿したと傳へられる。

義經記では、あけ暮れ持佛堂に引きこもつてゐたが、母にも知らせず髪を切り「天龍寺の麓に草の庵を引き結び、母のぜんじ諸共に行ひすましてぞ有りにける。十九にて樣をかへ次の年の秋の暮には思ひや胸に積りけむ、念佛申し往生をぞ遂げにける」とある。天龍寺といふと足利氏が立てた寺で鎌倉初期とは大分時代がちがふが、ともかく嵯峨のあたりで庵室を結んだが、餘り長生きはしなかつたものらしい。

死場所については異說がある。「成吉思汗は源義經也」のうちに、靜は義經を慕つて奥州に下らうとしたが、途で義經戰歿と聞いて、武藏國栗橋在で尼となり、二年の後死亡したといふ。文治四年九月十五日といひ、こゝに靜の墓もあるといふ。

勿論どの說と雖も確證はなく、恐らく悲慘な末路であつたらうと思はれるに止まる。

尼將軍政子

政子は伊豆の北條時政の長女である。當時蛭が小島に流されてゐた源頼朝と通じ、具さに辛苦を共にした。後頼朝鎌倉に幕府を開くや御臺所として內助の功があり、頼朝は武士の道を立てたといはれ、政子はその婦道を唱導したと稱せられる。正治元年正月落馬が原因で頼朝病んで薨ず。時に政子四十二歲。政子剃髮して尼となり、その二子頼家、實朝の二代、政治上の實權を掌握したが、この間實朝は暗殺されて源家の後流絕えたので、政子は朝廷より皇子を將軍に迎へんものと願へど聽かれず、頼經を迎へて將軍となし、自ら政治を執つて尼將軍と呼ばれ、內外の尊崇を受け、北條氏が執權となつた。この以後これが鎌倉幕府の形式となつたのである。その後庄園のことが動機となつて朝幕の間に兵事を起した。朝廷では源家の正統絕ゆるを以て與し易しと思はれたのでもあらうが、未だ關東には源家三代恩顧の將士あり、彼等は政子の一言に激勵されて萬死を誓つて京都に殺到した。こゝに遂に宮闕を犯して三上皇を配流し申し上げ、天皇の御讓位をさへ敢て行つたといふ、我が皇室に對して由々しき一大事が起つ

た、即ち承久の亂である。しかしかくて武家は完全に朝廷を壓して、幕政はこゝに成る。政子はその後五年にして嘉祿元年七月十一日享年六十九歳を以て卒した。

以上が政子の略歴である。將軍の御臺所として更には尼將軍として幕府の重石たり。その一生は實に華やかな活躍であつた。吾妻鏡には、前漢の呂后に同うして天下に執行し給ふ。若しくは又神功皇后更生せられて我國皇基を擁護され給ふかと絶讃を呈してゐる。當時京都にあつては典侍藤原兼子（後の卿三位）が隱然政治を握つてゐたのと相並び、兩女傑であつた。愚管抄では女人入眼の日本國と批評してゐる。

政子は子供の時より一通ならぬ女丈夫であつたことは種々の點から窺はれる。學問もあり思慮にも富んでゐたらうことは、例の妹との夢占ひの物語にも片鱗を示してゐると思はれる。妹の時子が一夜峻嶺に登つて日月を袖にし、手に橘の枝もたわゝに實れるを携へた夢を見た。餘り不思議な夢だつたので姉の政子に話した。政子は昔日華酸媛命が橘を嚙ふと夢みて景行天皇を生み奉つたといふ故事を知つてゐたのでそれが吉夢であることを判じた。そこで政子はその夢を自分の夢にしようと思ひ、妹を欺いて非常な凶夢であるとおどした。吉夢は三年人に告げず凶夢は七月人に語るなといはれる。然るに御身は既に我に語つたから神罰立處に至らうとお

どした。そうして夢には移轉の法があるから我身に引き受けよう。買ふ者咎なく賣る者禍を免る、これが移轉の法であるといつて、唐鏡一枚衣一襲を妹に與へた。

その後政子は白鳩が黄金の文函を銜へ來るのを夢みた。果せるかな賴朝から艶書がきたといふ。これが抑も賴朝と相通ずるやうになつた因緣だと傳へるのである。勿論作り話であらう、が夢に尙呪術を信仰してゐる頗る原始宗教的な風手を殘してゐる。橘といひ白鳩といひ、凡て八幡宮及源氏の象徴であるから後世の者が政子の出世に附托したものに相異はない。だが妹時子よりは故實も知つて居り思慮も辯才もあつたらうことが想像出來る。つまり時子の方が賴朝の妻たるべき條件を持ちながら賢明なる政子が横取りしたといふ何か經緯があるのではないかと疑はしめるのである。また曾我物語には賴朝はその前に伊東祐親の長女と通じてゐたと傳へてゐる。伊東北條の兩氏は賴朝伊豆配流の際の平氏から申付つた監視人だつた。それ故姪小島にあつた賴朝はこの伊東氏に賴つたわけである。適々祐親京都に祇候して留守の間にその長女と戀を囁いた。所がこの長女と仲の惡かつた繼母である祐親の後妻はそれを憤つて祐親に惡口したので、祐親も平氏を慮つて賴朝を殺さんとはかつた。賴朝難をのがれて北條氏に朝つたのである。北條氏に二女があり長女政子は先妻の子、妹時子は現在後妻の子であつた。長女は美

くしかつたが先の伊東祐親の例で懲りたので今度は妹の時子の方へ艶書を送る方が無難だと思ひ、使に安達盛景を出した。彼は、頼朝の眞の意中を察して途中秘かに艶書のつくりかへをして政子に渡したといふのである。

どうもこの話は何處迄信用していいか見當のつかぬ話であるが、ともかくその間に何かあつたことはあつたのであらうか。これがそのまゝほんとの話とは受け取れない、然し當時次のやうな事情があつた。恰度その時は北條時政は京都にあつたが、目代平兼隆とその歸路を共にして、政子を兼隆に嫁する約束をしてきた。爲に政子は父の時政と頼朝の間にはさまつて進退谷つて、遂に一夜家出をして山中に潜み頼朝の所にかくれた。時政も既に頼朝の人物を見拔いてゐたのでもあらうか、政子はかくれて探がしてもわからぬと兼隆にあきらめさせてゐる。だからこのやうな無理をする程政子は頼朝に打ち込んでゐたらしいから、この邊の消息をあのやうな夢物語にまで傳へる起緣となつたものかと思はれる。時に頼朝廿九才、政子は廿一才と傳へられる。

だから政子はそも馴れ初めのその初めから苦勞をしてゐる。そのうち最も身心を痛める思ひをしたのは頼朝の旗擧げであつた。政子は伊豆山にあつたが、その合戰に頼朝は零敗して安房

に身を以て逃れた。その生死をすら知らないといふ有樣で身を削る思ひをした。この時のことを後年鶴岡八幡宮で靜が舞つた時にしみじみ述懐してゐる位である。さもありなんと思ふ。その後頼朝は上總より起つて忽ちにして關八州の曾つて源氏の祖先に恩顧をうけた武士に擁せられて、當時東國の旗頭となつた。後弟範頼義經の來るや、義經の奇策功を奏して、遂に木曾義仲を討ち平家の一門を西海に沈めて幕府を鎌倉に創むるに至つた。

幕府創業の難はつゞいた。この間義經討伐に名をかりて守護地頭を置き、巧みに天下の實權を掌握した。範頼義經を自滅せしめて却つて源氏の根源力を弱めるやうなことにはなつたが頼朝は稀代の政治家であつた。この間に政子はよく内助の功あり、正治元年頼朝不幸にして薨ずるや尼となり、誠に貞女の鑑であつたと稱讃されてゐる。然し大日本史によると「政子性妬忌なり、頼朝之を畏憚す」とある所を見ると、手におへないやきもち燒きであつたらしい。頼朝は割合女色には耽らなかつたやうでもあるが、矢張相當嬖妾を持つてゐた。龜の前、常陸介時長の女、大進局等々名が知られてゐる。だから政子の嫉妬も募つたことゝ思はれる。新田義重の女を頼朝が挑むや、彼は政子を憚かつて急にその女を帥六郎に嫁せしめたといふが、この話など政子の角の程も察せられて、或は實を傳へてゐるかもしれない。然し政子の嫉妬は大日本

史が傳へてゐるやうに惡質のものであつたとは思はれない。閨閥を振肅して婦道の確立をはかつたのであらうと思ふ。賴朝への愛の深さが嫉妬といふ外形をとらしめたものと思ふ。何故ならば政子の情愛深き性質であつたことは幾多の例がある。靜御前が八幡神前で舞つた時、唱歌した和歌に怒つた賴朝を宥めた政子の言葉は、義經を戀慕しないならば貞女の操を忘れたものであらうと靜を辯護してゐる。つまり貞女の觀念が政子には出來てゐて婦道として要求されてゐたのである。人間の情といふものをこの點から彼女ははかつてゐる。このやうにやさしく理に富んだ政子である。それ故この嫉妬云々は、寧ろ意志的な鎌倉期の女性がその心持ちを夫に吐露したことであるかもしれない。平安朝時代の弄み半分で泣き寢入りの女性と異つてゐたことであらう。それは大日本史の出來た江手時代を考へて見る必要もある。封建社會が完成し、女は完全に「家」の附屬に過ぎなくなつてゐた頃では嫉妬は女のすまじきことで、餘り嫉妬深き女は離緣してもいいといふおきて迄ある世の中だから、その道德感から政子を惡く云つたのである。だから政子の嫉妬には事情が異なるかも知れない。しかし、このやうに賴朝忌憚すと迄云はれるには相當やかましい奧方であつたことは想像される。それにしつかりし過ぎてゐて女らしさを缺いてゐた點もあるにはあつたやうだ。

富士の裾野の卷狩の時、幼き賴家が鹿を射止めた時賴朝は大に喜び鎌倉に使者を立てゝ政子に告げた。すると政子は賴家幼きと雖も將軍家の子である。野外に獵して一箇の鹿を得たとて何もわざ〳〵使を立てるにも及ぶまいといつて、たしなめたといふ。どうも事が理に落ちて情を缺く。一寸小憎らしい所があるやうだ。

然し、政子は武家教育法を考へてゐたのでもあらう。こゝに武家の妻としての覺悟が見えるとすべきであらう。この點はよく政子が武士道的婦道の創始者といはれるのであつて、武家に淫蕩を去り嚴肅な家風を起したといへよう。だから、こゝらあたりに功罪半ばする所があるといはなければならない。しかもこの點にこそ政子に我々は感謝すべき所であることを忘れてはならない。これ迄は婦人に節操の觀念はあつたが貞操といふ觀念を高唱したのは實に政子だつたからである。貞操の堅固といふのは日本婦道の心體だからである。

貞操論そのものは議論のある所ではあるが、直接政子に關係した事ではないから他日に讓るとするが、然し、このやうな婦道創設者と云はれた人が、如何なれば賴朝死後我が子賴家が修善寺に殺さるゝを默認し、剩へ實朝の暗殺迄も座視して遂に自分が嫁いだ先の源家を亡ぶるに至らしめたのか。誠に了解に苦しむ所であらねばならない。然しこの解答は一言で盡きる。政

子は北條氏の野望の犠牲となり、時政義時の辣腕の傀儡となり了つたのである。彼女が尼將軍と呼ばれたのも北條氏の代辨でしかなかつた。この武力の世の中に女なぞ最も非力な存在である。彼女が如何に血あり涙ありとも如何ともなし得ようぞ。かくして彼女は後世武家が「家」のためにする犠牲に供せられた女性たちの古き先例となつたのである。如何に封建制度の武士道が抱いてゐた婦道が奴隷的であるかはこゝで云々する迄もないことである。政子にして既にそうであつた。

或人は政子の女傑ぶりに感激してこの間の矛盾を解いて政子を辯護せんものと試みて、賴家はその性格狂燥にして墮弱だつた、その上に病弱で職に堪へなかつたので職を解いた。その修善寺で殺したのも、その外戚比企氏と亂を起さんとした結果であるといひ。實朝の場合は官職しきりに高きに登つた。これは賴朝の素意に反してゐる。賴朝は藤原家及それにならつて亡びた平家を見守つて奢侈と高官を避くべしと考へた。それ故身は左兵衛佐で終つてゐる。然るに實朝は京都風に化して右大臣に迄上つた。だから鎌倉幕府創立の主意に反するからその立て前から政子はその暗殺を默認したのである。彼女は幕府創立の完成が賴朝の素意であると思ひそれに邁進したのであるといつて、彼女の政治家としての立場より說いてゐる者がある。

右の說は辯護のための辯護で何等の意味をもなさない。成程賴家は逸樂に耽つて政治を見ず。安達景盛の妾を横取りして剩へ景盛を殺さんと謀つて政子にたしなまされた程の痴漢ではあるが、彼が兵を集めて立たんとしたには理由がある。賴家の將軍職を解かれた時、政子は北條氏と相談して將軍の職權を二分して、關西三十八箇國の地頭職を賴家の弟實朝に讓り、總守護職と關東二十八箇國の地頭職を賴家の一子一幡に讓らしめんと計劃した。一幡は六歳、實朝は十歳である。これを聞いた比企能員は、これ天下二分は後世動亂の因であると考へ、直に之を賴家に告げた。比企氏は賴家の妻の里であつて賴朝以來の豪族である。若し一幡立つて比企氏外祖を以つて臨まゞ、これ迄の北條氏の位置に代るのは當然である、北條氏は之を恐れて天下二分策を案出したのである、當時病床にあつた賴家は北條氏を怒つて、北條氏を討たざれば源氏危しとて謀る所があつたのである。この密謀を時政に告げた者は誰あらう政子その人である。そこで政子及北條氏は建仁八年比企氏及一幡を殺し、賴家を修善寺に幽閉し、次いで元久元年之を殺してしまつた。こゝに筋道立つた道理は見られない。正しく北條氏野心のために殺されたのであり、政子はその手先であつて、我子の殺されるのを見てゐたのである。

實朝の場合はどうかといへば、彼が京都化して高位にのぼつたのがいけないといふが、それ

ならば當時幕府にあつて實權を握つてゐたといふ母なる政子が、何としてこれを諭すことに全力をそゝがなかつたのだらうか。母として幼少な子供に對して家憲ともいふべきものを敎へ込むことも出來ず、遂にそれで滅亡を餘儀なくされるに至らしめて、却つて幕府のため當然なことをした、しかも女傑だといふやうな議論が成立しては堪らない。これでも人間の母親か。我が子を殺し、我が家を亡ぼし、しかもこれが武士道的婦道か。若しこれが認め得られるといふならば婦道とは何といふ戰慄すべきものであらうか。最早何等の辯護の餘地はないのである。

冗談も程々にすべきである。

實朝が位は頻りに累進して、建保六年に右大臣になつたことは勿論鎌倉幕府の人たちに物議を醸したと思はれる。この機會を捉へたのが北條義時である。彼はその不評判に乘じて賴家の孤兒公曉法師を唆かして承久元年正月拜賀の式の夕方、八幡宮神前に於いて、親の仇だといつて討たしめておきながら、今度は將軍を殺した反逆者だといつて公曉を討つてゐる。內訌によつて、まんまと源氏を亡ぼしてしまつたのである。政子はそれを默認してゐたのである。彼女は北條氏の爲すことに何等嘴をいれる力はなかつたのである。最早彼女は母親とはいへないのである。

嘗て建保四年、實朝が中納言、次いで左近衛中將を兼ねた時、大江廣元が實朝に辭任を勸めた。すると實朝は思ふに只今源氏の統流絕ゆるばかりになつてゐるから我顯榮を極めて家名を擧げたいと思ふだけであると答へてゐる。實朝は北條氏の爲に兄賴家と同じ運命に置かれることを既に覺悟してゐた。當時の北條氏が內外兩面になした工作を見るならば、實朝のこの返答とその覺悟及び今かくして高官にでも登つて置かうといふ悲哀を同情なしに見すごすことは出來ないのである。老獪なる北條氏がこれを以て隱謀のよき機會としたことは容易に首肯出來る所である。こゝで飜つて北條氏が何をしたか一瞥して見よう。實朝は賴家の後を繼いで十二歲を以て將軍になつたが、この時の北條時政のなしたことは言語道斷の仕儀で、賴家の病中既に薨ぜりと稱して、實朝を將軍に任ぜんことを朝廷に奏してゐる位である。更にその妻牧の方は時政と共に賴朝以來の重臣畠山重忠を殺した餘勢をかつて、その女婿平賀朝雅が賴朝と遠緣に當る所より實朝を殺して朝雅を立てんと隱謀した。これは早くも政子の知る所となり、時政は剃髮して伊豆に幽閉せしめ、朝雅も京都に誅に伏して事平いだ事件迄ある。北條氏が源家を主家とも何とも思つてゐなかつた證據はこの通りであつた。

時政の子義時は更に辣腕家であつた。思ふにこの時政剃髮に終つた隱謀はその時機未だ尙早